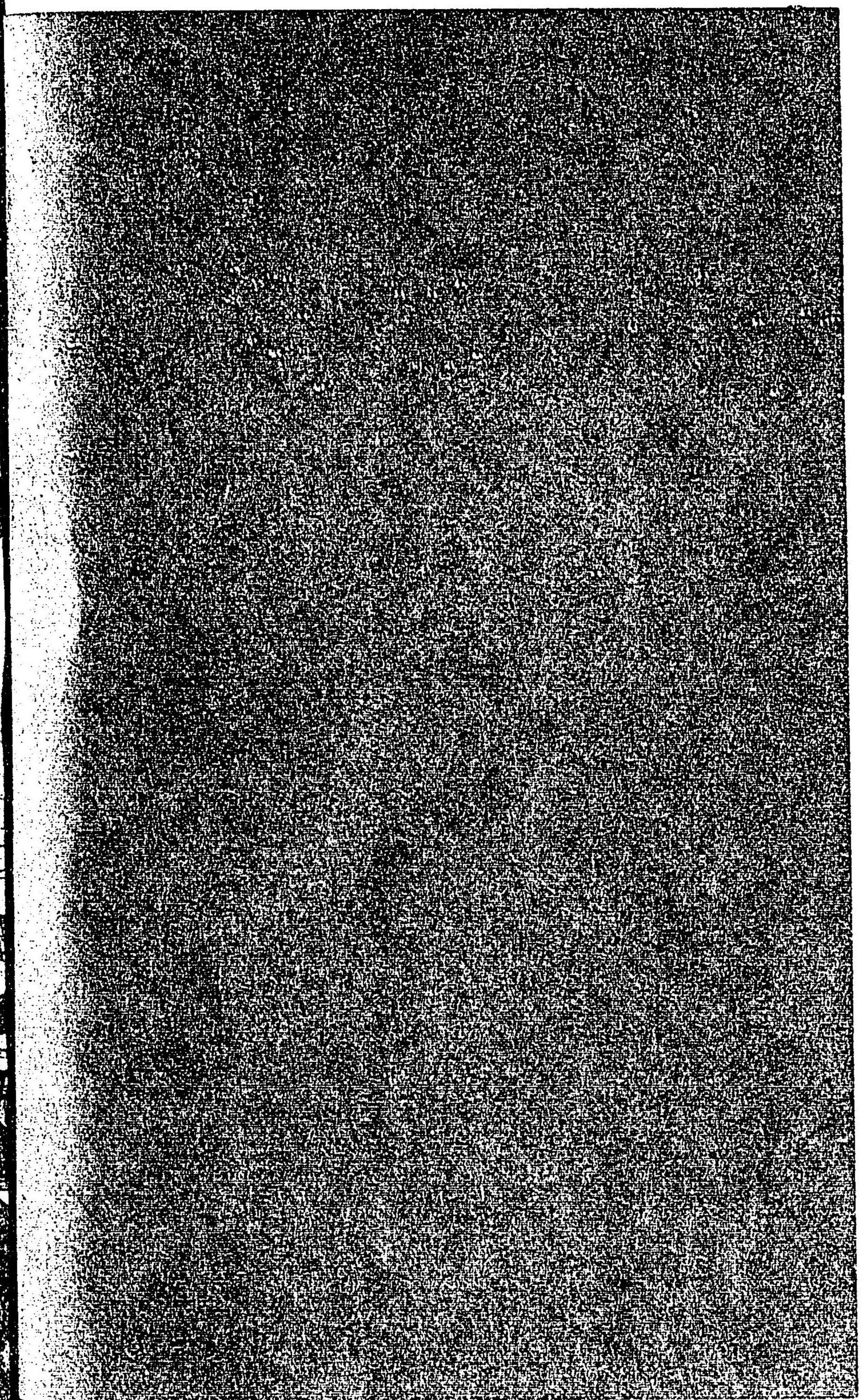
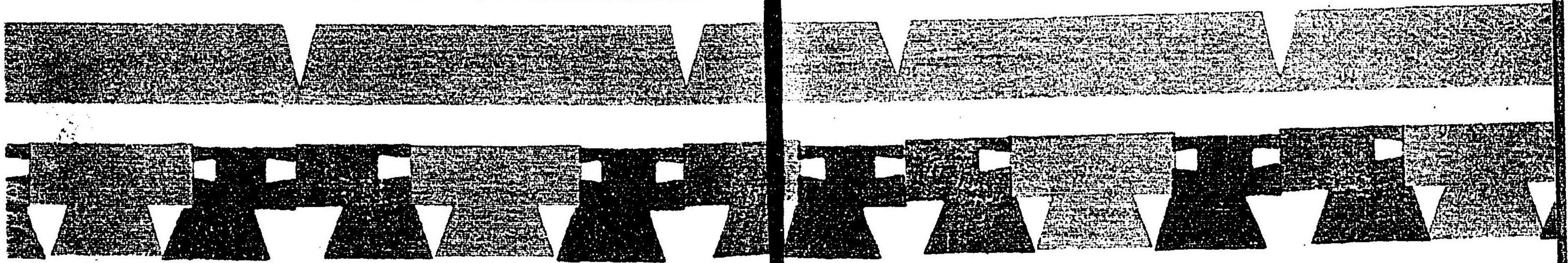
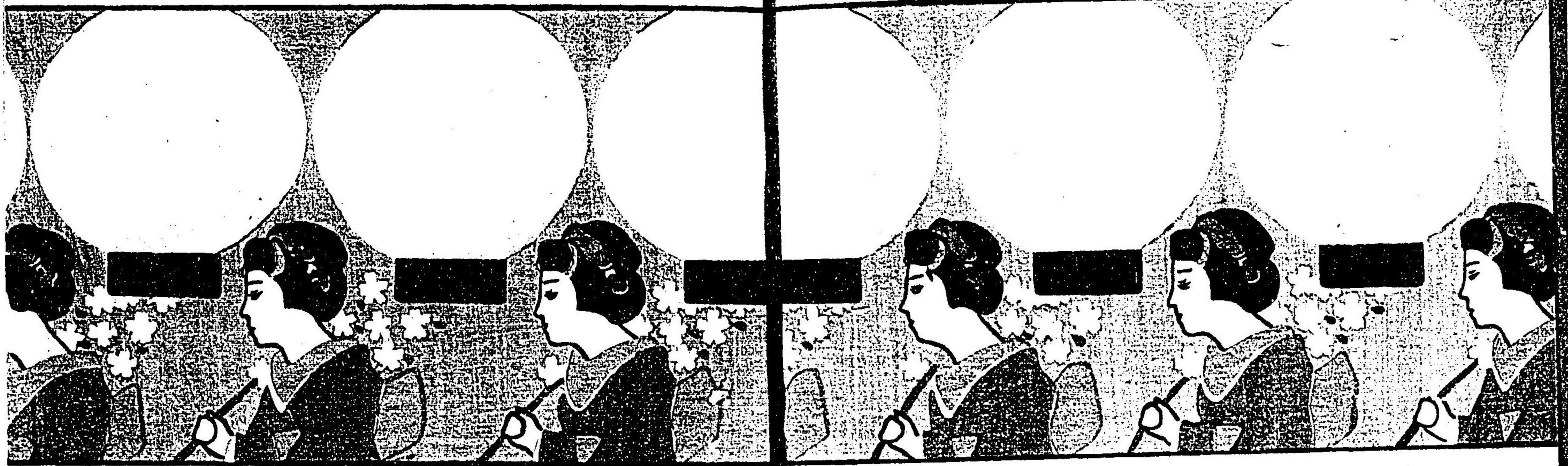


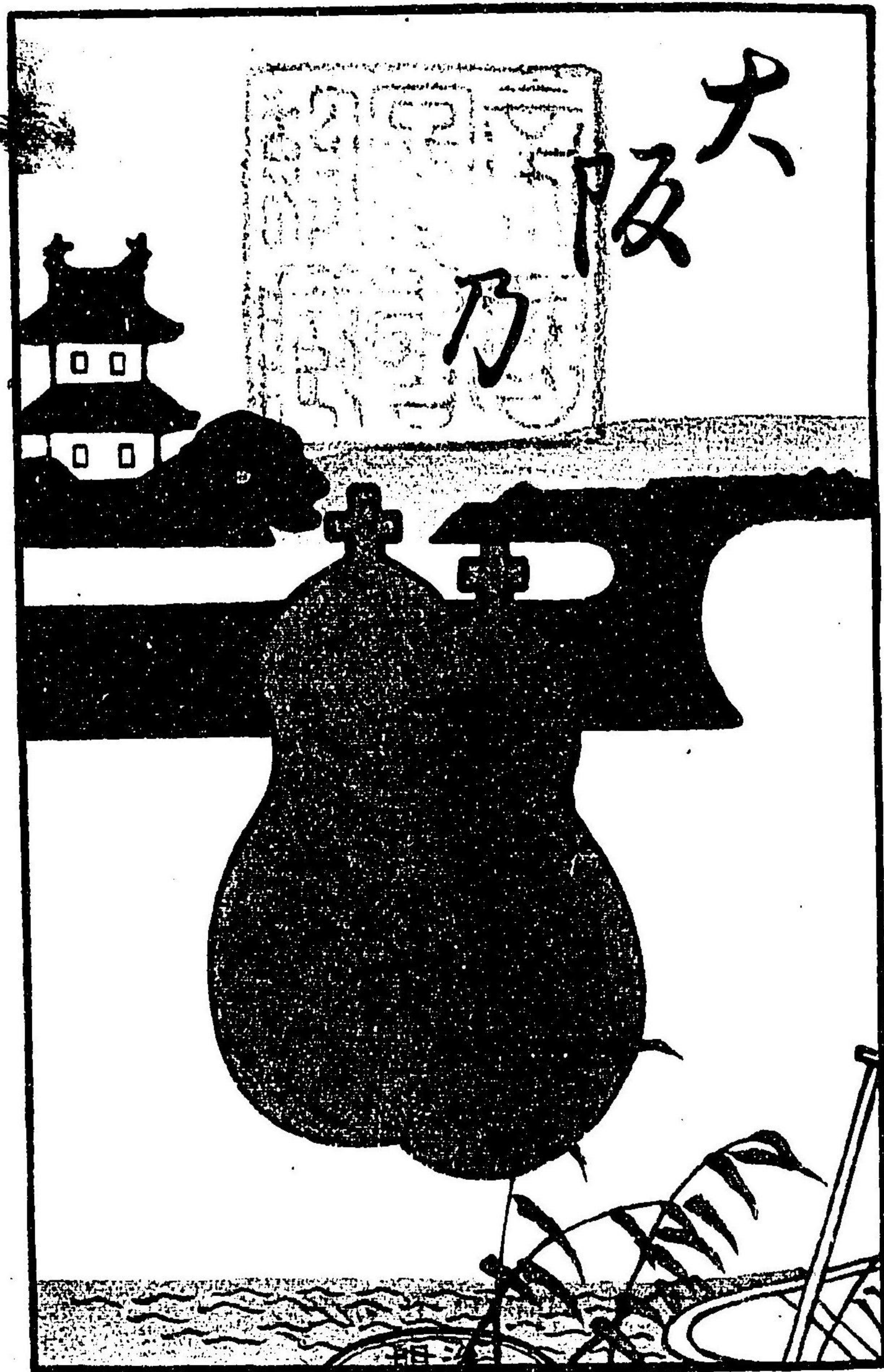
物農肉獸
畫出版大

30
V
29

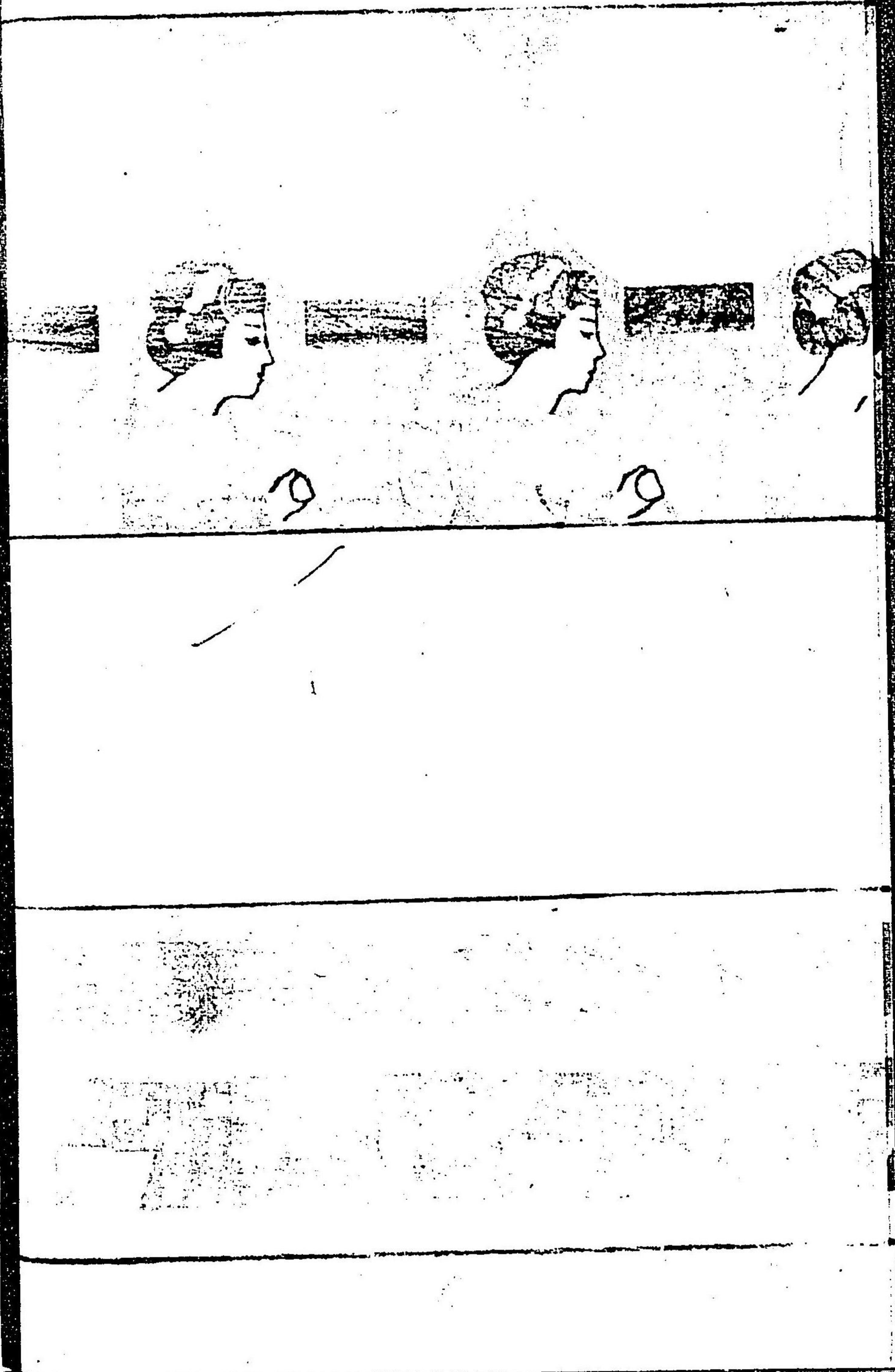


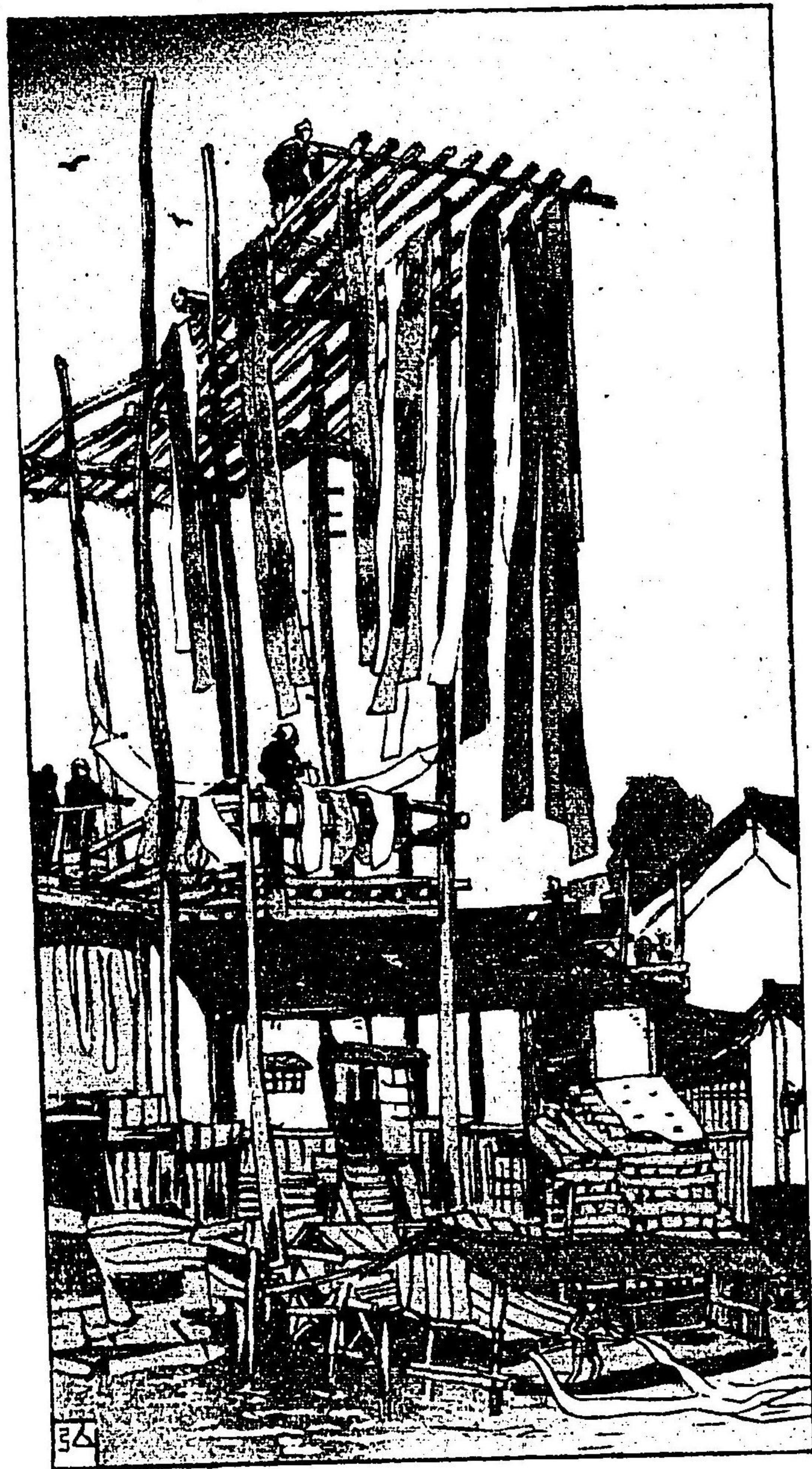


330-



45. 7. 29
内交

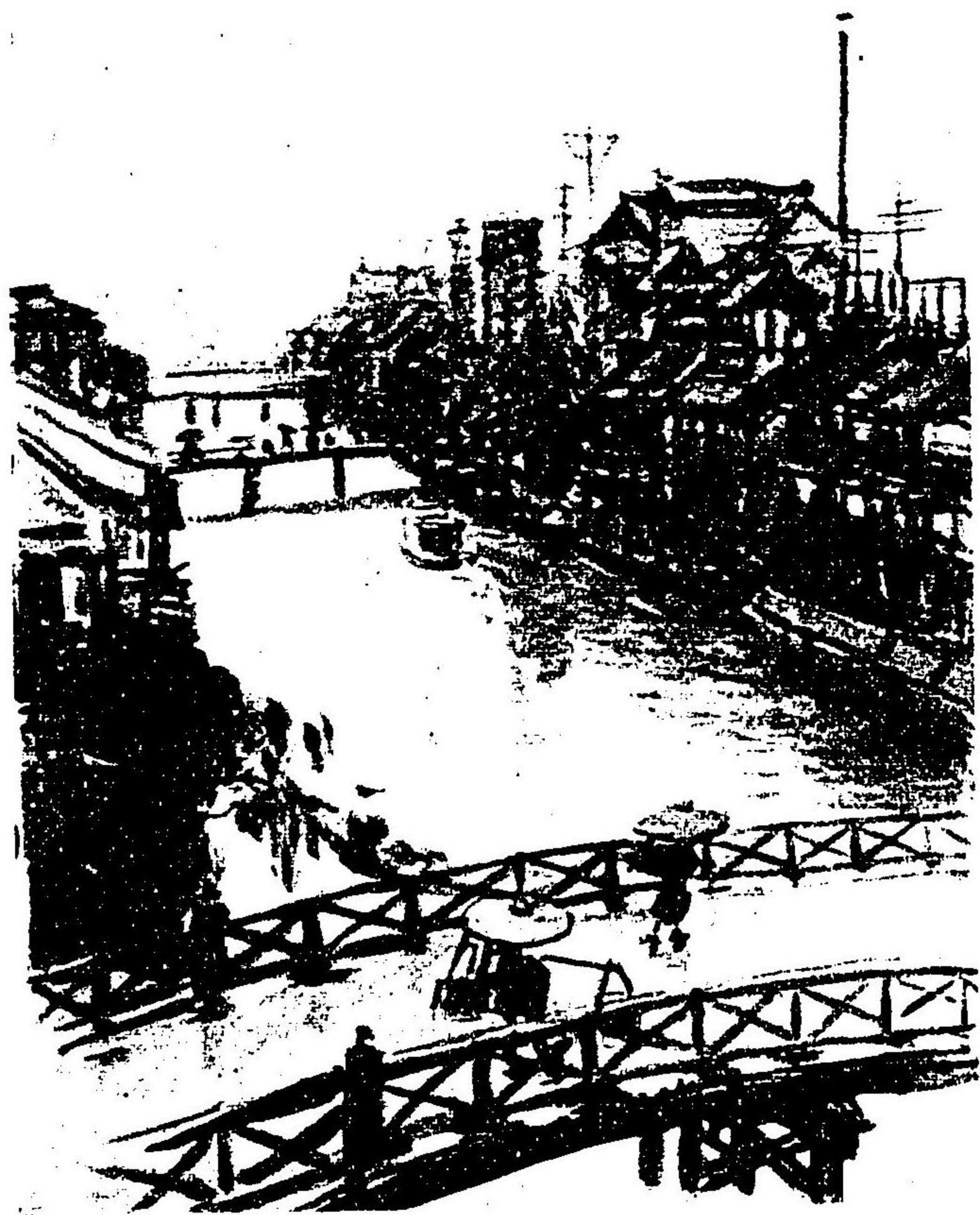






光弘澤中

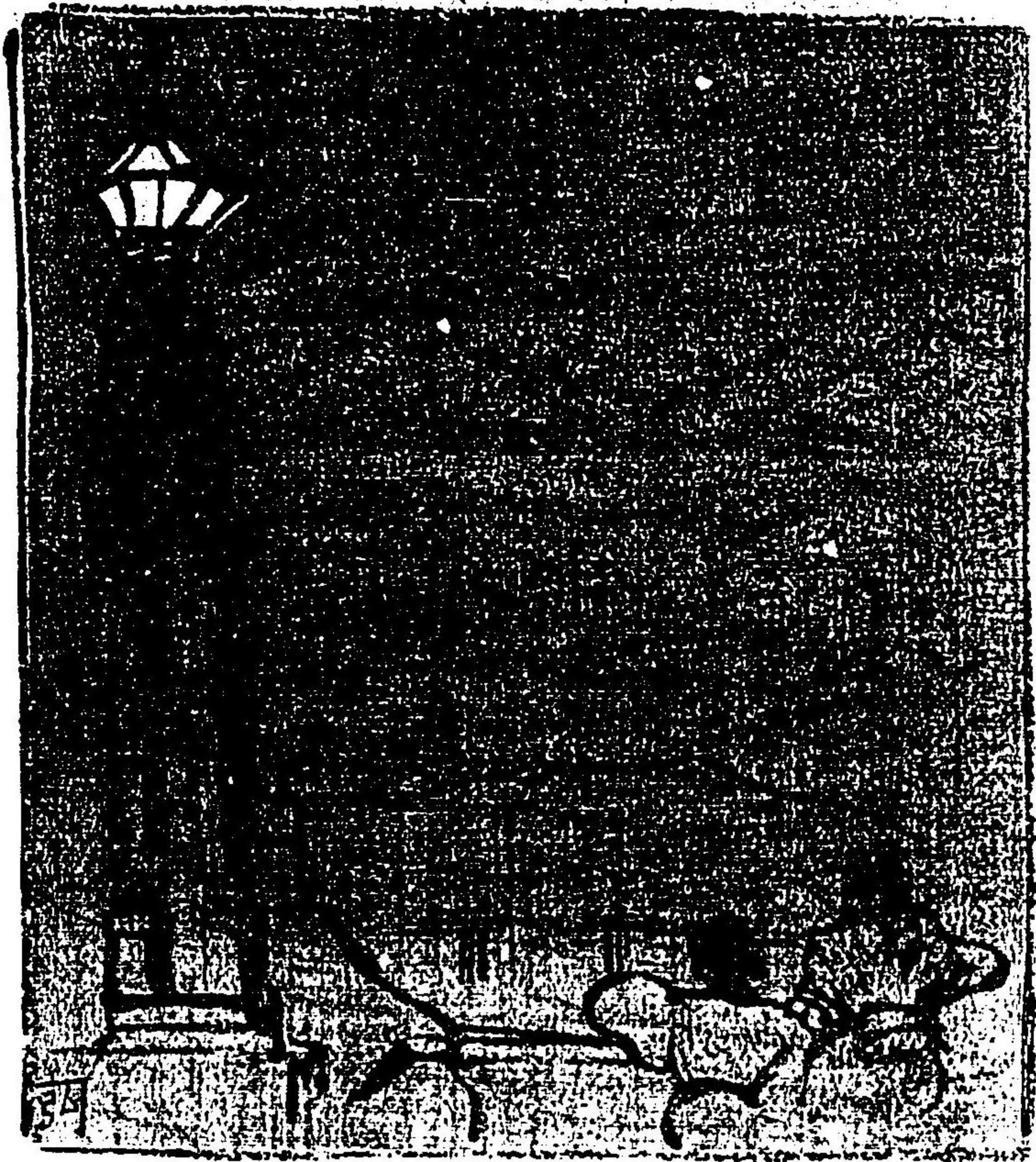
堀根道

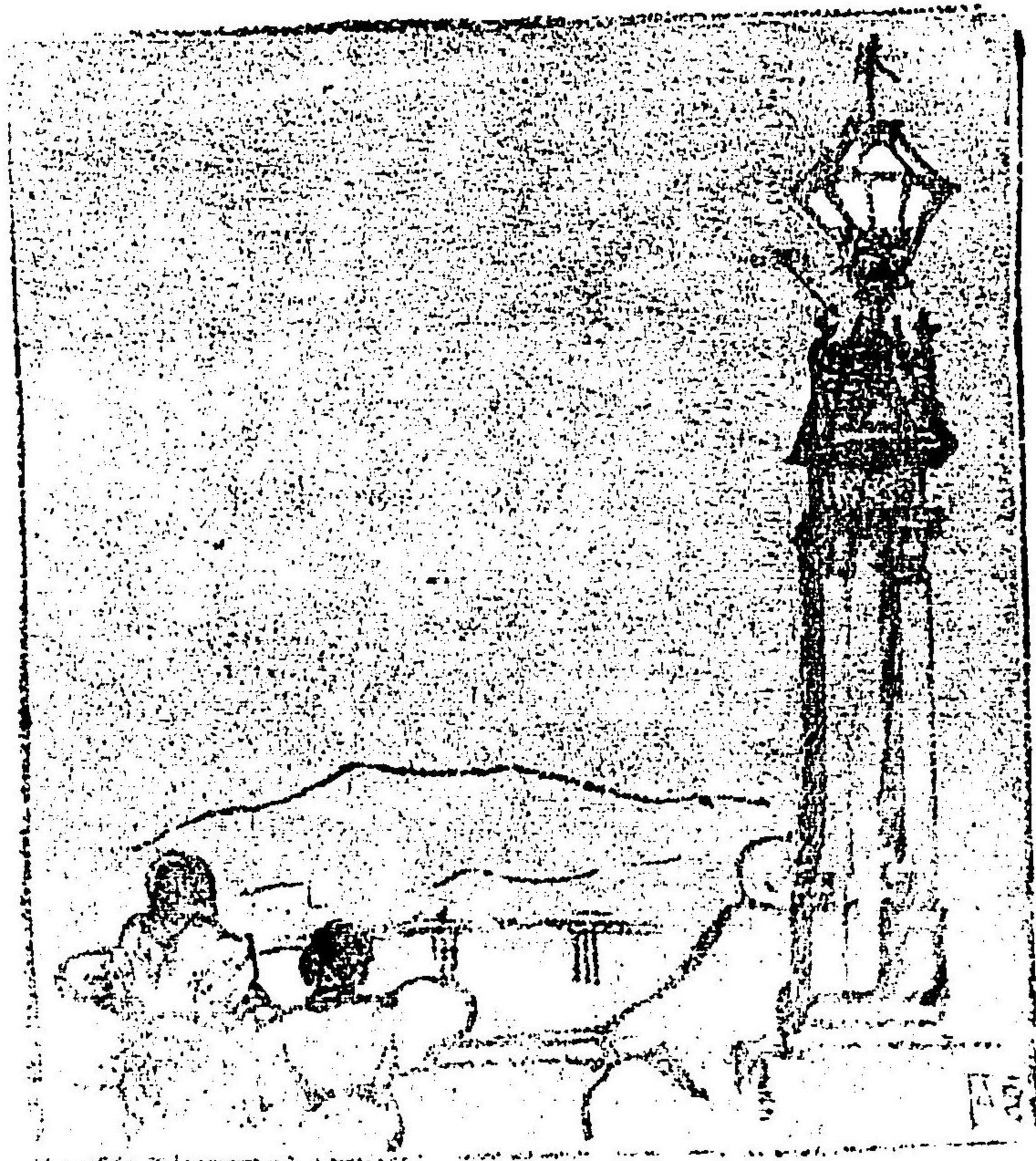


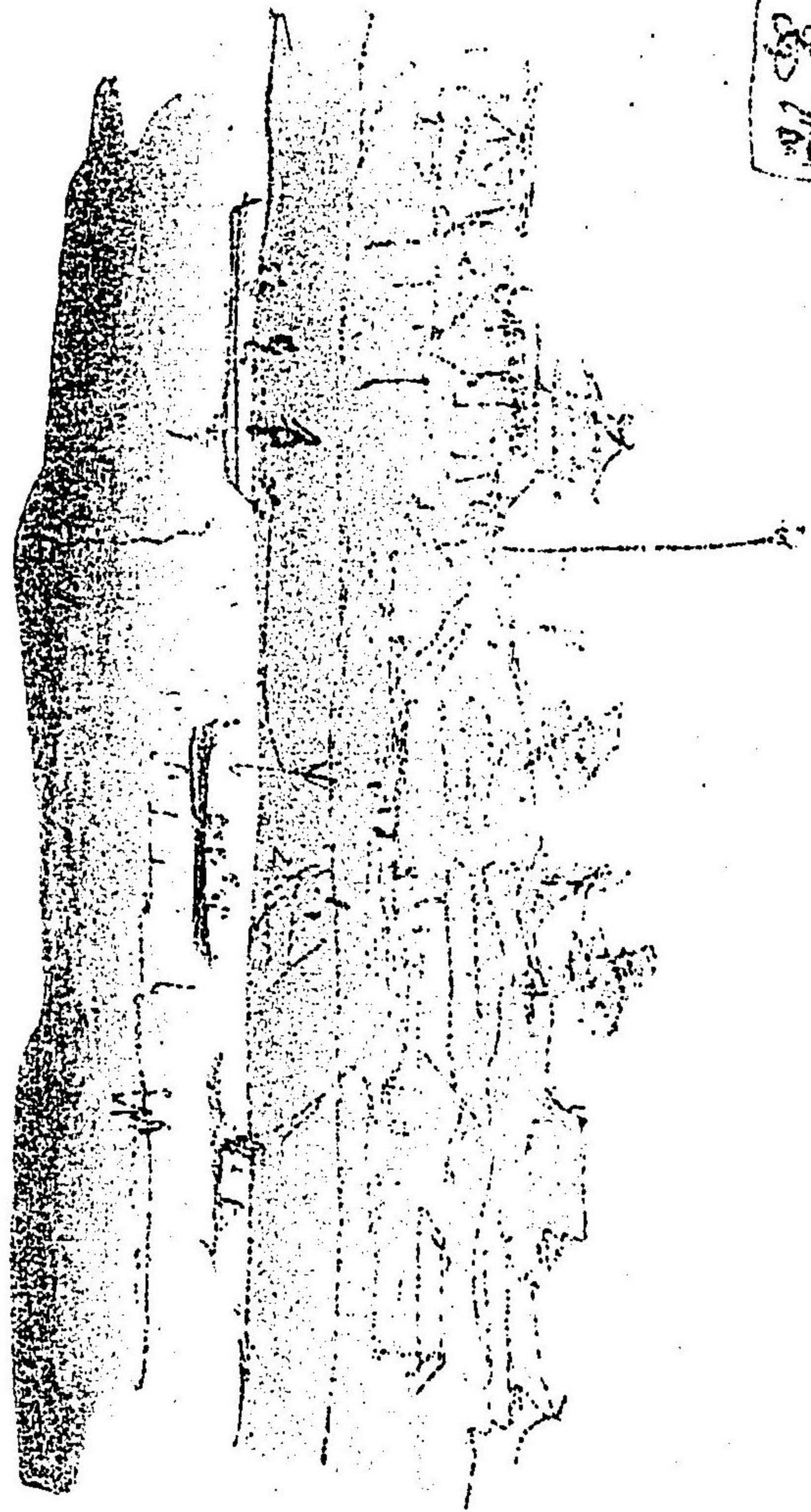
光弘澤中

堀頓道



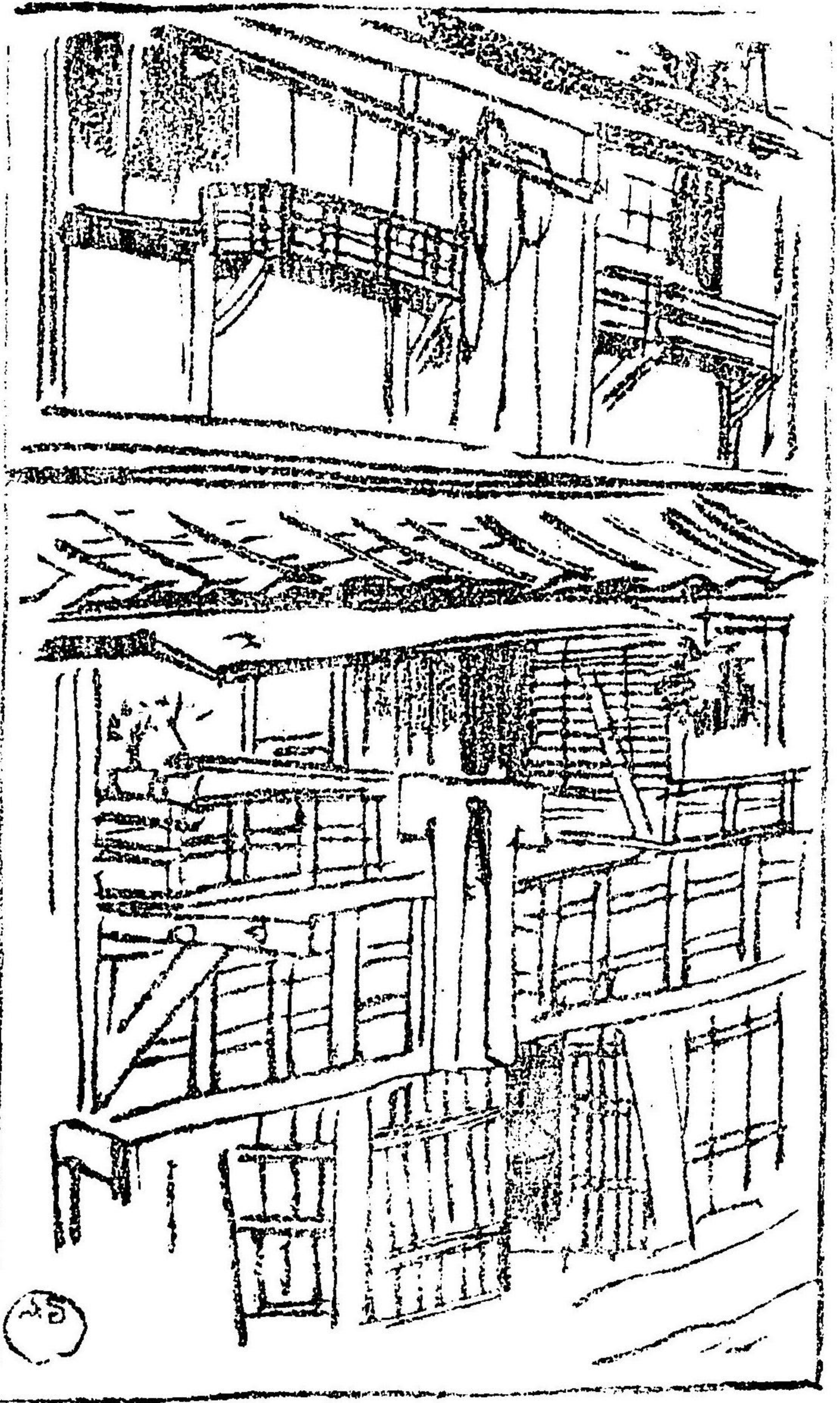






10 20 30

一世



35



水車 中 甲 式

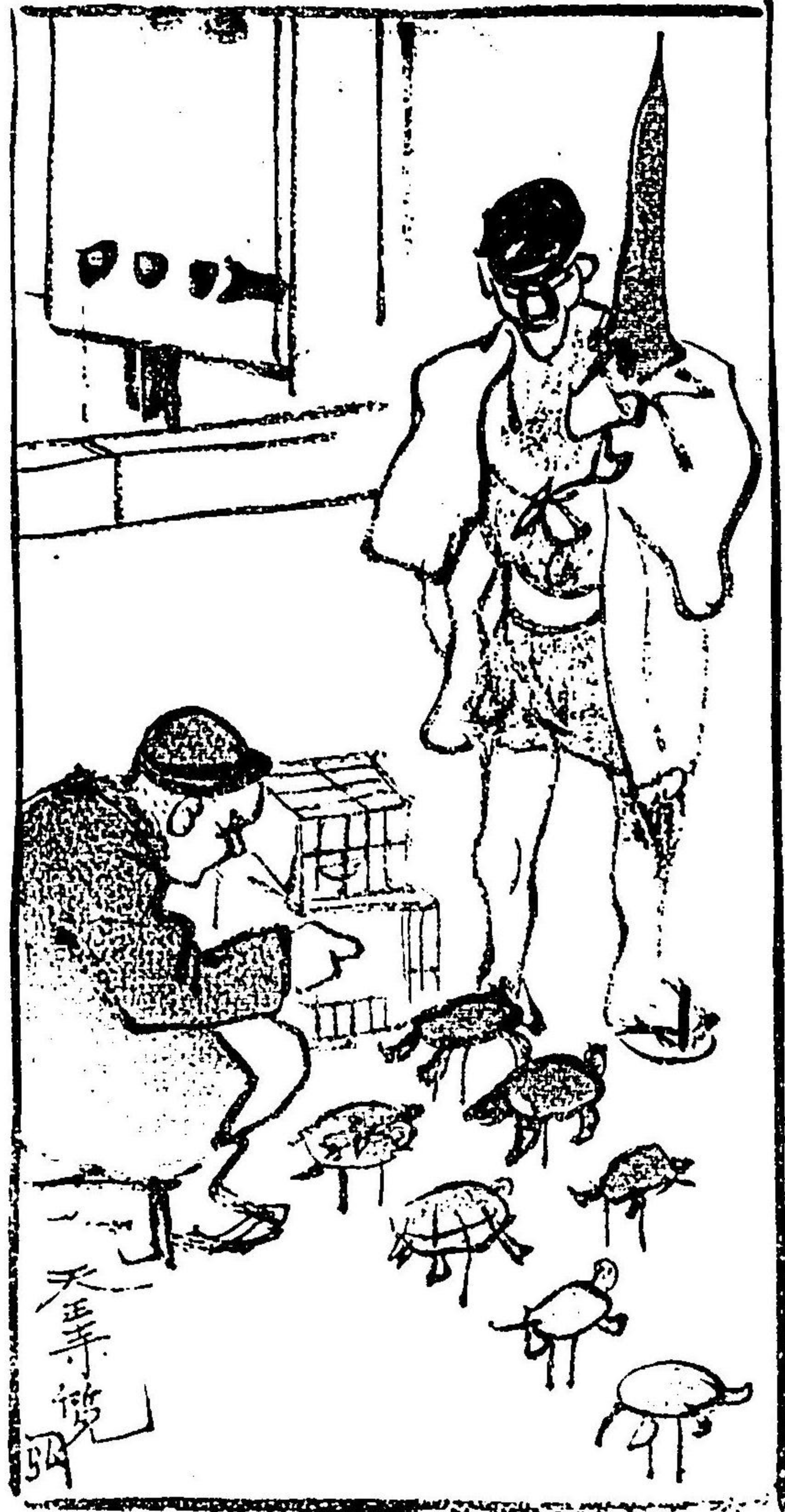


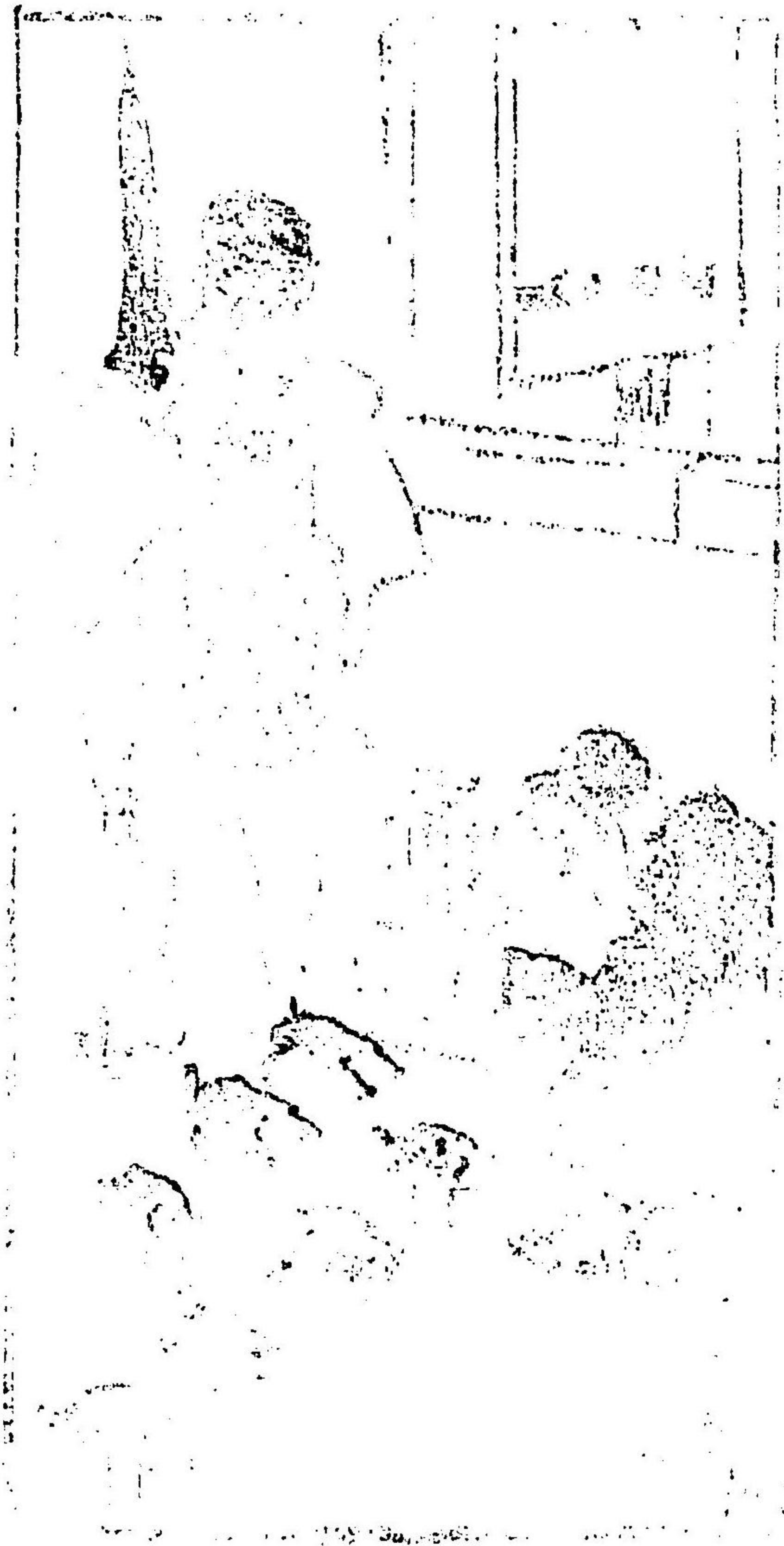
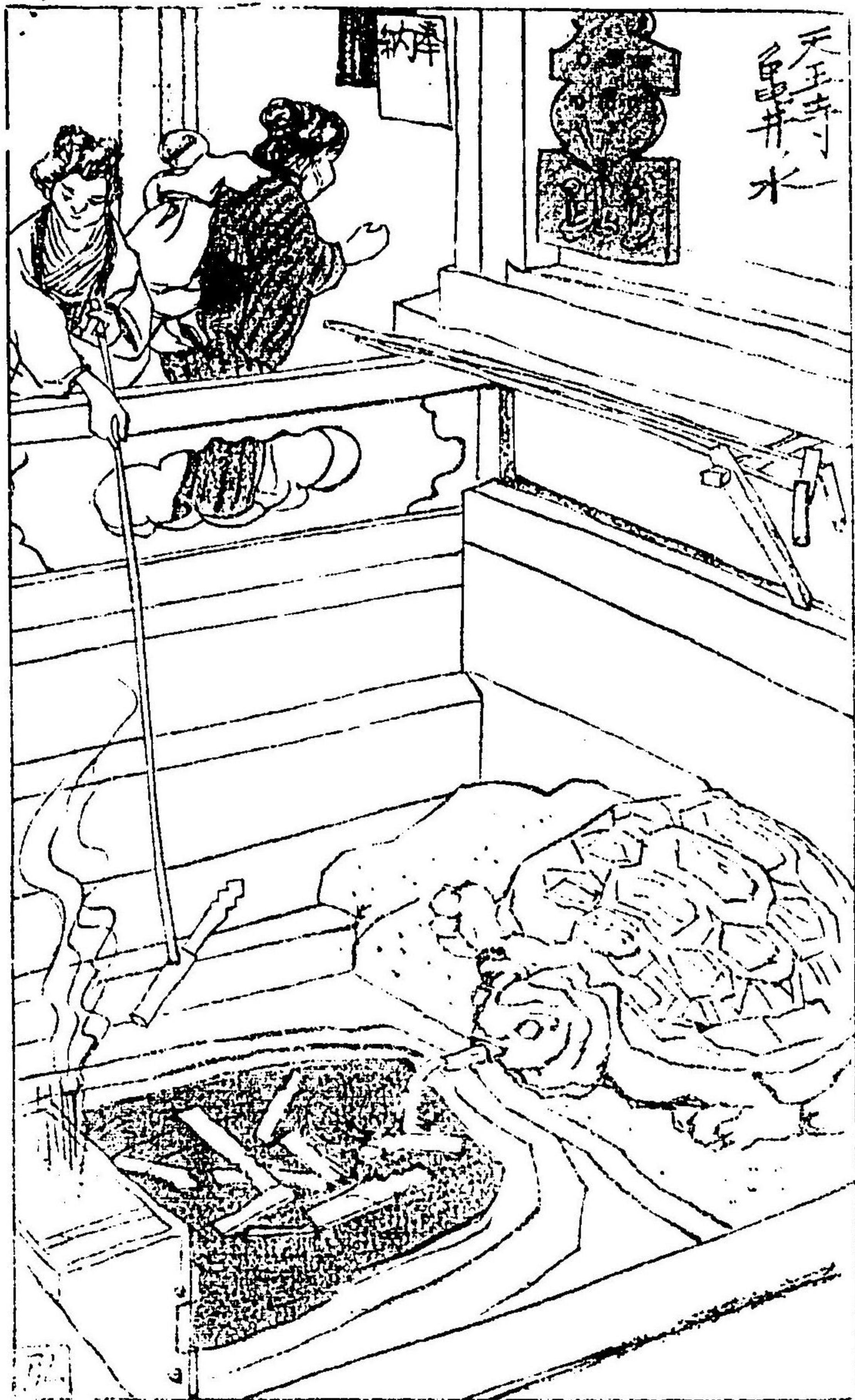
中澤弘光

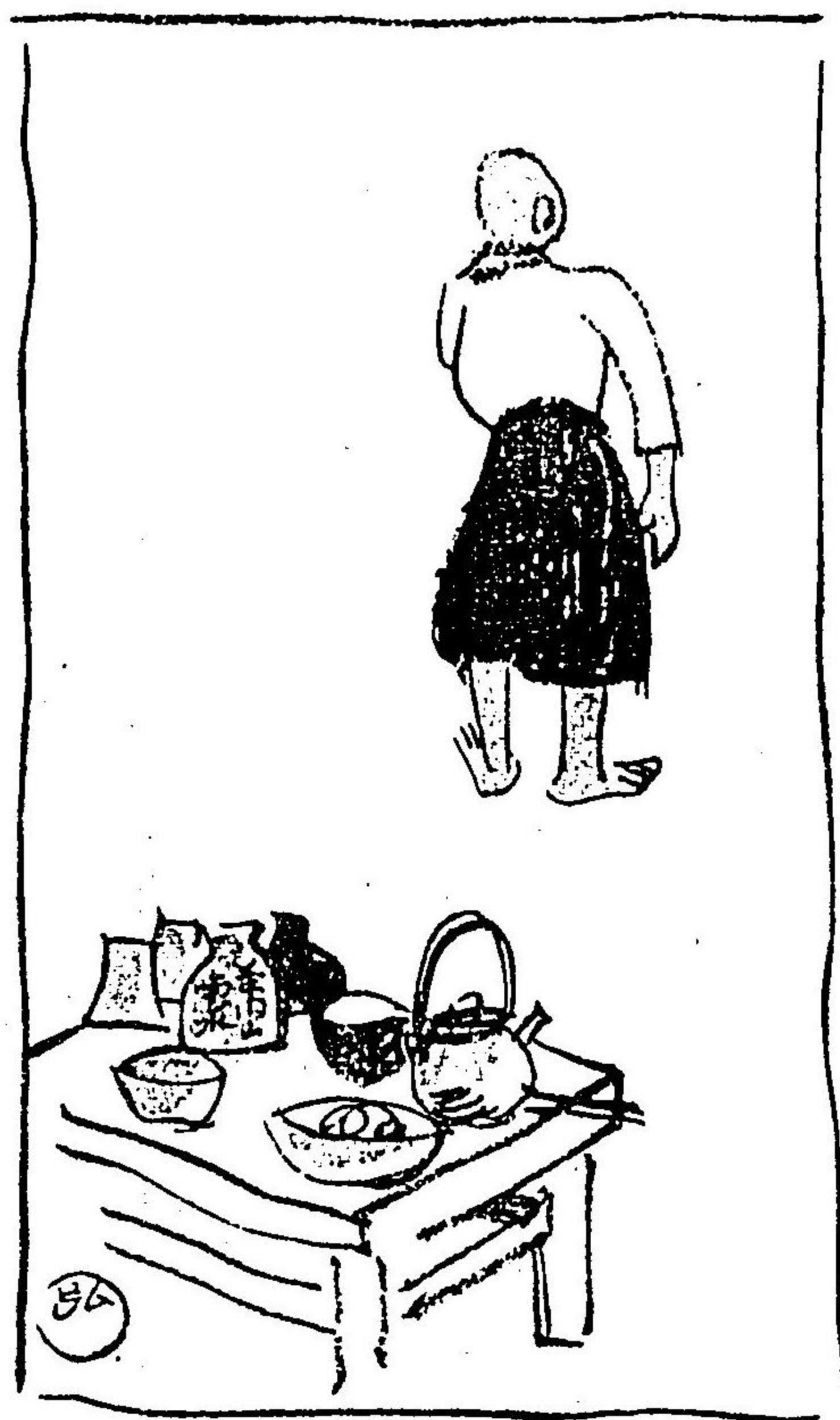
清水舞臺

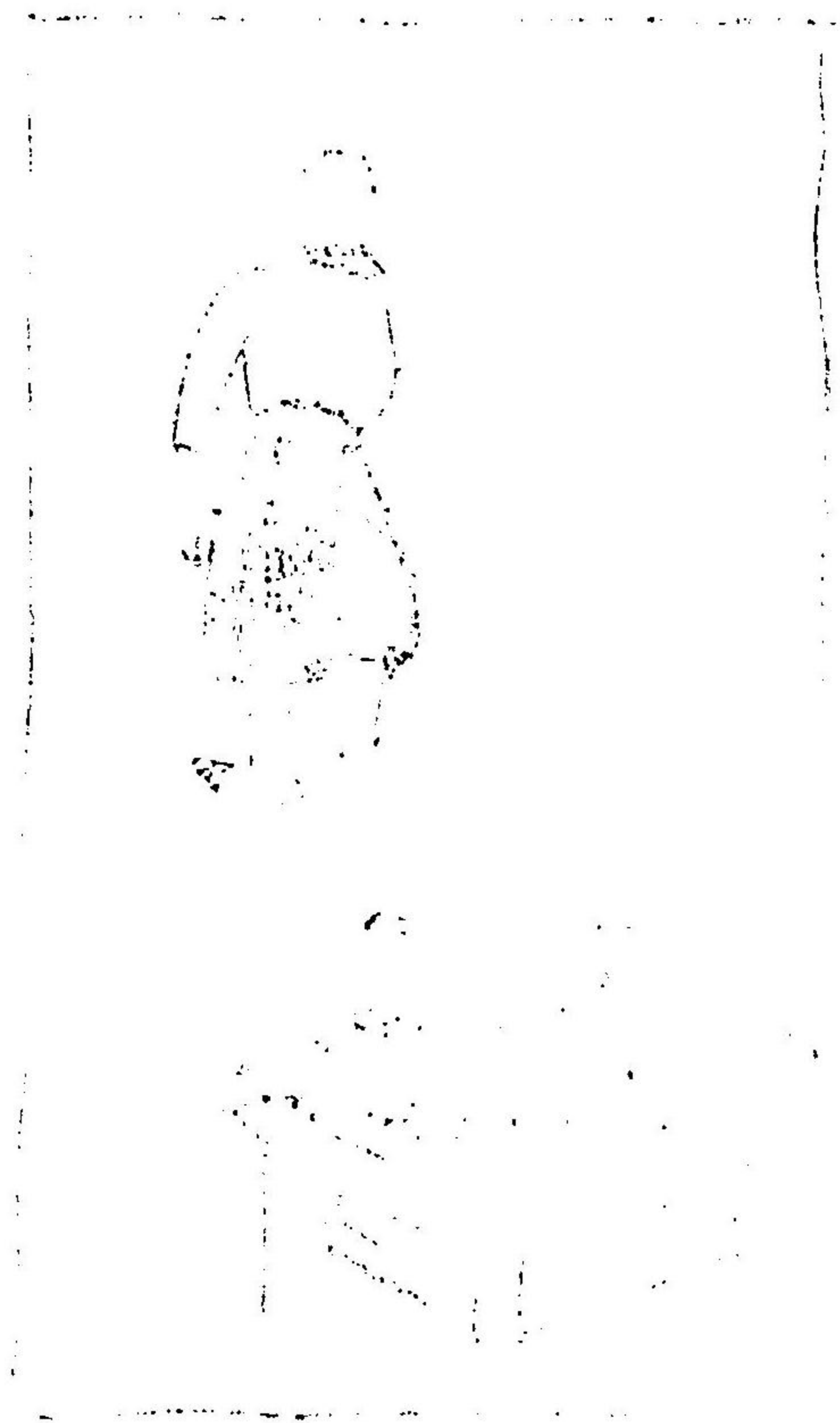


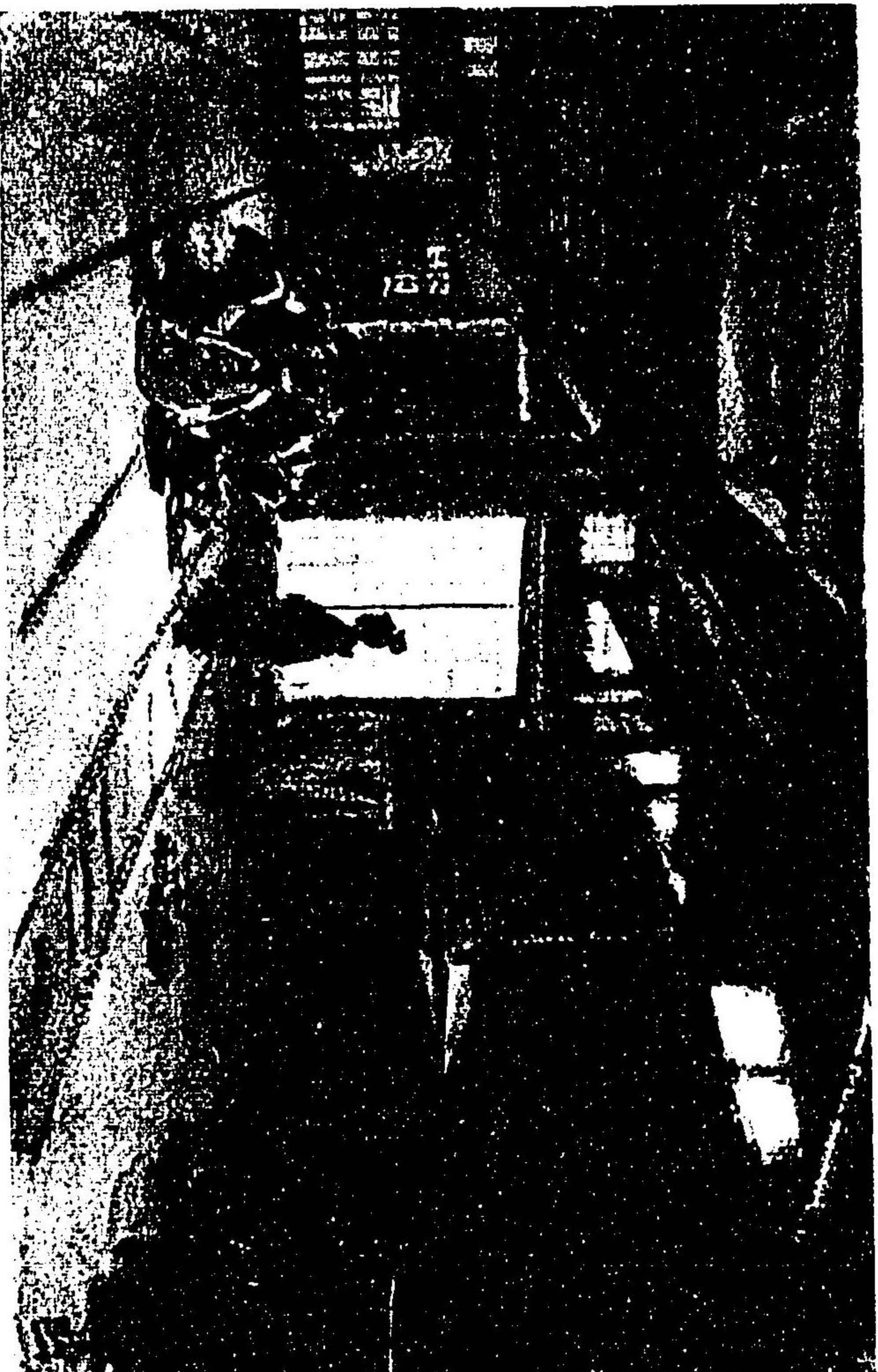












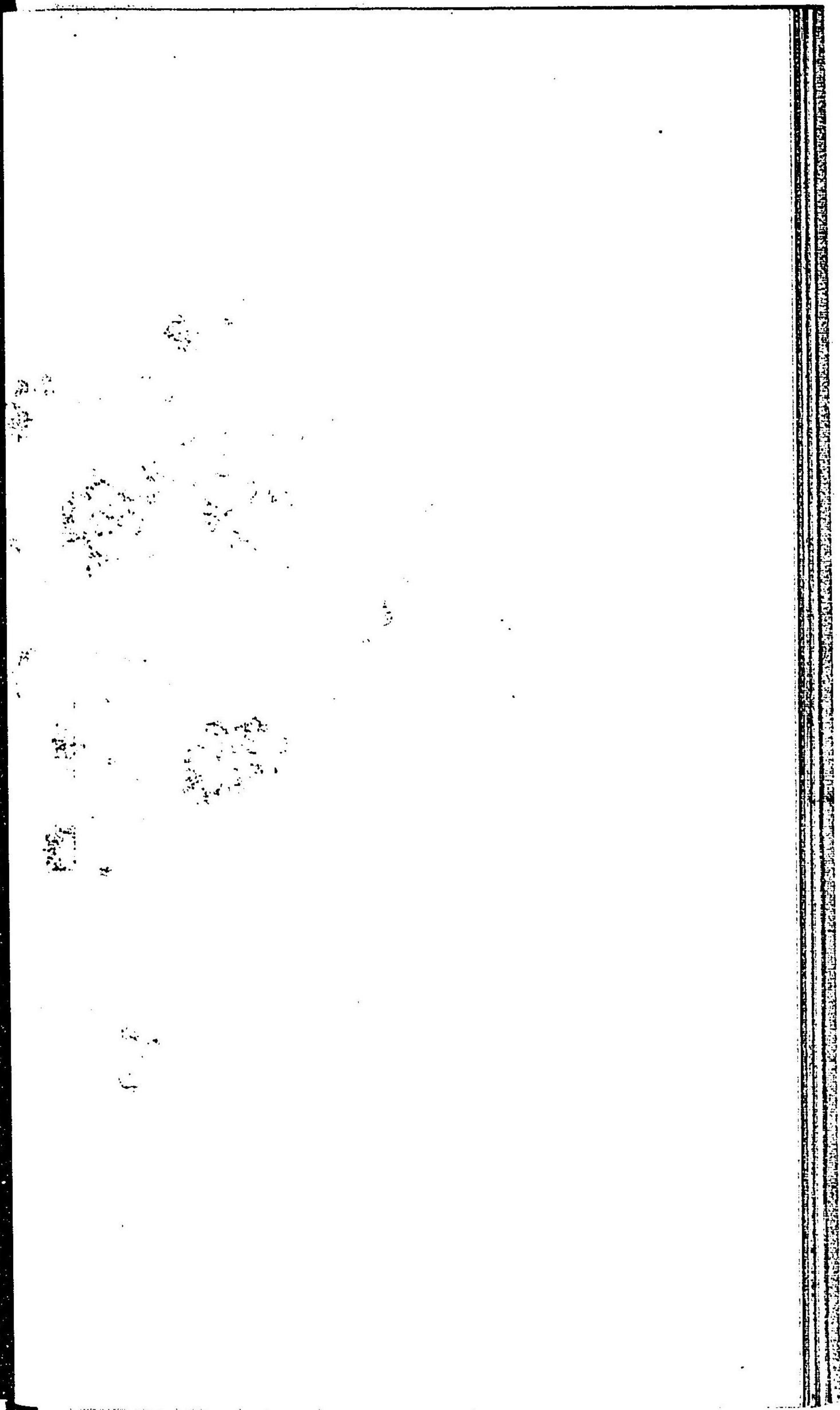
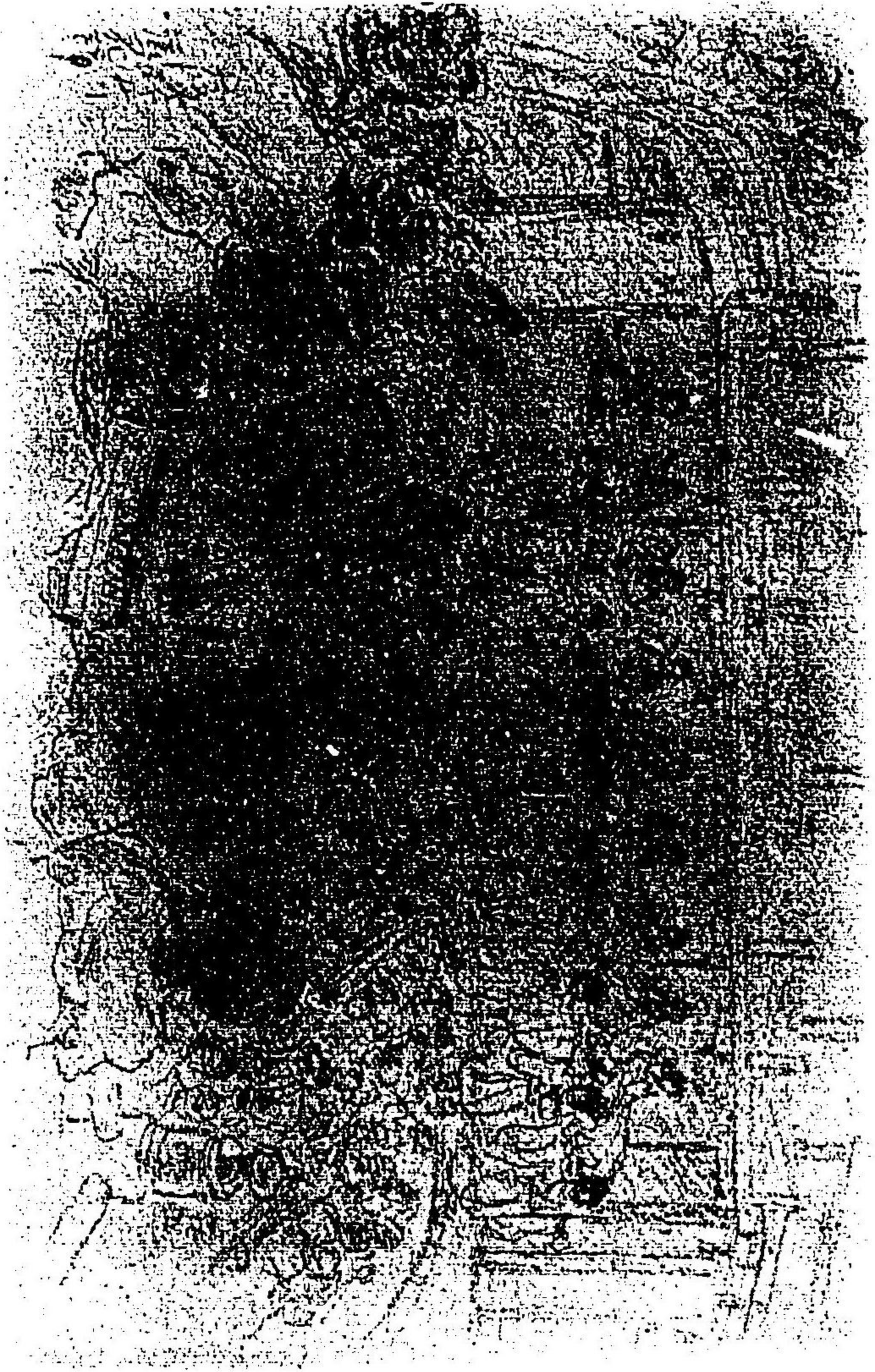
光弘澤中

照古器夕

光弘澤中

屋梁の踊







光 弘 澤 中 治 魚



光 弘 澤 中

屋 樂 璃 照 淨 形 人

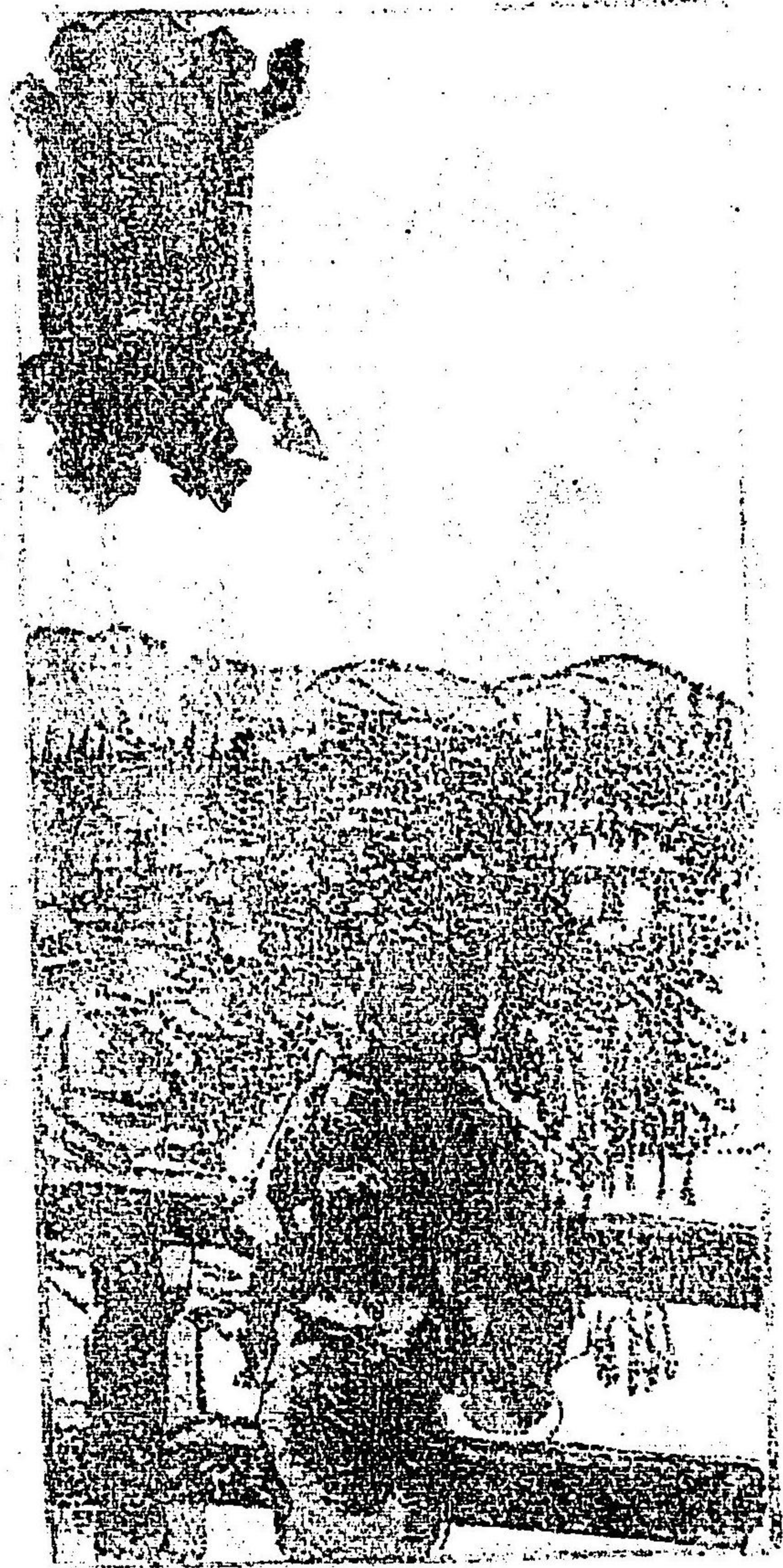


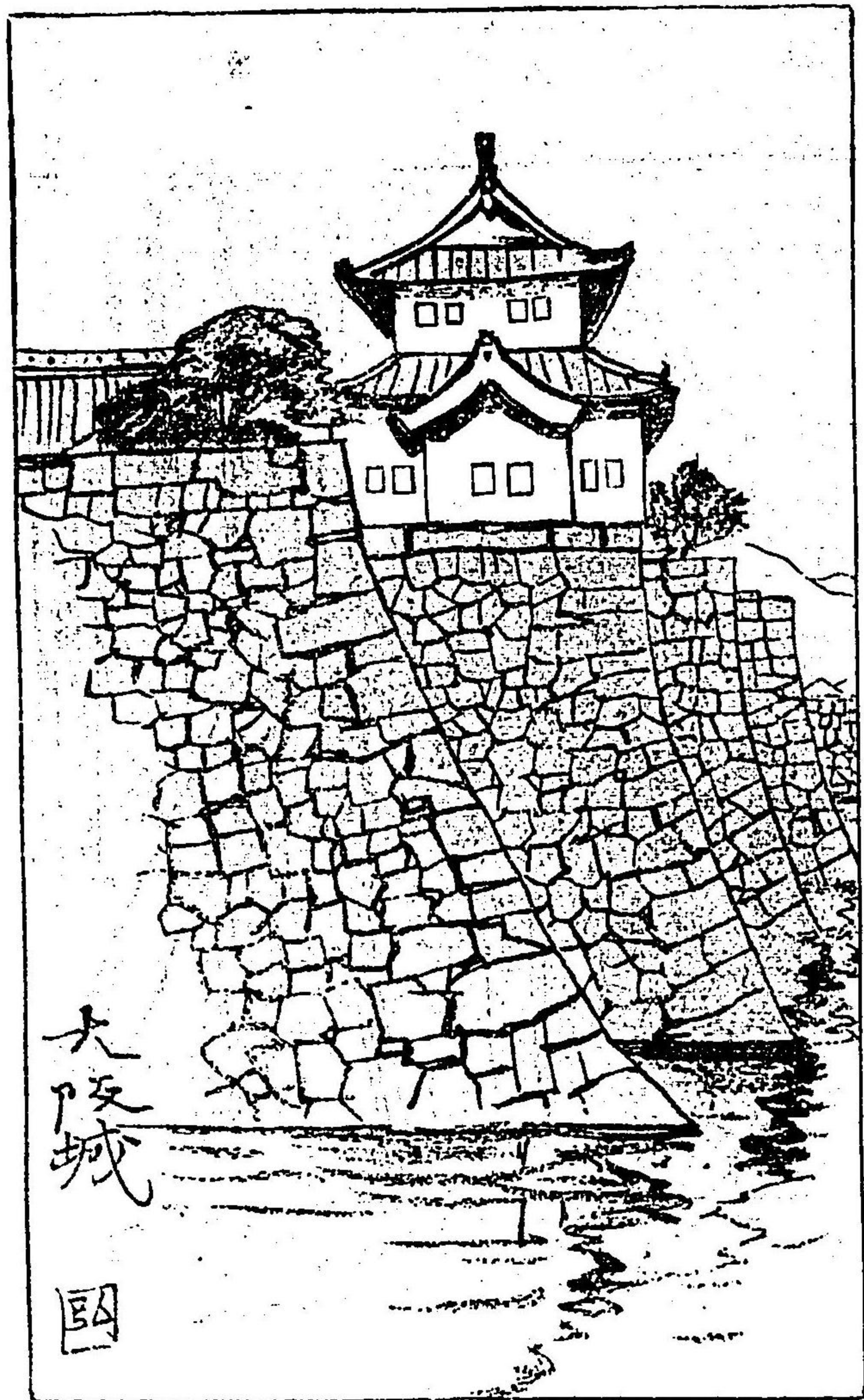
中浮弘光

人形淨瑠璃樂屋

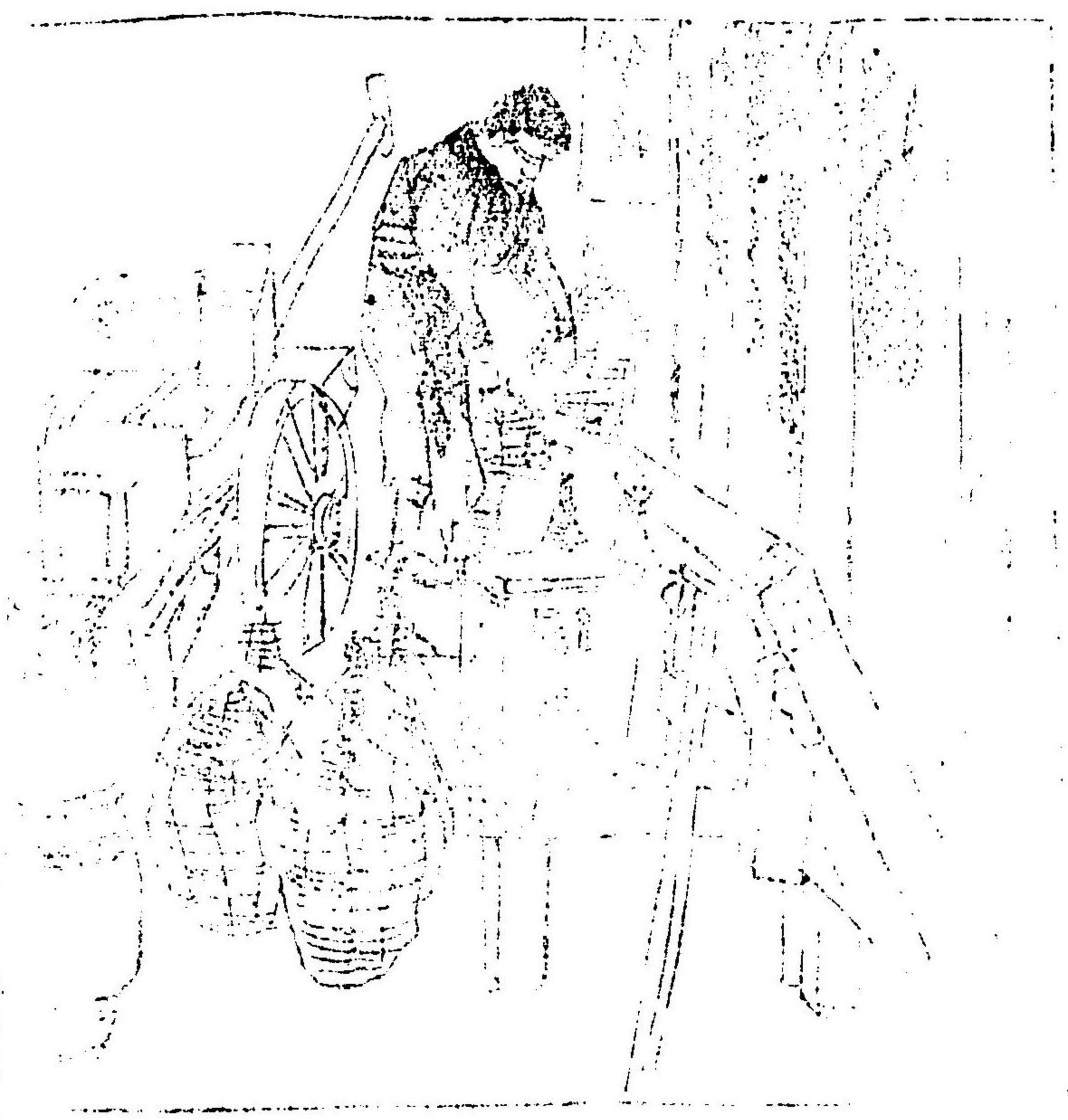
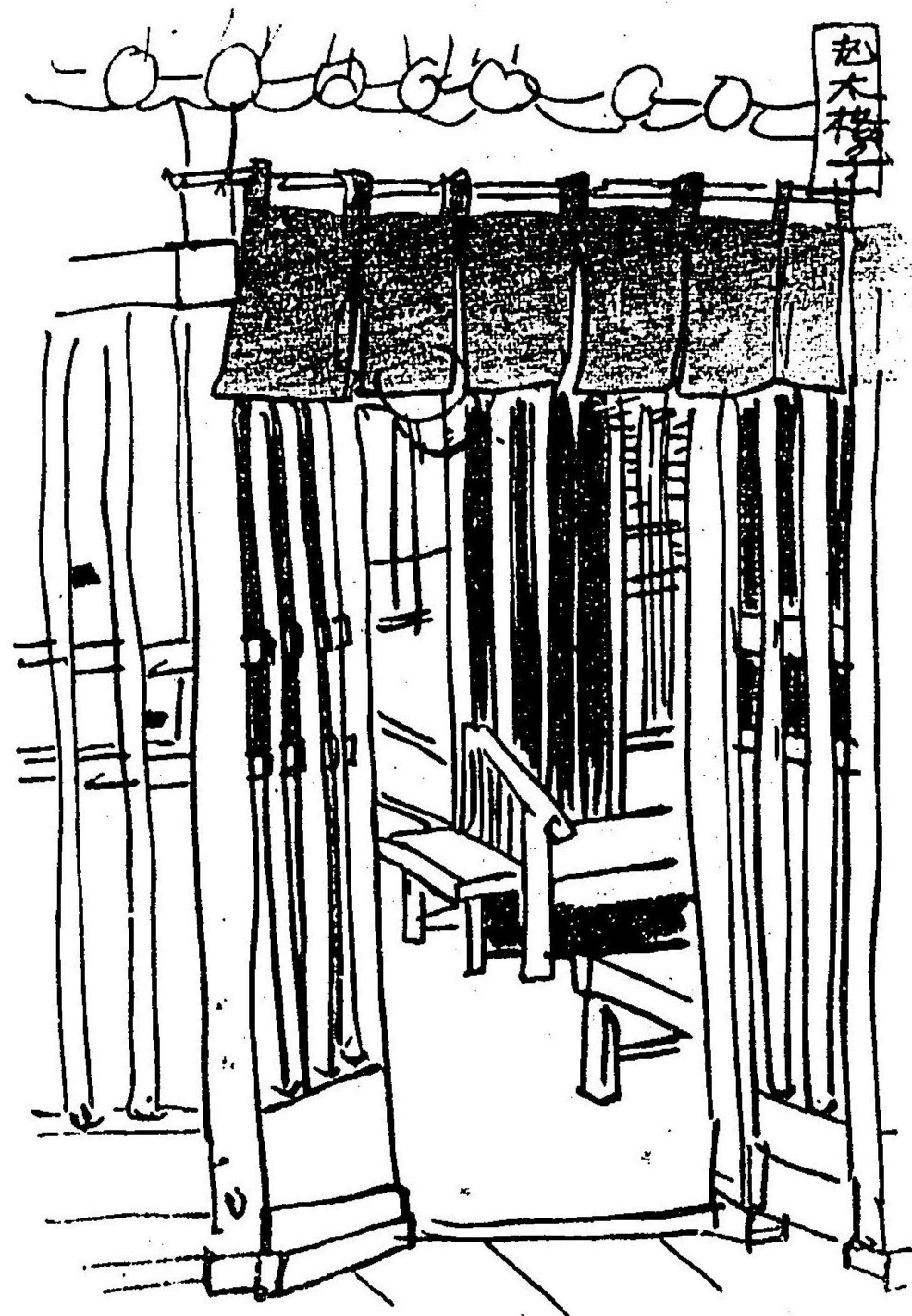


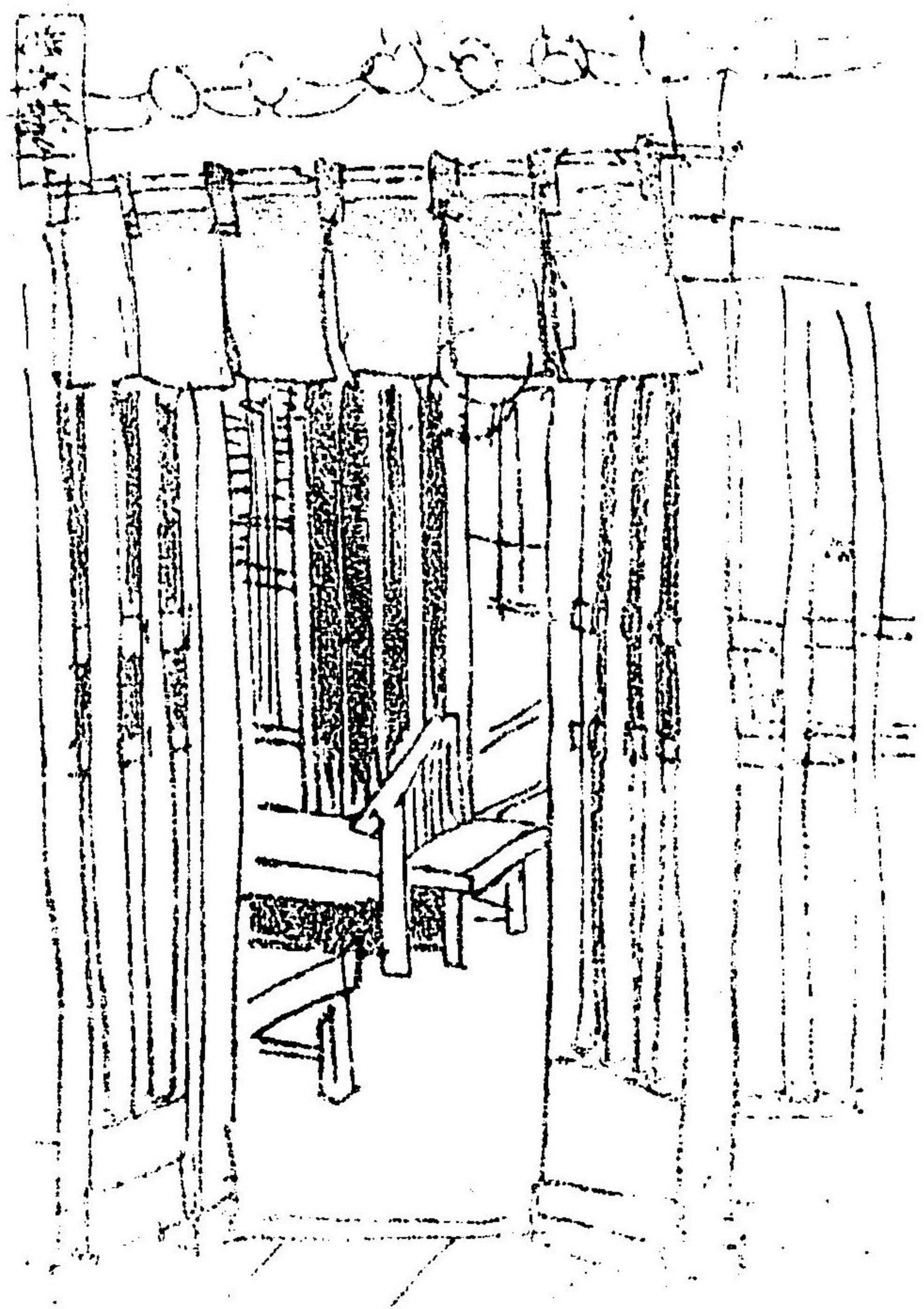
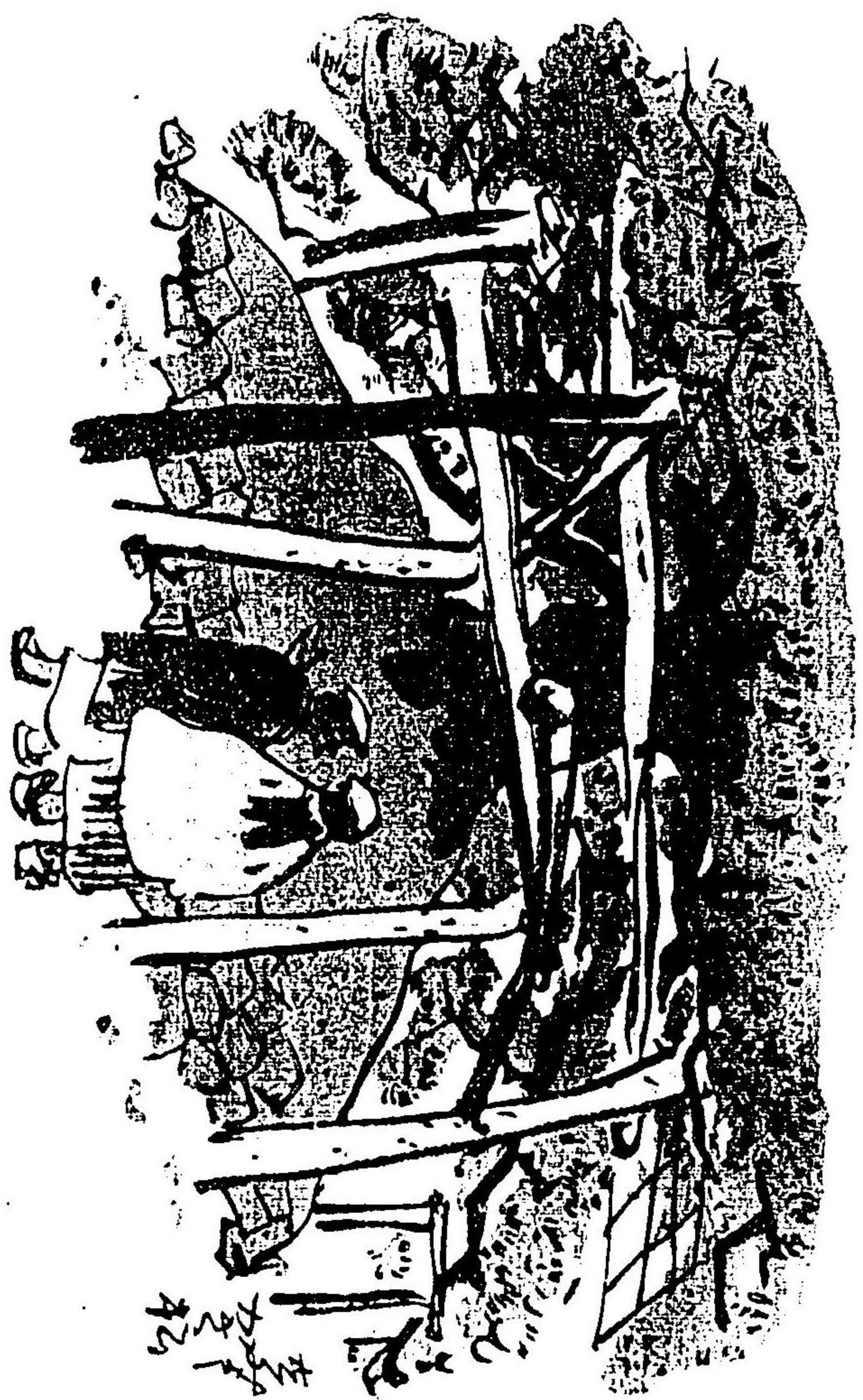


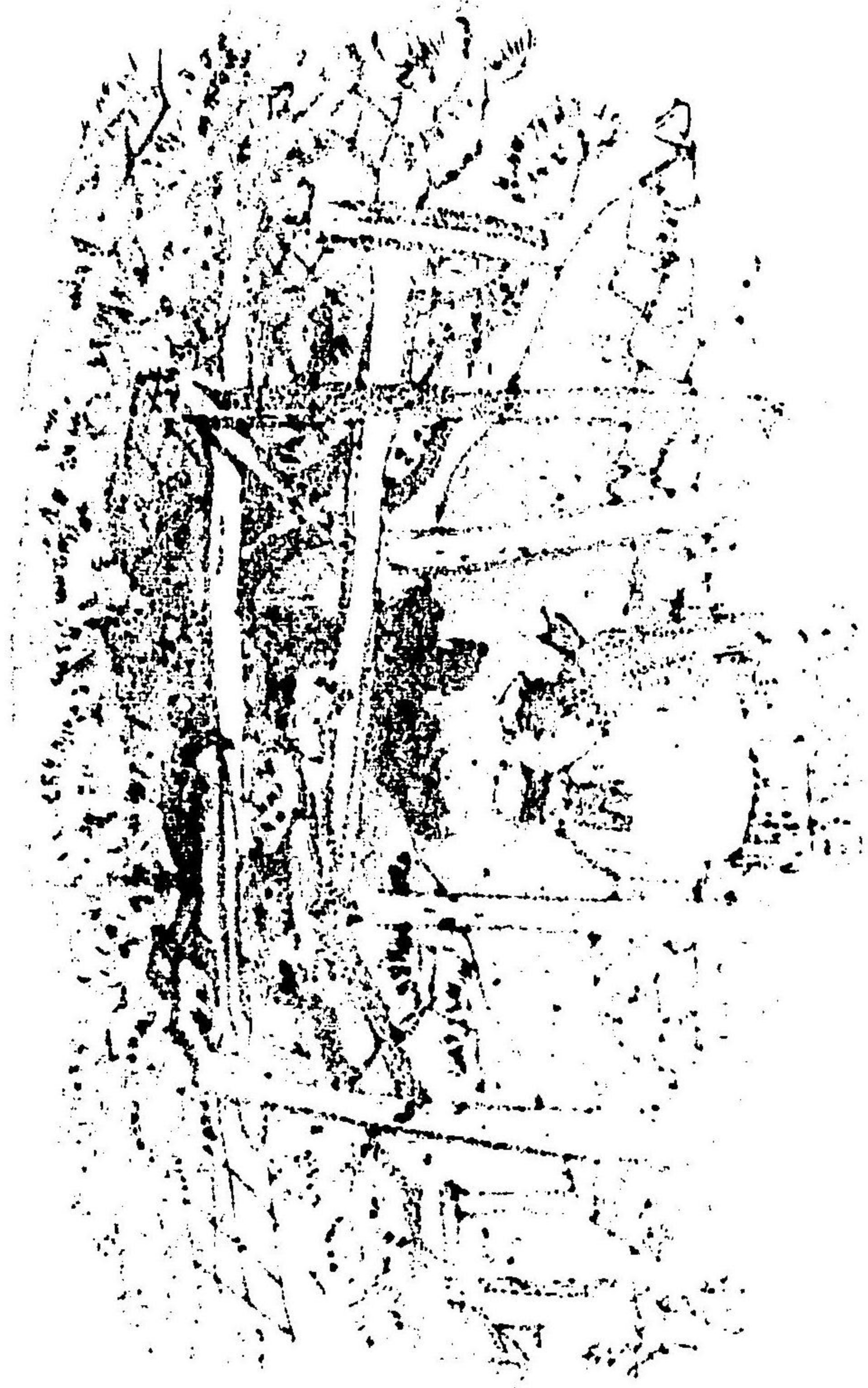
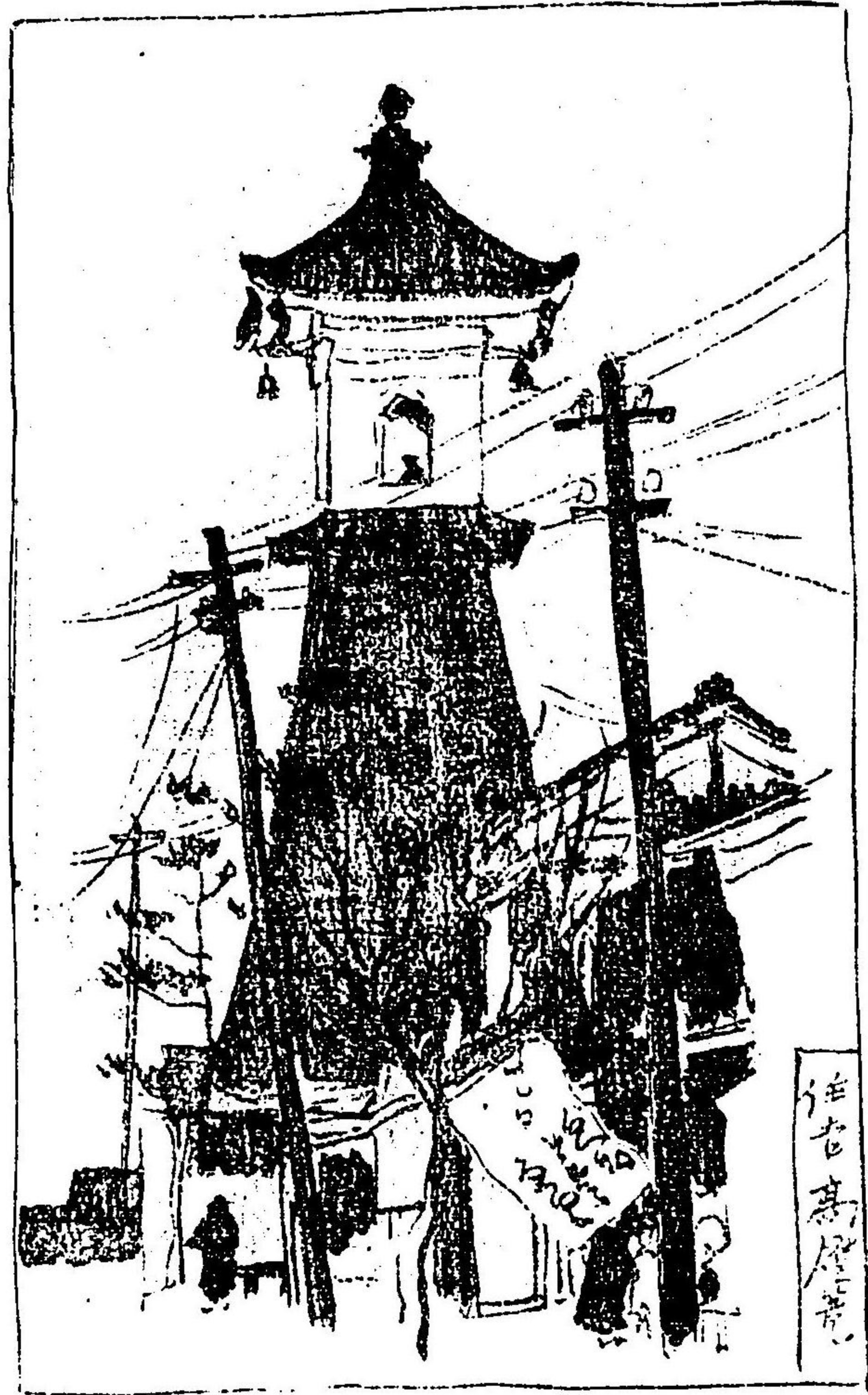


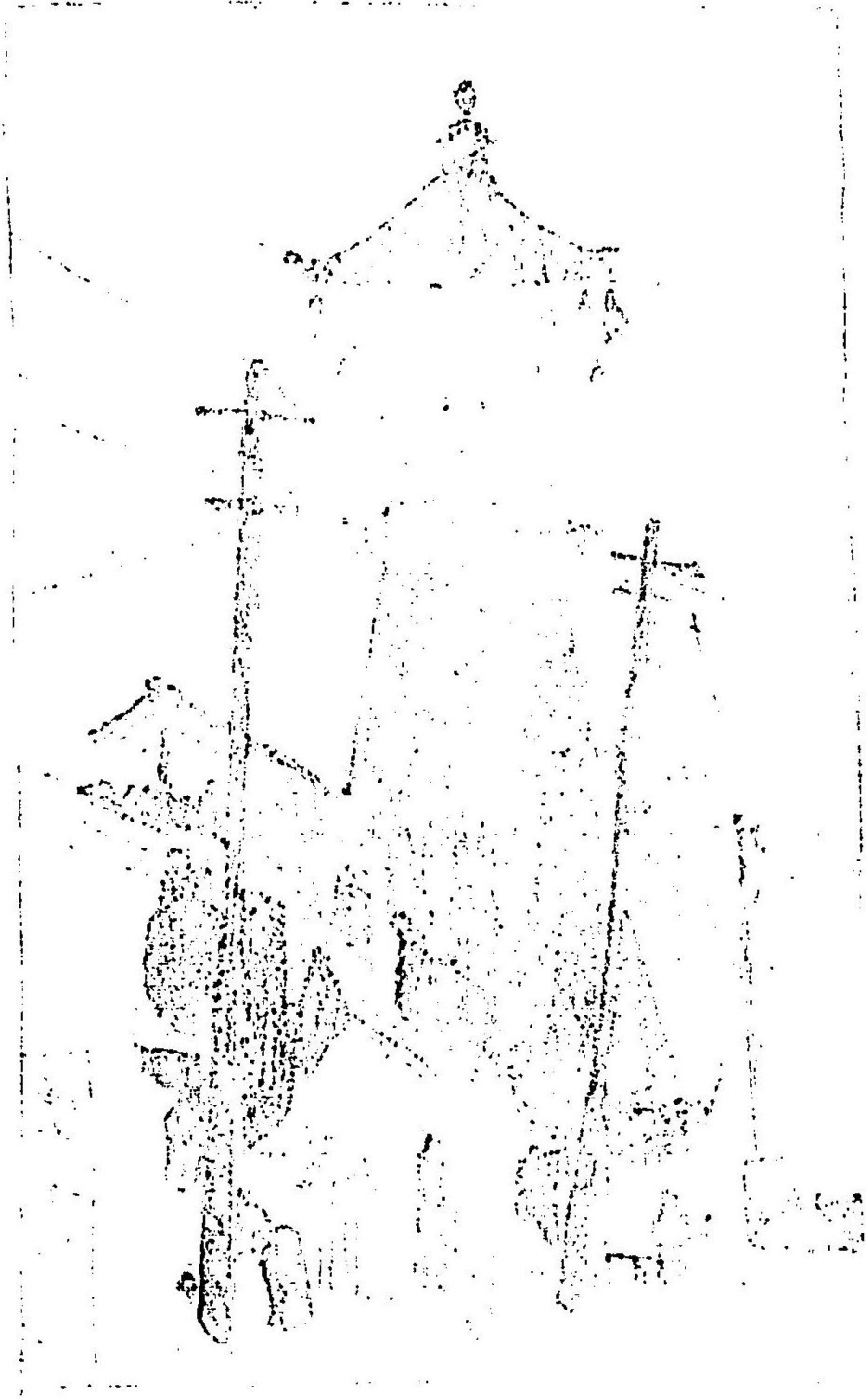


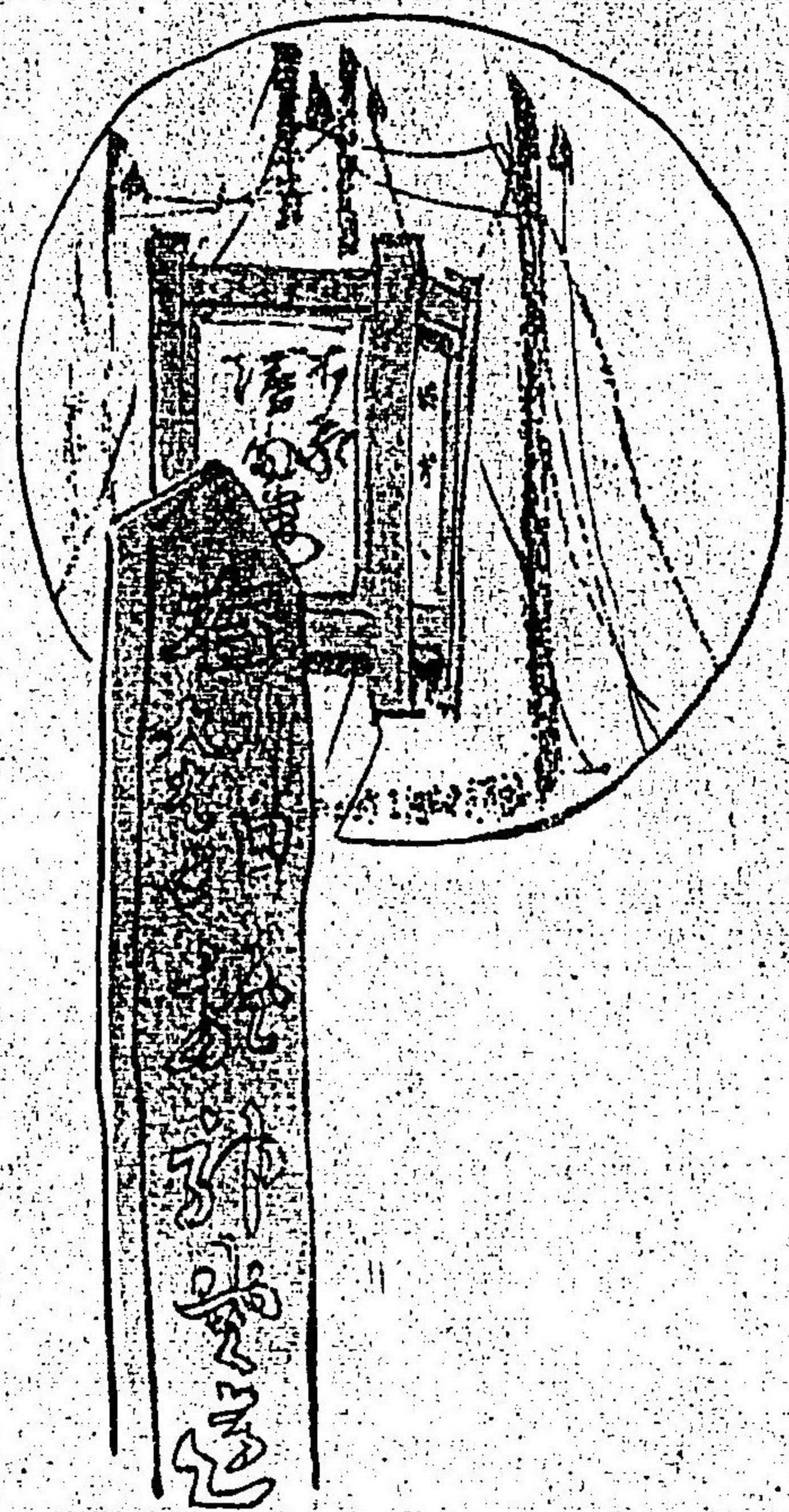




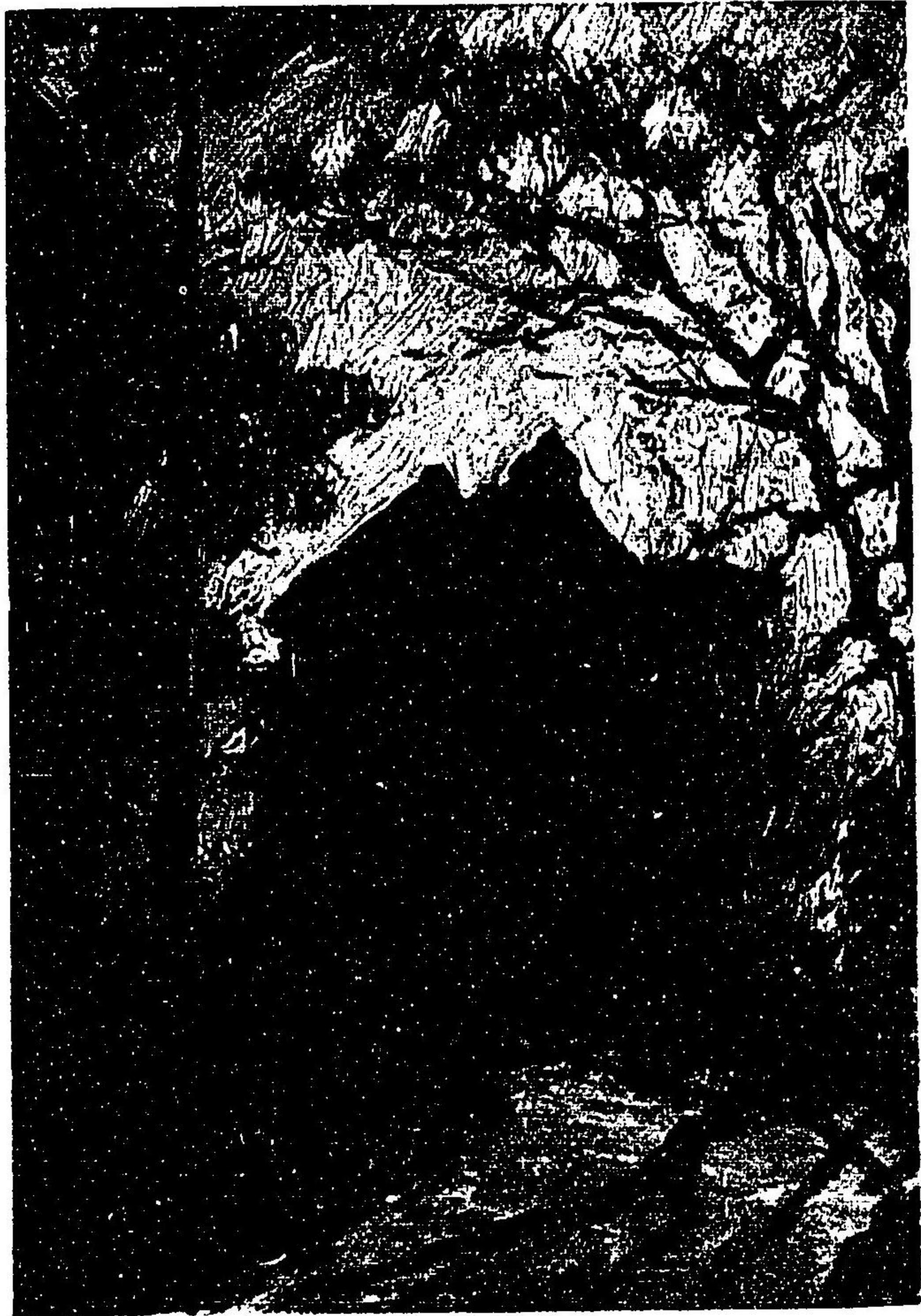






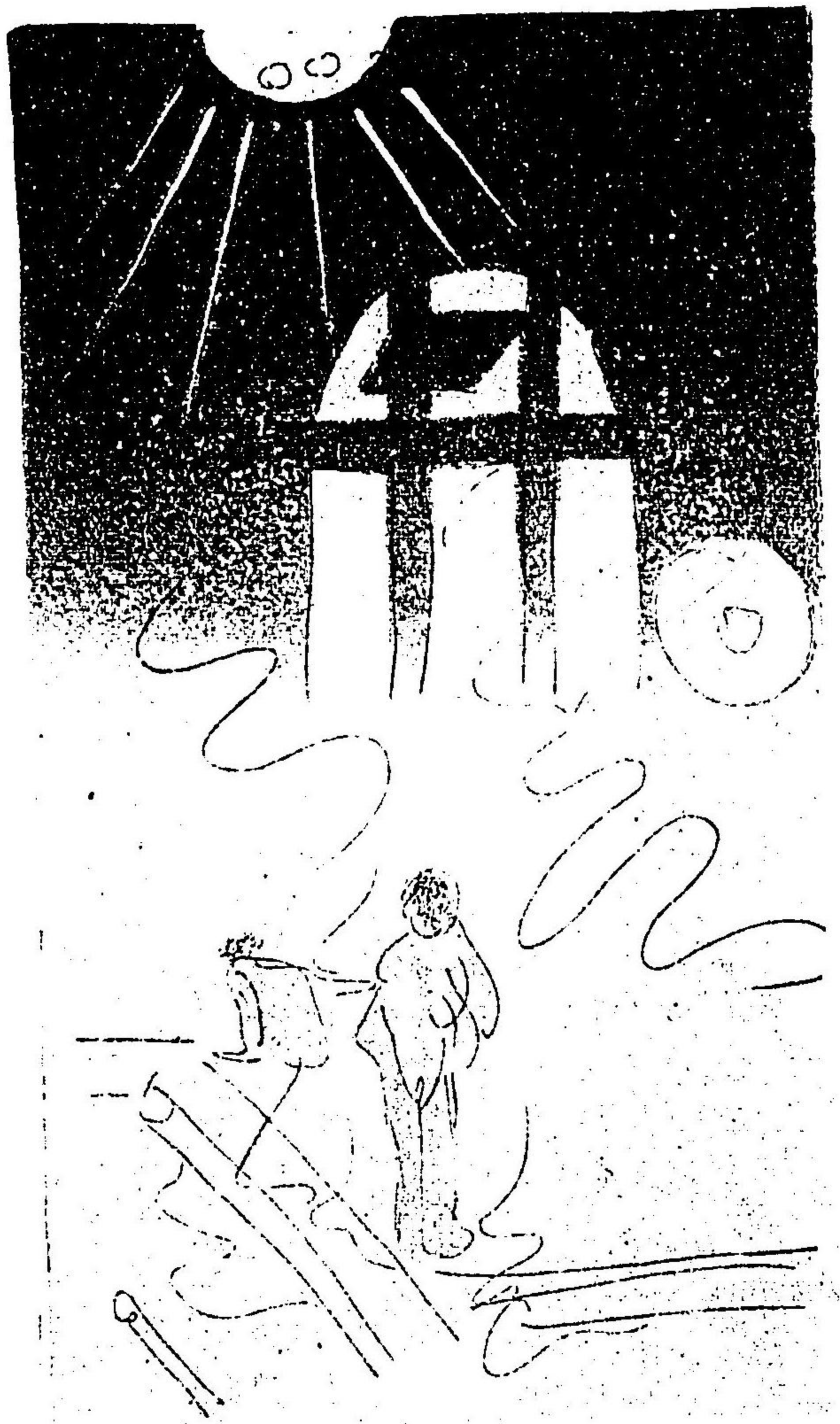


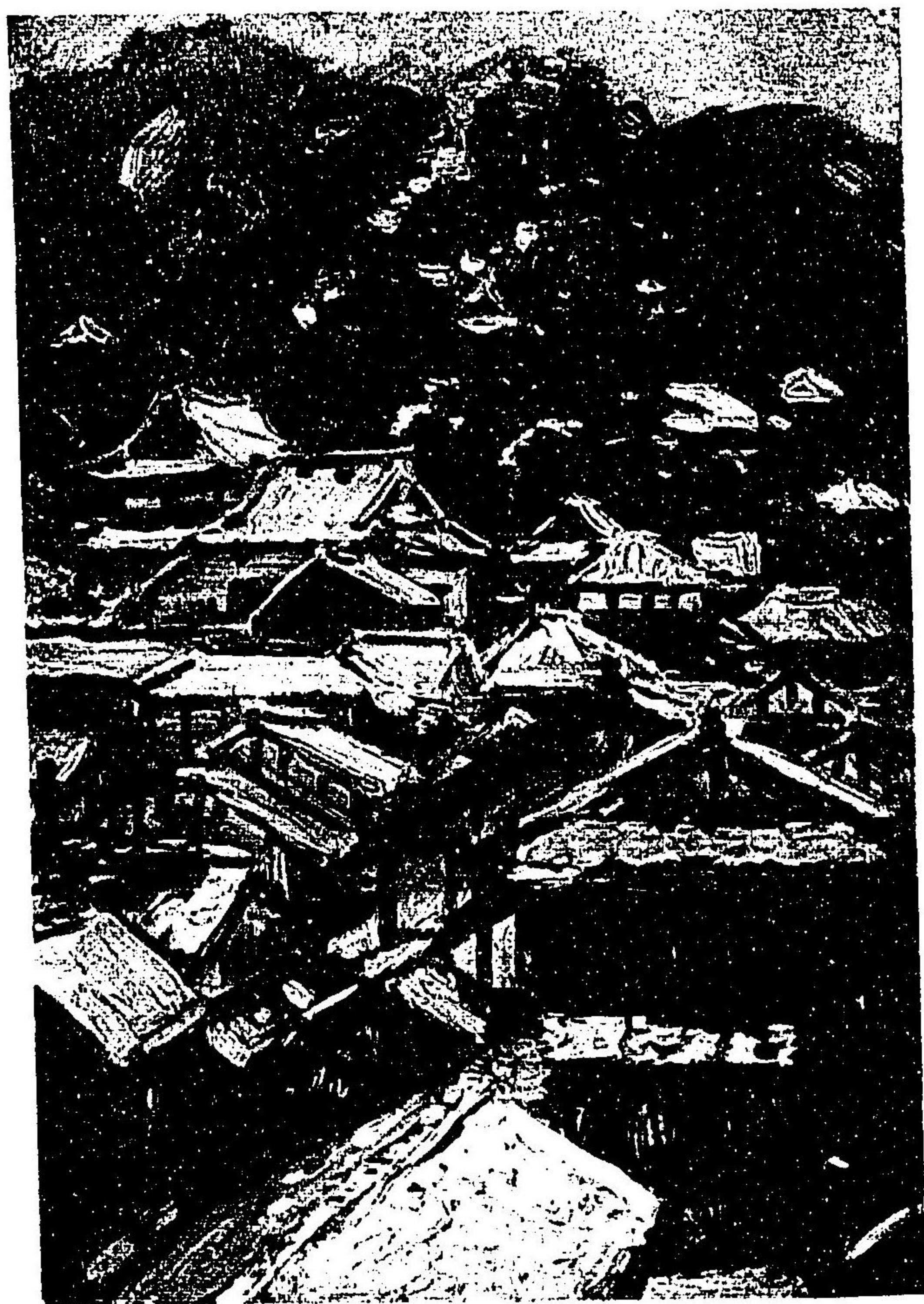




光 弘 浮 中 面 筑

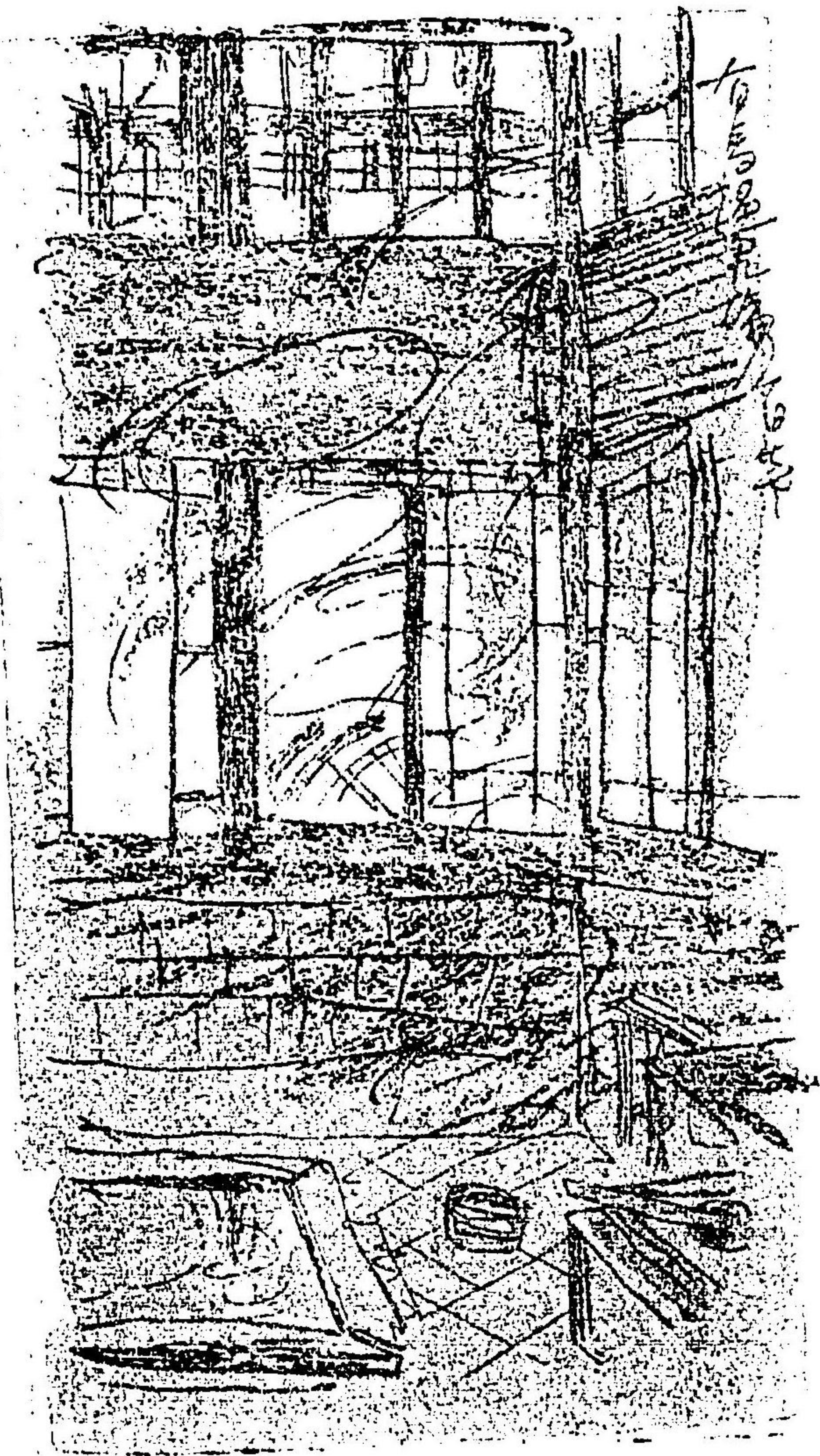






光 弘 澤 中

泉 湯 馬 有





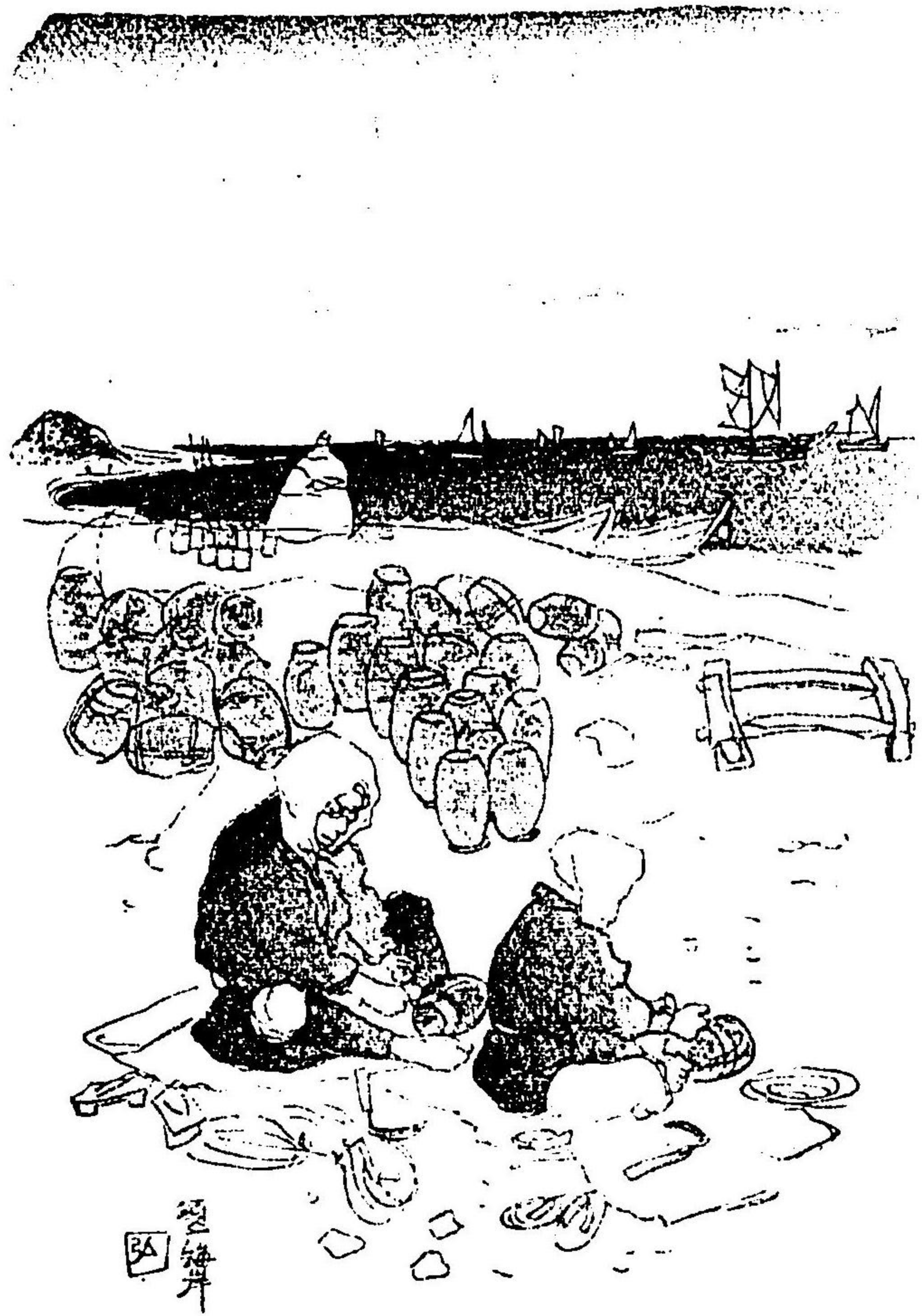
30 / 1903 (鳥野神社)

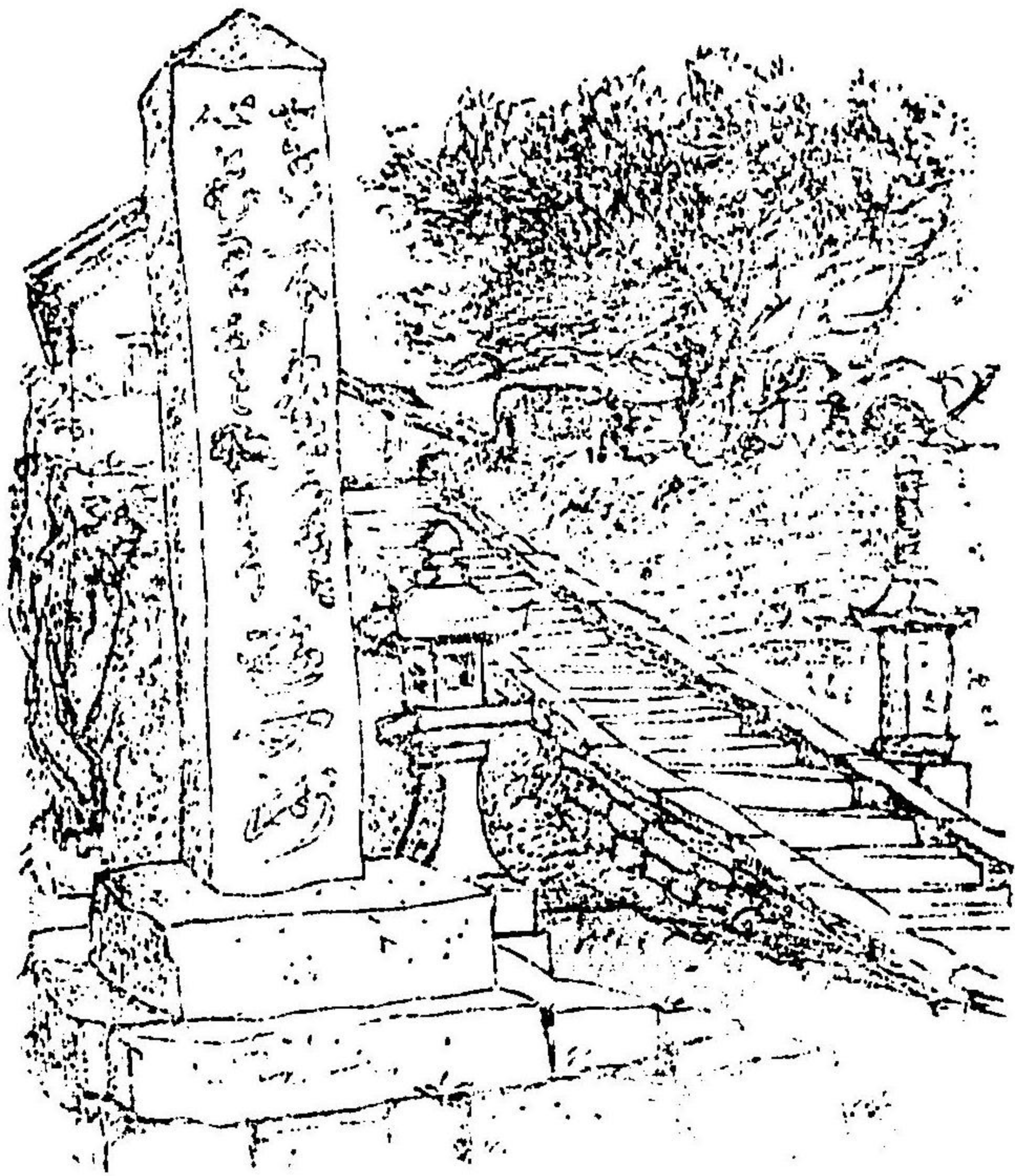


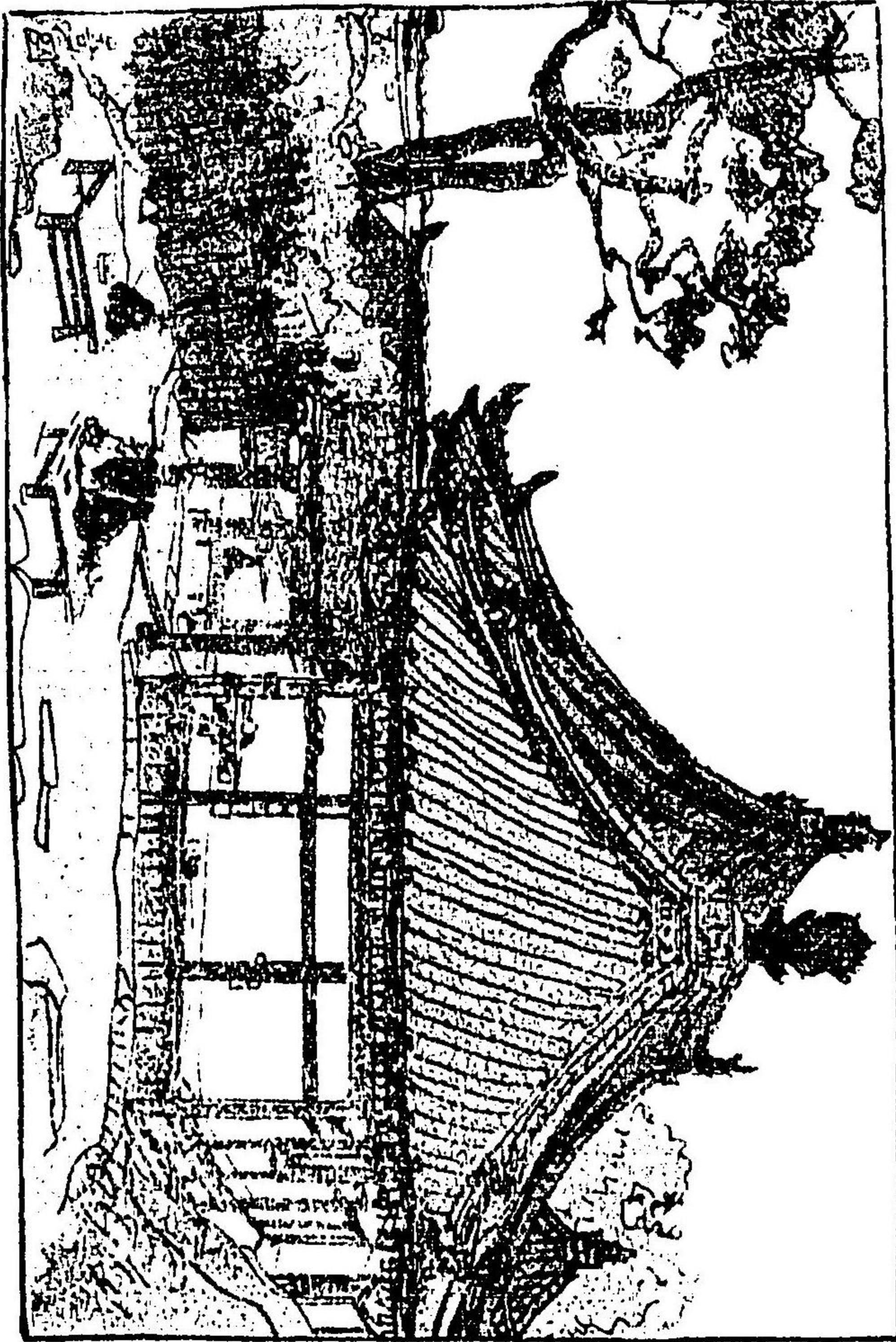
光弘澤中

倉酒津今









水之都

高安月郊

故郷の土

替は死町に生まれた五六歳までそこに育つたが今は家も丸で建
 前の馬場へつれて行つてくれた其頃は並木の松の蔭に大きな日傘を
 立て、茶菓を賣つたり産を貸す店があつた。それを借りては草の上へ
 布いて、春は紙鳶が城より高く上る頃、鶴野に梅がちらつく頃、蓮華草の
 紫が菜の花の黄になる頃など、半日を過ごしたものである。自分に先大
 阪といふ印象を興へたのは此趣か。しかし今行つても松原は兵營にな
 つてゐる。草花は兵馬の塵になつてゐる。

それから好く鳥屋町へ行つた。そこは名の通り鳥屋が多かつた平凡な鶏鳩俗悪な七面鳥などより貴族的の孔雀丹前風の雉子御曹司の様な文鳥小坊主の様な金糸鳥殊に水鳥が好きで濃くて艶な鴛鴦清くて華奢な鷺などは玩弄品のを買つて獨で鳥の生活を作つたものである。鳥屋町は其頃の動物園であつた。今は鳥屋は何軒になつたか。其頃夏の夕方になると町の小娘が緋縮緬に金糸で縫をした胸當をつけ大角豆と云うて五色の切を細長く袖につけ手を引きあうて歌を唄ひながら外を歩いた。それを「おんごく」といふ其調子が優しい中に哀な所があつて遠く聞くと嬉しい氣もした。

おんごく、なは、
なは、や、おんごく、なは、よい、
何がやさしか發がやさし。
草のほかげで火をこゝもすえ。

くーさーの、
ほーかーげーに
火ーをこゝもす、

ありや、りや、
こりや、りや、

文句も優しい中に哀な所があり、一畢ると直次の歌に續いて市を唄ひ丁稚を唄ひ好い衆を唄ひ、若衆を唄ひ、心中を唄ふ無心ながらに情の閃きか後の淨瑠璃の種になる暗示か、自分が先愛した音楽はこれである。六歳頃淡路町へ移つたが、自分は其頃から孤獨の傾があつて人と遊ばず、時に釣竿を持つて獨川の邊野の外へ行つたが、それは何所であつたか、今思ひまはしても北野は新開町になつてゐる、天保山は築港になつてゐる。

梅屋敷の梅桃谷の桃隆専寺の糸櫻櫻の宮の櫻野田の藤浦江の燕子
花吉介の牡丹生玉の遊園頓寺の萩木津川の植寶樹寺の紅葉大阪の町
にも春秋の色はあつたのである。しかし其後の交通の便利は月の瀬の
梅嵐山の櫻春日の藤長谷の牡丹箕面の紅葉を大阪の庭の眺にした天
王寺雲水泰清寺一心寺安居の天神清水勝曼院高津生玉森の宮大阪に
も自然の美を収めた宮寺はあつたのである。しかし其後の物質の富の
進歩は京奈良の建築程荒廢せしめ代りに其趣を削減した大阪で見
るべきものは町である。本町を探筋あたりから東へかけて見ると兩側
の暖簾を渡る風向に高く登る屋根いかに昔ながらの大阪である。今
橋は深く藏めて奥ゆかしい高麗橋は較開いて裕である。伏見町は昔和
蘭陀物を賣る店があつた所今は和漢の古道具を賣る店が多いのも時
勢を表はしてゐる。心齋橋はまた古本屋が多かつた。白張の看板に家の
名を書いたのを置いて店先に多く並べてあつたのは漢書國書横に立

て、あつたのは法帖西鶴は餘り色に耽つた報で倉の隅に押込められ
近松は心中女の文毅同様張紙になりまして宗因も來山も蕪村も秋成
も貞柳も誰も問はず最行はれてゐたのは山陽人の口の上つてゐたの
は竹外であつたが其後彼等が塵を拂うて出る頃には古本屋の数は段
々減じて今では立止つて本を見るより車で走る人通の最多い町にな
つた。平野町には太神宮があつてそこに好く書畫會があつた。髯の長
淡詩人南畫家が毛氈に坐つて入場者の需に應じ、半切や扇帖に筆を揮
うたが、それは誰々明治の初期の大阪の詩人畫人はといふと誰の名も
覚えぬ御堂筋には今も人形屋が多い。五月頃通ると嬉しいものであつ
た御堂の裏の穴門に西瓜店を出したが橋の上の氷店よりすいしげで
あつた。四橋は四渡る程すいしくもなくなつたが長堀の材木雜喉場の
魚靱の鮑魚瀬戸物町の陶磁器道修町の薬天満の野菜佐野屋橋の古着
川口の船此等はいつも大阪の繁昌の畫になつてゐる。堂島は殊に空氣

が鋭い。八軒屋は京の夢、江戸の夢を上下する所であつた。今は川蒸気もあるが、其趣は多く梅田に移つた。松屋町の安菓子屋も多い。丈に景になる。寺町は京のより寺までが並んでゐる。巫女町に口寄する氣味の悪い聲はあるか。無い。か。樂人町に莊嚴な音楽は無いか。あるか。大阪の嵯峨と云はれた天王寺の鹽町は如何なつたか。長町は表面綺麗になつたが冬の夕暮にでも通ると殊に寒い風が吹く。

大阪は同じ色を一所に堅めて、それを寄せた町である。それに昔は東西が舟の出入口に當つた。丈幅も廣い筋をつけたが、今は南北が汽車の發着點となるにつけて、交通の線も頻繁になつた。しかし大阪の土は東京程塵を立てぬ。京都程乾いてゐぬ。粘氣があつて、濃い。それは水の都の爲か。其色も鴨川の清淺で無い。墨田川の混濁で無い。淀川の藍である。茅渚の海の青である。藍に青は縦横の堀に満ちて、大阪の土を潤澤にしたのであらう。しかし其土の味は唯そこに生まれた丈では分らなかつ

た。十三から其土を離れて、先東京へ行つたが、始一年ばかりで歸つた。土の變化は忽ち脚に及んだのである。横濱から汽船で神戸へ渡つたが、先舟宿の迎の者、舟の船頭の言葉、自分には始めて故郷の言葉の神韻を解したのである。彼等は純大阪の言葉で無い。しかし大阪に近い言葉であつた。故郷の迎に逢うた様であつた。舟宿へ上つて茶一杯飲んだばかり、直に瀛車に乗つたが、梅田へ下りた時の心持！あゝ、自分は其時始めて故郷の土の味を解したのである。

家へ歸つて親同胞に逢うた時の心持！彼等の目には矢張ぼんやりした十三の子であつたか。抑々初旅の汐は十五にも十六にも見えなであらうか。彼等は其身もいかに變つてゐると問ふのであつた。最も好きな物をと芝居へつれて行つてくれたが、其時は宗十郎の荊萱道心であつた。脚氣は故郷の土を踏んで、忽直つたのである。しかもまた其土を離れて、今に何所の土にも落付かぬのである。

大阪の四季

正月三ヶ日は三都の中で最も大阪が賑しい。東京よりも儀式を重んじる爲か京の様には正月をせぬ爲か賀客の往來は町幅が狭い。丈向繁多である。羽子をつく女紙を上げる子供、これは年々減じて行くが歌加留多、トランプ取りに往來する紅紫春は最も此町に濃いのである。六日の夜六日つもごりとして七草を組板に載せ連木、鐵火箸に出、丁で囃しながら、

唐土の鳥が渡らぬ先に七艸なづな

と三度くりかへして歌ふ。

九日は宵戎として早きを尊ぶ人と十日の混雑をいとふ人、今宮西の宮の戎へまゐる。

十日戎。

十一日も残福を貰ひにまゐる。

十五日小正月として朝早く起き小豆の粥を祝ふ。八幡の八幡宮へまゐる子供は十日戎で買った飛口を持って家々の注連縄を貰うてまはり其先へ引きかけて氏神へ持つて行つて焚く。

二十日骨正月として鱈の骨と大根白豆と煮たのを食べる。

二十五日初天神 南の十日戎に對する北の賑白羽の矢を厄除に受ける。近年鷲を三百限朝早く詣る者に授ける。其中に黄金製のが一あつて、それが當る者は最吉と喜ぶ。寶惠鷲も出る。天神花を賣る。

二月節分 豆を蒔く、また

おんごろもちは内に來い、なまこごんのお見舞や。

と歌ひながら金盃を叩いて家中を廻る。夜神社へまゐる。錫鶴の羽を賣る。役者の家でも出す。

初午、二の午、三の午 商家は大抵庭に稻荷の祠を設ける。此日は近所

の子供を寄せて太鼓を叩き幟を押立て、町内をまはる。

十四日 涅槃會 阿彌陀池へまゐる。植木市が立つ。

三月三日 桃の節句 蛤汁、嫁菜の味噌汁をすふ。近頃は多く四月の此

日にする。

十八、九日より彼岸 天王寺へまゐる。一心寺、安居、天神、清水など賑ふ。

二十一日 御影供 大師へまゐる。

四月八日(陰曆)花見堂 阿彌陀池へまゐる。物干、火見に山躰、罫を竿の

先に結んで高く上げる。

五月五日 端午節句 軒先へ菖蒲を上げ露を受けて翌日菖蒲湯を立て

て、入る。但近頃は大抵一月送りにする。郊外から金魚を賣りに来る。

六月五日 縣祭 宇治へまゐる。梅の實と紫蘇を賣りに来る。

七月八日、九日 生魂祭。

十二、十三日 難波祭。

十四、十五日 八幡祭。

十六、十七日 御霊祭。

十七、十八日 高津祭。

二十、二十一日 稻荷祭。

二十二、二十三日 坐摩祭。

二十三、二十四、二十五日 瀬戸物町で陶器にて作物をする。

二十四、二十五日 天神祭。

三十一日 朔日住吉祭、堺の魚市、鞆、東横堀で干鰯で作物をする。

八月七日 笹に色紙を釣つて物干へ立てる。井戸さらへをする。

十三日より十五日 盆。

二十三、二十四日 地藏祭 紅釣提灯を掲て賑しくする。

月見 薄萩など備へて團子を食べる。

九月九日後の雛。

十三日後の月 豆を煮て食べる。

十月十九、二十日 誓文拂 御靈筋心齋橋より戎橋の間など呉服屋の

多き町は女にてつまる。大阪は男より女の多い所かと思はれる。

十一月二十二、三日 神農祭 道修町の社へ供物を持って行く。笹に虎をつけたのをくれる。

亥の子 炬燵をあける。

正月の味噌を製する為味噌豆を焚く。

蛸船来る。

十二月十三日 事始 商家では次の年の帳面上書をする。

二十日頃より餅つき 町を大釜を荷うて通る。

十日 戎

一枝の笹に小判金箱立烏帽子いれ掛さい槌たばね熨斗はせ袋とり鉢銀吹それをかたげて大阪の人が参るのは今宮の戎さんである。日は

正月の十日である。

十日戎は大阪の新年第一の賑である。恐らく大阪の一年第一の賑であらう。

十日戎は福を人世の目的にする大阪の人が福を貰に行くのである。されば其日の賣物も小判金箱立烏帽子いれ掛に福を計るか。さい槌に福を振出すか。たばね熨斗を福につけるか。はせ袋に福を収めるか。とり鉢に福を取るか。錢吹に福を入れるか。其外鯛を賣る。飴を賣る。竹把を賣る。飛口を賣る。近頃玩弄物の金庫を賣る。布袋さんも友達丈に賣られる。

福！徳！欲！押合ひへし合ふ中を飛んで行くのは寶惠親である。紅
白の縮緬で巻いて花を飾り付けた裾に紅白紫緑の春着に花を簪した
女！それを取巻いて赤い鉢巻友禪の袖を片肌脱いだ、紺間！
福も笑ふ？徳も片寄る？欲は見送る？金と色とが入違へて参るの
が十日戎である。

しかし此戎さんは髯であるといふ。

されば人は皆社の裏を力籠めて叩いて其願を聞いて貰はふとする。
しかし戎さんは金髯になりはしまいか。年々歳々大阪中の人が福々

と叩く聲に金髯になりはしまいか――

年も詰つた大晦日の前夜獨參つて叩いて見よ。小判はあるか。金箱は
あるか。立烏帽子はあるか。一年一度の外は誰も参らぬ今宮の社戎さん
はごんな顔をしてゐるであらう。いや、其時こそ微笑して眞の人世の目
的を授けてくれるかも知れぬ！

天王寺

民の滝が賑うた難波の都を見た者はあるか。堀江に投込んだ佛像を
見た者はあるか。排佛家と奉佛家との戦を見た者はあるか。

見た者はあるか。淀川である。しかし水は一時も止まらず見るより早く
流れて行く。

平安朝が芦の枯葉になるのを見た者はあるか。鎌倉の滅亡の未來記
を読む忠臣を見た者はあるか。小阪村から一轉して大阪の城下が廣が
るのを見た者はあるか。再轉して落城の火が上るのを見た者はあるか。
落城にかゝはらず富の城下になるのを見た者はあるか。富が養うた元
祿文藝の花盛を見た者はあるか。富を焼かうとした怒の火が燃えるの
を見た者はあるか。封建制度の瓦壊の烽火が天守臺に上るのを見た者
はあるか。

見た者はある天王寺の塔である、しかし火はそれも焼いて、思出も空にした。

しかし淀川は流れて止まずとも天王寺の塔は更に建つて代々の記憶を藏めがほである。

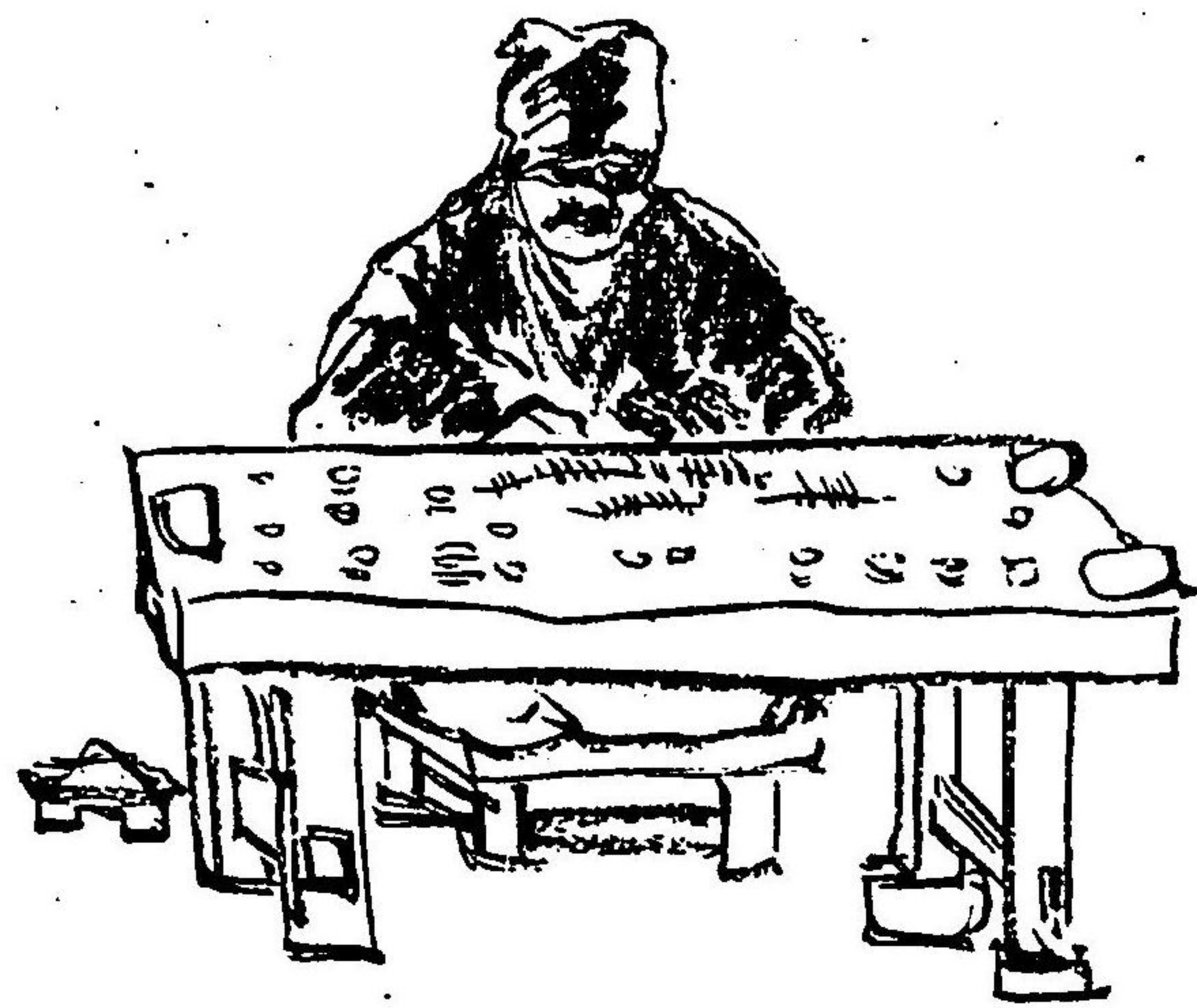
彼岸詣はいつ頃からか昔は大阪の女の衣裳比であつた浮世草子を見ると元祿頃の大坂の色は塔のまはり春の錦にした難波鑑を見る廻廊まで幕を張つて花は花と見合をしてゐる。

今は廊に張る幕も無い塔をめぐる色は桔梗か納戸春風を吹く裏は青磁か洗朱それも多く中流以下年も四十以上か十五六までが多い大坂の中心を占める今の女は三面の大黒天も難有がらす東門の睡猫も感心せず二股竹も珍しがらす蛇の井戸も恐れず引導鐘もつかず龜井水に濺がす石の舞臺の舞樂より公會堂の音樂會慈善會愛國婦人會赤十字社篤志看護婦會などで無線織初音織若葉織高浪織ゴフラン織コ

ントラスト織など新しい

春を比べる。

彼等は彼岸より此岸を廻つてゐるのである塔は退屈してゐるのであらう。元祿の夢を見てゐるか桃山の花を見てゐるか平安朝の春を見てゐるか抑も未來の大阪を見てゐるか未來記にはどこまで書いてあるであらう。



天神祭

黒い夏の空は幾多の星の目で水を見下してゐる。暑い夜の大阪は幾多の人の目で大川を見つめてゐる。

火！水を渡つて来る提灯の火！！篝の火！！

火に水を焼いて来る火の顔の猿田彦。太鼓續いて来る火の旗幟吹

貫鋒太刀弓馬!!!

火は水を焼いて舟までも焼かうとする。舟子は水を火にかけては水

へ飛込む。また躍上つては薪を添へる。

火と水と調和させて奏樂しながら来る伶人童子。童女八處女。巫子。齋

部。齋主前。騎殿。術を前後にして風。螻神興——

幾多の人の目は火に附いて行く。幾多の星の目は水に流れて行く。

天神祭は水と火の祭である。

雷となつて怒つたと云はれた人丈に火が何よりの供物か。西海まで

流された人丈に水を渡る

のか。水にも恨があつた丈

に火で焼くのか。火でも焼

き盡されなかつた丈に水

を渡ぐのか。抑々水と火の

祭は争の盡きなかつた平

安朝を示すのか。遂に盡き

ぬ人世を示すのか。

幾多の星の目は水をか

けられた火より微に光る。

幾多の人の目は火と立つ氣を水に落ちつけて歸る。

あゝ天神祭は大阪の人の氣象を渡すのか。

重宝大巾



川 涼

大阪は水の都である町幅が狭い丈川が大道である淀川は大通である横堀は小路である町を通るより川を通る方が大阪の特色が味はれる夏は殊に夕日が暖簾に消える頃手近の堀へ下りて小舟に乗ると風はまだ両側の軒の釣窓にも動かす竹簾を洩れる燈火縁側の岐阜提灯の影が緩い流に流れぬ上を流れて小橋の数をかぞへながらやうく大川へ出ると風は俄に舟の灯を煽ぐ舷を扇で叩いて謠曲浄瑠璃うなりながら鮎卵芝藤日出などの舟生洲へつけて料理をあつらへ舟へ運入れて更に廻る我等の子供の頃などは浪華橋と天神橋との間に中洲があつたそれへつけて上るもあり暫休むと寄て来るのは果物の舟善哉の舟鮎の舟花火の舟落語の舟此方の舟で飲食して彼方の舟の藝を見聞する一濟むと互に離れる知人の舟と圖らず逢ふ舟を寄せて水に

語る盃をかはして風に別れる風は愈々酒氣を吹く水は愈々赤くなる舟は愈々絃歌になる色を喜ぶ者は中をめぐつて夜を忘れる雅を求める者は更に廻つて天神橋の下を通る天満橋の下を通る網島の横を通る櫻の宮あたりまで上ると花火も聞こえぬ物賣の舟も追ひかけぬ絃歌も誘はぬ始めて舷に寄るのは月である水の都のすいしさは茲である暑い町の解脱は茲である



まかし近年川涼は振はぬ様になつた大川の水まで暑くなつたのか月まで赤くなつたのか舟より電車があたりの海山へ涼みにまで走らせる為か抑々解脱といふ事を求めもせぬ様になつた為か

夜店

夜店は晝より町の色を出すものである昔は順慶町の夜店が名物として敷えられてゐたが今は平野町のが一である一六の夜京町橋から御霊神社の前横より堺筋の東に續いて少し断えるとまた平野橋の向神明前に續く長さに於ても三都一であらう果物バナ、荒物化粧品帽子金物菓子、餠餅花簪玩弄品、餠ほうづき下駄密柑樟腦紐唐辛子笛陶器爪楊枝箱太鼓袋竹細工石鹼豆筆シヤツ新書古本古道具——最も多いのは古本と古道具で古本屋は一丁目二丁目邊に堅まつて三十もある古道具は二十餘もあるそして道修町の五丁目邊には植木屋が棚を並べる銀座や本郷程珍な新意匠が少なく、まかも人形町六角よりも雅物が多いのは土地の性格を表はしてゐるそれを見て通るのは船場丈に大阪の中流の人々西區程官吏書生は少なく南區程藝人藝子は無く多

く町家の子弟良家の子女晝は盛粧せぬと店へも出ぬ人も浴衣掛で出かける學校通で獨歩きに馴れた人も袴無しで出かける自轉車で飛びまはる人もぶら／＼出かける茶室に籠もる人も目鏡かけて出かける何さま時に掘出がある故眞砂翁が元の表紙のまゝの金平本數十冊を數圓で得たのは好古家の喧傳した話これでは百年の後の好古翁が何を掘出すであらうか元祿よりも奇妙な文明開化時代活字の油は五山版より黄ばんでも新思想を傳へた西洋文學？浮世草子より事實のまの自然主義？風本より細かい新體詩集？辨形本より長い散文詩？献上本より稀な有限版？古寫本より珍しい不遇の埋木？奈良書より早過ぎた新精神？夜店は朝より町の靈を掘出すものになるであらうか。

道頓堀

道頓堀はどんな積りで此堀を堀つたか舟を通す爲であつたであらうが、いつとなく快樂の堀になつた美感の堀になつた五坐の櫓に無数の幟極彩色の看板一列の暖簾いつも春の夜は殊に無数の火茶屋の裏まで透して紅白粉の解けた水も鏡になる。

自分は五六から見出したが其頃は前の夜から楽しんで好くも寝ず朝未暗い中から起きて出かける心齋橋を渡る頃やうく夜が明けた芝居へ入らうとする木戸で妙な音調で茶屋の名を呼ぶそれが先嬉しいものであつた、まかし大抵幕は明いてゐる舞臺は未暗いから蠟燭がついて薄明い中に重な役は代が勤めて三幕目位から本役が出た。それから夜の十時十一時頃まで、されば幕間の長さ従つて飲食の盛朝先白味噌の汁に鯛と木海月と團子の入つたのを出したがこれは尤

芝居を食はすのであつた。それから朱の段物を持つて来る。これは今でもであるが、且飲み、且見る浪華人の一の娯樂役者も氣長く演せねばならなかつたであらう。思出されるのは八十で大百日醫を振つて黄色い聲を出した多見藏である。足無しで立つた田之助である。東京初期の名妓になつた彦三郎である。最大阪的であつたのは延若である。八郎兵衛忠兵衛治兵衛文七などは柔くて艶もあり粘氣もあり濃厚な着實な曲線的な所分別があつて、潜熱があり、執着力があり、持重して遂に慘酷な事をやる所いかに大阪の都府的性格を象徴した。彼に對して一歩進んだのは宗十郎である。彼も紙治伊左衛門など得意であつたが、それと共に小野道風、春藤次郎、左衛門由良之助など稍上品な腹のある役が好かつた。まかもいよく沈着である。東京の團十郎の豪放に對して莊重である。これも亦大阪的である。彼は更に仲國に活歴式を始めたが餘りに時の趣味より早過ぎて使命を果さなかつた。兎に角大阪の劇界の先

覺である彼等に對して獨立の幟を立てゝゐたのは右團治である彼はケレン物を得意としてゐたがそれよりも最も早く明治の人物に扮した事を手柄とせねばならぬ。まかも他の二人より長く活きて自分の惟然坊應山などになつたのは其頃の子供の夢にも想はなかつた所である。其外嘉七、新雀、琉璃、寛雀、右衛門、我童など各其特色を現はしたものである。延三郎、飛鶴、璃、笑壽三郎、霞仙など大阪の娘を黨派分にしたものである。延若の衣鉢を傳へたのは今の鴈治郎である。宗十郎の意氣を襲うたのは仁左衛門である。仁左衛門が先吾、江戸城をやる。云出したのも宗十郎が進み得なかつた所。宗十郎に依て勸告されて新派を立てた川上が典型派と決闘しやうとした所。時に川上に容られなかつた伊井が横合から買つて出た所。更に川上が鴈治郎に勸めた所を魁けたのである。あの時の初日は舞臺より興があつた。大阪は其前々年其土地の悲劇の大鹽を甚しく冷遇した。東京はまた其土地の此史劇を甚しく惡罵し

た。其土地の悲劇にすら同情を表せぬ。大阪は餘所の惡罵を歡迎するであらうか。自分は先一同にそれまでの經驗を述べて注意した。まかしそれまで此派でやつて來た時代物と違ひ、板付に大役が出る。臺詞も七五で無く、齣を結ひながら日用語を使ふ。幕切も多く木無し、チヨボを用ゐず。合方も使ふ場合が無い。彼等は心に苦心して、齣の音、鐵棒の音、犬の聲、鳩の聲、さては其頃の流行唄など自然にもある。合方を適當の所に用ゐた。我當は殊に勝の寫真をモデルにして、地頭を撫付け、後から齣をつけ、た前から見ると、其儘の齣である。彼等は新派よりも自然であつた。まかもそれに技巧を加へた。自分は開場前に行く。幕間から既に來てゐる客が見える。彼等は復大鹽の時の二の舞をするであらうか。三階へ上ると、衣裳がまだ揃はぬので、先年より混雜してゐる琵琶が無いと騒いでゐる。復東京の二の舞となるであらうか。舞臺を檢分すると、道具は明治座程華麗で無い。明治座より更に打撃を受けるであらうか。幕は明く道

具は華麗で無いが新派の第一の短所であつた品位はある。合方は使はぬが淋しくも無い。木無しでも締りがある。臺詞は新派の或者程抑揚に乏しいが活歴式よりは生きてゐる。東京程の悪罵も起らぬ。平八郎を怒らせた大阪は安房守に同情を表する様である。

鴈治郎が吾嵯峨野の時頼をやつた時宗十郎が仲國の時の事を話した自分はそれを見なかつたが彼は其時小督になつてゐると宗十郎は總て火を消し月の光丈にして、それを知るべに尋ねて出た餘りの自然は「暗い、暗い」と云はれたといふ。彼はまた巷へ入つて上意を傳へ様として笏の置所に困つたやうく人の踏まぬ所と疊の縁に置いた次の日から首筋へ差したが、見物は其苦心を見ず、次の幕の牛若の大立廻の方に喝采をしたと、鴈治郎は嵯峨に縁が深かつたが、此時頼は宗十郎より延若の進化と思はれた。彼はいよく周到で曲線的で僧形になつてもおのづから色氣があるのは大阪の濃情を象徴する。

大阪の特色を見るに最好的のは芝居である。大阪の風俗を見るに最好的のも芝居の枝敷である。大阪の女性は東京よりも京都よりも芝居を第一の晴の場所とする。舞臺より著しい近頃の粧を書留めると鼠納戸に高の紋織對の着青磁色に墨畫の棕櫚の無線織の帯、眞珠入浦公英の帶、白地有職模様友禪縮緬の襦袢は船場邊の豪家の若奥さんか。黒の高浪織の羽織にやたら縞のお召、白茶羽二重更紗の裾廻京のゴフラン織の帯、金剛石入の茶の花の帶止はごこの御新造、葡萄鼠のお召に共色で七五三を織出し、八掛は濱縮緬を同じ色に染めて同じ模様を白上にしたのをつけ、帯は焦茶地へ白牡丹を一輪葉を墨繪風に織つたのを締め、襟は黒の鶉縮緬に銀絲で藤浪を陰陽に縫うたのをかけてゐるのは尤凝つたものである。東京よりは目立たぬ裾模様京よりは凝つた八掛はまた土地を表はしてゐる。

・道頓堀は大阪の趣味の堀になつた。

千 日 前

鉦の音鼓の音太鼓の音笛の音三味線の音歌ふ舞ふ踊る演じる——
見る聞く飲む食ふ酔ふ眠る耽る溺れる——千日前は元日から大晦日
まで大阪の人が歡樂を恣にする所である。

まかし封印を切て小判を擲つた忠兵衛は千日と聞て身顛ひした！
勘當された助六は揚卷の手を取つて茲へ駆けつけた！

心中した所心中の芝居！

血と涙の跡に見世物の小屋！

千日前は情欲の輪廻の所かそれもまた進化して自分が子供の時は
救世といふ物があつた熱帯の地から忽ち救世も廻りくつて幾度か行
詰る中心點は見えながら行かれぬ引返さうとする。附いて来る人で
詰つて動かれぬ。巡査の後に附いて行つたら好いかと思ふと巡査も亦
行詰る。これも人世の行路を象徴してゐるか多かつたのは活人形であ

る。まかも多かつたのは血首殺死——惨酷な材料である。最も記憶を不
愉快にするのは三條磔で斬られる島田左近であつた。自分はそれから
活人形といふ物が氣味悪くなつた。輕業はまた太古の人間の獸性を示
すものか。一筋の糸一本の竹で半空に踊るが何も無しで眞空に飛ばれ
ぬのは遂に天人になれぬ。未來の暗示？曲馬は獸を使ふ。伶俐を誇るが
遂に人間自身も獸と廻る。地球の馬場！獸に人情を演じさせて人間と
餘り變らぬ。猿芝居犬芝居神祕の様で種は何でも無い。迷信的宗教の手
品、自然を自在にして矢張水だらけになる。自然の水藝——それが此頃
は浪花節になり、劍舞になり、殊に最多く活動寫眞になつた。うろくそ
まごつく救世よりゆるく動く活人形より獸や自然を使ふ諸藝より、
眞實其儘目が舞ふ程活動するのが今の人には適してゐるか。
心中の靈は喜ぶであらうか。獄門の首は笑ふであらうか。未來の情の
子は何に凝るであらうか。

浄瑠璃

大阪を象徴するものは城か橋か市場か川口か芝居か最も大阪を象徴するものは浄瑠璃である腹の底から聲を出す所詮程品が無い代り深酷な所一中程濫くない代り實着な所清元程意気でない代り濃厚な所常盤津程滑でない代り粘氣のある所長唄程陽氣でない代り熱情がある所正に大阪の人の特性を表はしてゐる義太夫は大阪の人の特性を捉へた者である。

大阪を見やうと思ふ人は城宮寺市場を見まはるも好い大阪の人を知らうと思ふ人は先浄瑠璃の座へ行つて義太夫を聞くが好い。

自分が大阪にゐる間は芝居より缺かさずに行つた春太夫新靱太夫は聞きえなかつたが呂太夫の重味津太夫の濫味彌太夫の臺詞殊に攝津大様の全盛期の美聲濃艶で、まかも纏綿な所夕霧梅川小春お染三勝

と引いて来た大阪の美を擧げられた様である。

まかし浄瑠璃の文句に趣向は舊劇同様段々時代に後れて来たまかも諸程古典的でもない唯世話物の數種が稍永久の人情を表はしてゐるがこれも後世の改作が多い。さればこれを聞いても聲樂の要素の詩意は全く度外に置ねばならぬのである義太夫はもう發展し盡したのであらうか遂に封建時代の藝術として終る者であらうか大阪の人の特性は永久であらうのに浄瑠璃はそれ以上表はしえぬのであらうか一とせ櫻時雨を京で演じた時始めてよしのになつた芝雀は其喜を表して其句碑を鳥部山へ立てた出来上つて披露の會をしたのは碑を抱く櫻もまだ堅い二月の末小袖幕の寒風を凌いで書馬堂に一碗をすすると堀江座の興行人も來合はせてかの作を更に浄瑠璃にして貰はれぬかといふそれも面白からうと承諾した次の月書上げて送ると更に東京にゐる仙左衛門に送つて節をつけさせる伊達太夫は尤も熱心

で自分の家へ泊りがけに来ては其抱負を語る彼は兼て斯道を發展させ様と思つてゐたのである。仙左衛門はまた團平の衣鉢を傳へた者團平が生きてゐたらどの位喜ぶでせうと彼等はいふ何さま團平は創作的天才であつた。されば舊作にも新手をつけて中將姫の雪責なども先人から慣例を聞いたが舞臺へ上るとその通りにした所は極僅で跡は全く創作した。壺阪も反古に埋もれてゐた中から掘出して意味をなさぬ悪文を巧妙の節で復活した。他流の文句も轉用して勅進帳など此節の味を加へた時に其妻に文を作らせて舞臺へかけたが遂に好作家に逢はなかつたのである。さかし其逸話を聞く愈々藝術家の氣質を備へてゐた。或日其家へみすばらしい姿の男が來て私は門附をして暮らしてゐる者でどこでたれ死するかも知れませんが一度お師匠様の一曲を聞かして戴いたらそれを今わの際に引導と思つて快く死にますといふ女房はうるさく思つて留守といふと中に聞いてゐた團平は飛

んで出ていや居ます此方へと奥へ通した。私もまだ未熟やがまあ一聴いて下されと三味線を取ると男は望外の喜でこれ兼ての願もかなひましたとくれぐれ禮を述べて歸つた跡で團平は女房を呼びつけて何人であらうが道を慕つて來た者を嘘をついて断るとは何事やそんな者は私の女房やない出て行けといふ女房は驚いた様々に詫言して辛うじて免されたといふ彼の藝術はまた彼の信仰であつた藝術の暇があると神佛を拜したが其信念は神でも無く佛でも無い彼の目には神も佛も同じ事であつた。或時田舎の豪家へ招かれて其奥座敷に泊るとまだ新しく磨き上げた床へ線香を盛に焚いて朝夕に祈つた主人も流石に迷惑顔であつたから弟子は見兼ねて注意するとそんならお前等が休まずに稽古をするが好い。斯道の暇が無かつたら神も祈らぬといふ。されば金錢に無頓着で節季には有合の金を一箱に入れて入口へ出して置き債主に勝手に持つて行かすのであつた。舞臺の上で死

にたいと兼々云うてゐたが、或時稻荷座で志度寺を出した彼は今度こそ好く聞いてゐてくれと云うたが、初日の夕暮今お辻が命を献げて金比羅に祈つて文句も丁度斷末問といふ所に至ると絃がきれた三味線の絃で無く命の糸が切れた團平は藝術を手にして舞臺で倒れたのである。

自分は晩年の彼を聞いたが、遂に會見の縁がなかつた。まかし仙左衛門は其秘訣を時雨に應用して、其夏には自分の處へ來て聴かせた。自分は更に注意して更に完成させ愈々公にしたのは其十月であつた。京の花は浪華に返咲したのである。

伊達は其喜を表して次の年の青葉に手飼の杜鵑の好く鳴く頃其家に茶の會を催した。吉野の襦袢模様を蒔書にした香盆に光悦の黒茶碗、花車の茶入一輪さしの大山道別席の魚籃に入れた虞美人草こそ京より浪華の色を象徴してゐた。

蜺川

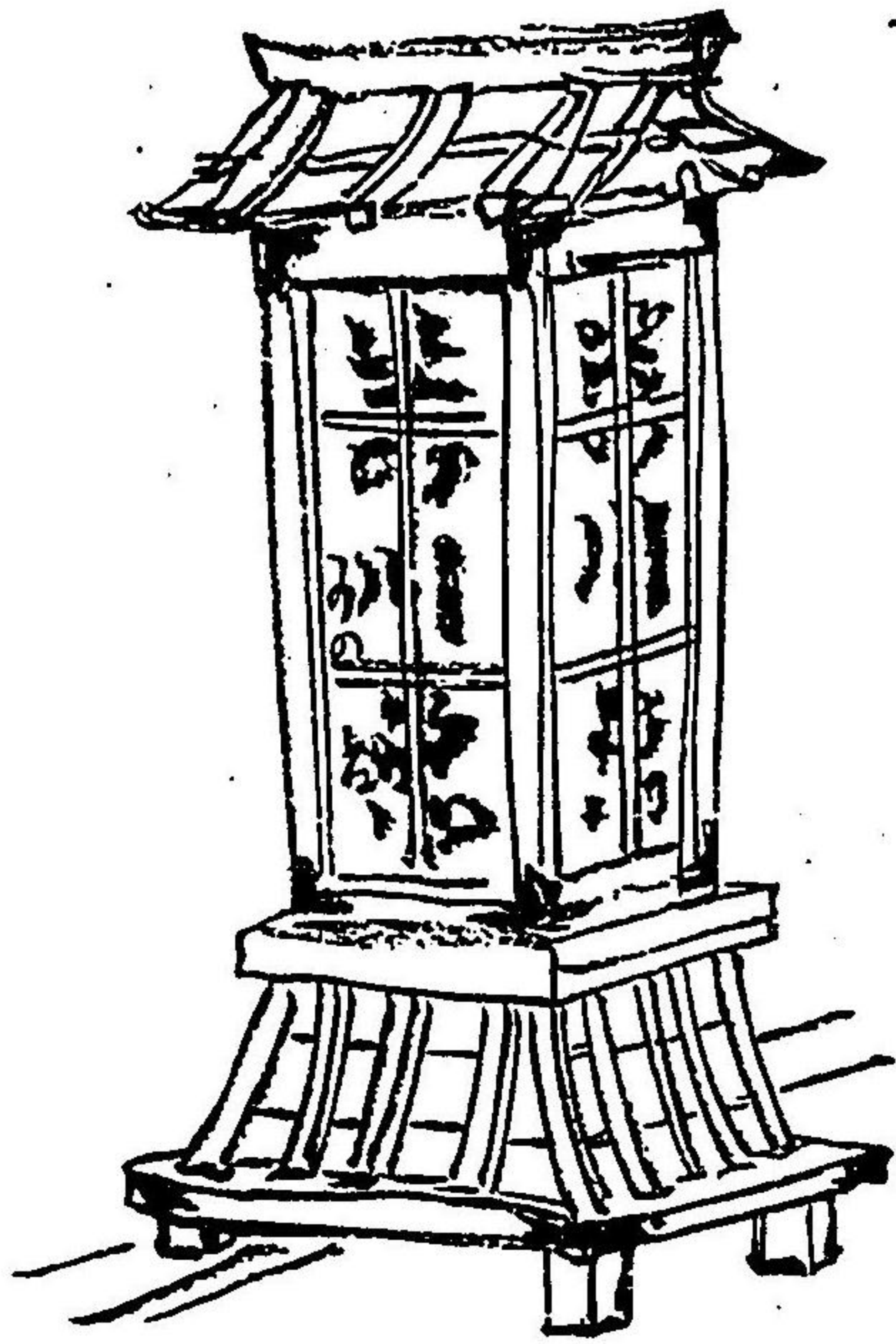
日の光で見たら狭い、黒い、泥水の流であつた。まかし月の光で見たら濃い、深い、情の流であつた。

燈の光も流れた、三味線の聲も流れた、紫の影も流れた、蜜の様な言葉も流れた、紅の涙も流れた、火燧の火を濕らす涙も流れた、妬と恨の涙も流れた、義理の及で刺す戀の血も流れた。

今は電氣燈で見ると情の流もなくなつた、泥水の流もなくなつた。蜺川は火に焼かれたのである、焦げた土は情も涙も皆埋めたのである。

まかも燈の光は土に續く、三味線の聲も土に響く、紫の影も土にさす、紅の涙も恨の涙も妬の涙も土に落ちるか、心中の血も土に染むか、心中の最多い處は金の遺取の多い處、金の爲に心中が多かつたのか、

金の爲に心中が多い程情が多かつたのか、現實的丈それ丈空想的であつたのか。
 空想は今夢になつた、蜷川は土になつた。色も聲も情の流もなくなる。丈愈土に染込むであらうか、土は更に埋めるであらうか。
 靈の光で見たら、土の色はさうであらうか。



兼 葎 堂

温厚な眉好意を湛える細長い目多趣味を現す太い鼻沈着を掩ふ厚い唇福德を垂れる長い耳——兩國橋の上で逢うても一見して大阪の人と知れるであらう。まして船場の真中で、黒い暖簾を分けて入つて、薄暗い店を通り、較明い玄關を上り、奥座敷へ通ると一轉して床に元明の書畫壁に、蠻方の地圖棚に内外の奇書草木金石珠玉蟲魚介鳥獸古錢古器物隔に涼爐提籃其中で此人に逢うたら、いかにも大阪の人に對する心持がしたのであらう。

彼は酒造家の主人である。そして兼葎堂の翁である。
 子供の時から植物と畫に興味を持ち出し、十二三から物産を調べ出し、十五で家を刷いで家業を營むと共に益々學藝を修めて、近畿の名家に就き、趣味は愈々廣くなつて風雅百般に涉り、遂に大阪恐らくは海内

無比の好事家になつて、大阪へ来る者は必ず彼を訪ひ諸國から奇物珍
談があると彼に報じて、往復虚日無かつた福人——神仙中の人の蘭山
も彼の家では俗塵を忘れたであらう。一世を蔑視する趙陶齋も彼の密
柑酒には酔筆を走らせたであらう。酒を飲まぬ粹士の柳里恭も彼のも
てなしには杯鉤を重ねたか。大雅堂とは十三から親交を結んで五十に
は片手の痕を其帖に留めた。高芙蓉が考出した急焼も先彼は用ゐたで
あらう。賣茶翁が使ひ馴れた茶器も遂に彼の家に藏めた。噂々の美酒彼
の店から送らなかつたか。奴の小萬も傘借りに寄つては夜を深かした
であらう。司馬芝叟も長話の種を聞きに來たであらう。栗山も小赤壁よ
り和蘭陀の奇物に目を見張つたであらう。大典も色相の多趣に微笑し
たであらう。混沌社の人々も詩會の世話を頼んだであらう。春水も歸省
毎に好土産話を得たであらう。氣むづかしい秋成まで長々とあしかひ
の言葉をつゝるとは——彼は眞に富める人であつた。黄金よりも風雅

に富める人であつた。趣味に富める人であつた。風交に富める人であつ
た。治く物を集め、廣く人と交つて精神を富ます人であつた。彼は眞に富
を解する人であつた。
大阪を物質の町と思ふ者は彼を叩け。彼の家は今跡も分らぬが彼の
様な人はある。彼の一部を傳へた人はある。暖簾の黒い中に薄暗い店の
中に算盤の音のする所。商品の山となる所。或は京よりも、東京よりも、よ
り多く彼の衣鉢を傳へた人はあるであらう。彼よりも、より多く、より廣
く、世界の奇物を集められる時代。世界の雅人と交はられる世。彼よりも
大に富む人が出るであらう。菲葭堂は大阪人の説明者である。

天守臺

自分は今大阪城の天守臺の跡に立つてゐる、四方を取圍むのは煙である、まかし六十州の大軍が放つ戦の煙では無く、六十餘萬の人口が立てる生の氣である。永久の春が立てる命の霞である。

千疊敷は煙になつた、まかし町は幾億疊と廣がつたか、千成瓢箪は火になつた、まかし富は幾億成となつたであらう、天守臺は礎ばかりになつたが、地の眺は桃山の昔よりも盛である。

英雄の古跡よりも民衆の現在未來までも想はしめる、まかも彼は最も民衆を綜合した英雄であるから、跡も無い聚樂より花になつた桃山より、冷な阿彌陀が峰より、此方が彼に似合はしいか、彼は此煙の中に躍つてゐる様である、彼に凝つた生氣は此霞の中に散つてゐる様である、千軍萬馬と駈廻つた雄心は商業に駈つてゐるか、工業に廻つてゐる

か、科學に走つてゐるか、文學に飛んでゐるか、藝術に躍つてゐるか、抑ふ更に一の或者に凝るであらうか、更に新なる或者になつて民衆を綜合するであらうか、將又異なる或者になつて民衆と戦ふであらうか。

個性も全體の一片ならば何故調和せぬ所があるのであらう、英雄も民衆の總合ならば何故戦ふ所があるのであらう、最大な英雄は最多く戦はねばならぬのであらう。

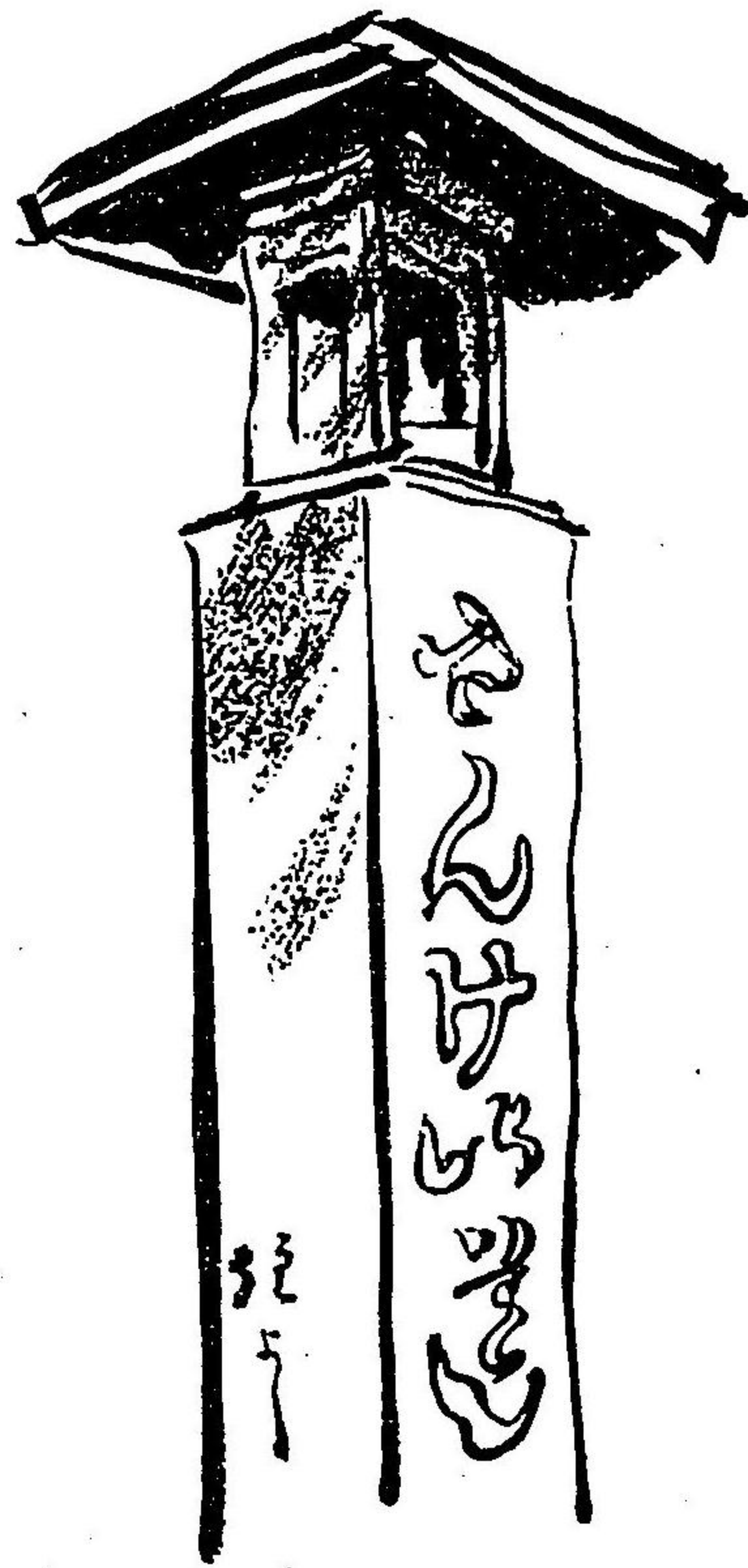
最多くの戦は最多くの民衆の爲か、未來の民衆の爲か、最大な戦は最大な調和の爲か。

さらば未來の民衆は其個人に向つて感謝するであらうか、抑ふ尙惡罵するであらうか、呪咀するであらうか。

了解し易い英雄は煙になつても神の様に拜まれる、了解されぬ英雄は神になつても煙であらうか。

煙は愈立昇る、煙は空に散つても生の氣は立つ、三千世界の戦の塵は

立つ。百萬億劫の春の霞は立つ。
自分は天地の霞と煙の中に立つてゐる。

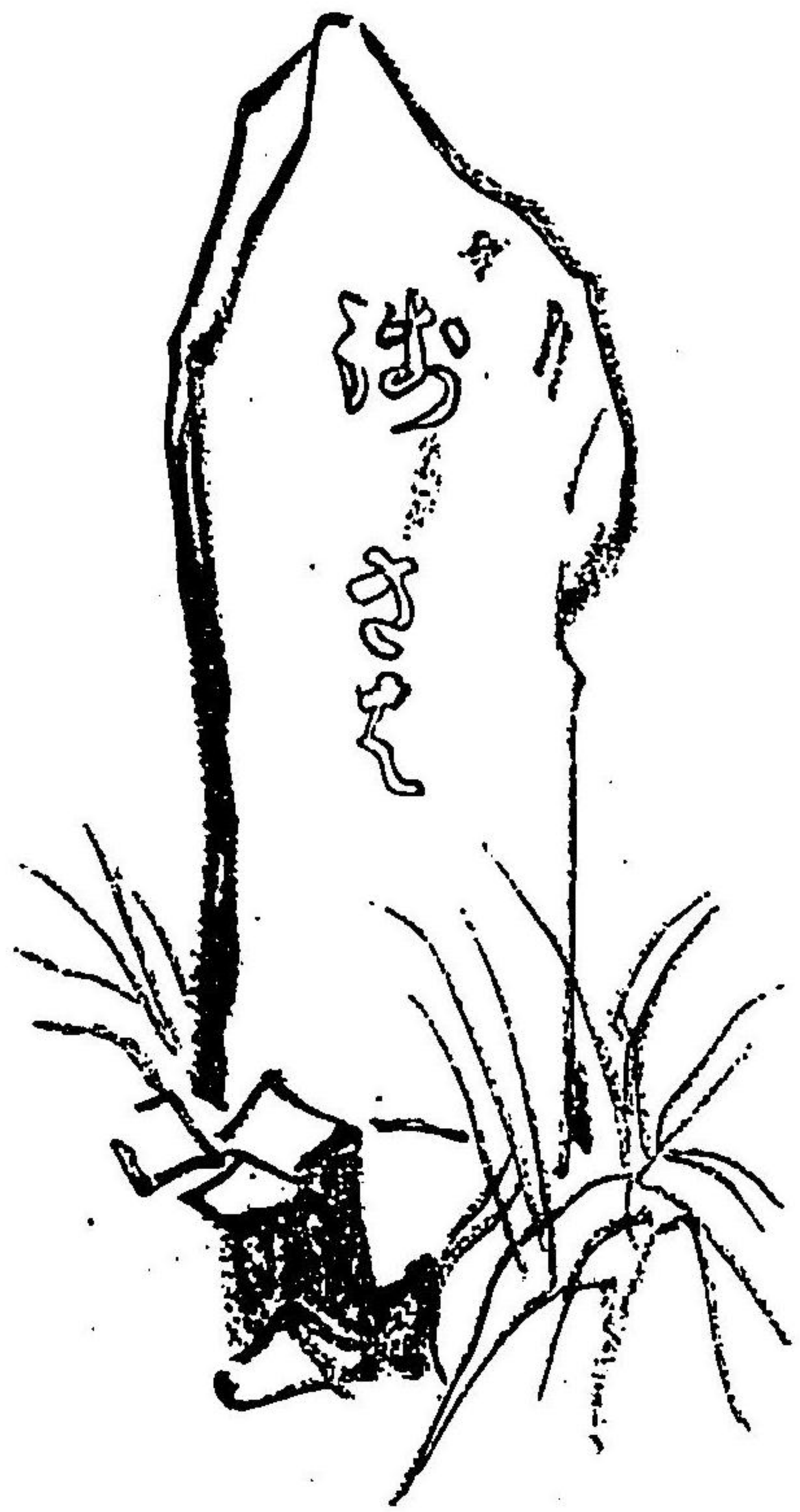


住吉

中の芝居の稽古を見に行つた夜、瓢々亭に泊ると翌日主人が案内で住吉を見まはつた誠久々である。先松原へ行く、こゝは昔舟で来て高灯籠の邊へ上つた事があるが、今は灯籠はあるが神秘劇の道具になり相に荒れてゐる。其代り松原は茶店で満て、月落ちかゝる淡路島所か新演劇の序幕に似合はしい街道へ出て東に折れ、文海子を叩いて其紹介で其隣家にある満干の手水鉢を見た。これは千年の昔海中から出たものといふ。何様海原の底の千古の秘密を吸収してゐる様な、まかし日々汲み替へる陸上の水で姫の戀も洩らさぬ様な、また街道へ出ると西側に石屋がある。主人は關西第一の名手といふから一寸覗いた。長い道具の大きな古朴な顔いかに昔の名匠の相である。まかしの世とはいくばくの距離があるか、いや、尤停滞した彫刻の界なまじ特色を出した

人物を侮辱がほの肖像より、こんな翁の手から飛出す猿や狢犬の方が多く活きるかも知れぬ社へ入ると大小種々の石灯籠其前に書した字は多く名家の筆といふので注意すると何様海屋のがある、小竹のがある、山陽のがある、大雅堂のもあるといふがそれは見當らなかつた、趙陶齋が日本にもこんな能書があるかと驚いたのも知れなかつた昔はこんな物にまで趣味を凝らして名家に頼んだものか名家まで萬年筆を用ゐる今の世とは、ごちらが萬年に傳はるであらう住吉踊や、小人形の店を見ながら横へ出て丸太格子へ寄つた、こゝは表を太い丸太の格子にしてある所から名に呼ばれる中は格別變つた所もないが、蛤汁に蒸蛤餅、棒錮、菫蕪の田樂、淡泊な野趣は昔の住吉を味はせる。まかし小町茶屋は跡も無い、今の才女は落魄しても茶を酌む程洒落にはならぬのか、今の客は長い柄で茶を出しても無益な程あつかましくなつたのか、まかし赤前垂が呼び立てた三文字屋も伊丹屋も無くなつた。さては嗟哉

野から尋ねて來ても雨と月とに暮さわづらふ柴の菴は尙更と暮までも待たなかつた。



堺の町

我等は堺の町をあるいてゐる。大阪の町よりも道幅の廣くゆつくりした所。大阪がまだ小阪の寒村であつた頃。早く大港であつた様子が想はれる。京は権力の争で焼野になつた頃。早く外國の潮の寄つたのは此所。朝鮮支那の産物が先市を賑はしたのは此所。葡萄牙人の口から基督教が畿内へ入つたのも此所。靈を救ふものと共に肉を殺す軍器が入つたのも此所。靈肉を鳥と飛ばして老和尚が笑つたのも此所。肉に依つて肉を救はうとした女が肉を晒らしたのも此所。手捕鍋一に口を過して、まかも其口も戒めた一路が市に隠れたのも此所。金の角の牛に乗つて、宵栢が逍遙したのも此所。花も紅葉も泡にした紹鷄が浦風を聴いたのも此所。雪間の草の春を見やうと與四郎が萌えて出たのも此所。一代の殺氣を刀の鞘に笑ひ納めて新左衛門が洒落出したのも此所。蓮華經よ

り小唄に解けた隆達が破れ菅笠を唄つたのも此所。外國地理に精通したお蔭に外征の先鋒となつた攝津守が薬を刻んでゐたのも此處。呂宋の波を冒した助左衛門が太閤を玩弄にする玩弄物を並べたのも此所。まかし其跡は？

外國の潮は海に向に出來た新しい港に寄るか。産物は小阪から廣がつた。大都會に寄るか。西教は血と流されて復活したが昔とは如何であらう。靈肉を一笑する鳥は何處に？野晒の骨は復乳守の花となつたか。手捕鍋は古道具屋にも無いか。金の角の牛は住吉祭にも出ぬか。浦風は三味線を傳へぬか。雪間の春は枯野の霜にならなかつたか。永劫の殺氣は大砲の穴にも塞がらぬか。破れ菅笠は芝居にも上らぬか。藥屋の子は朝鮮より西洋の地理を讀むか。呂宋土産は博物館にもなからうか。

いや古跡といふ感じもせぬ。
まかも古い大港の空氣は何となく動いてゐる様である。

我等は先南宗寺を叩いた表門を入つて甘露門を抜けると京の寺程
幽寂で無い庫裡から入つて本堂へ上ると大和の寺程徹の香が無い緞
部の好んだ庭も荒れ利休の作つた茶室も荒れたが唯面白いのは昔此
濱へ寄つたといふ卒都婆を使うた落懸である。さては地獄の幽霊にで
も一碗立て、ほしいが餘り解脱し過ぎて一輪の花も無い本堂の向に
権現宮がある。これは聊不思議と思ふと其前に更に小さな堂があつて
其椽の下に古墳がある。愈不思議と思ふと其前に澤庵の文を刻した碑
がある。讀まうとするとそれは削つてある。益不思議と思ふとそれは家
康の墓といふ傳説があるといふ。最不思議と聞くと大阪の夏の陣に幸
村に追ひかけられて一槍突かれ遂に落命したのを密に此處に葬つた
といふ例の大阪最負の空想か。まかし椽の下に葬つたのは何故であら
う。碑を削つたのは何故であらう。秀忠も家光も參つたといふ證據があ
るのは何故であらう。假に事實としても大阪は落城せねばならなかつ

たか。一個人の生死に關せず大勢は優者に與したか。そこまで連想する
には餘りに信じられぬ古墳より更に墓地に入つて較確な紹鷗のを尋
ねた耳を立てると茶を立てる音がするといふ利休のと同然石の空間
に動く空氣の作用。これは事實である。まかしそれまで聞かすとも松風
は更に確な茶を立てるやうと見まはすと尙相も相伴してゐる。池田
の牡丹より此處の方が落付くか隣の大安寺を叩くと、その襖には永
徳が松を描いてゐる。これを書終つて東海道を江戸へ下る途中未完
全な處を思出し、鳴海からはる／＼引返して一枝を添へたといふ藝術
家の苦心は藝術其物より趣味がある。藝術家自身が最妙の藝術か。柱に
松永久秀が餘りの完全を戒めて切つたといふ刀の疵がある。これはま
た殺風景。最期に釜を惜んで壊す程の男丈に自身まで悪い痕を残した
ものである。少林寺は釣狐の傳説のある所。殺生を戒めながら自身も食
欲に釣られる狐のをかきさ化た僧より僧自身の諷刺の様な獵師が傳

へたのか狐が嘲つたのか、そもまた僧自身に無意識で出来たのか。寺は甚狭く殊に普請中であつたが、後に小さい竹林がある。昔釣狐を勤める時は、その竹を受けに来て、白藏主の杖にしたといふ。大寺はいかにも名所、園繪の景である。まかし何の傳説も古事も思出さぬから、そこに通抜けて、妙國寺へ行く。先其庭の廣さ、いかにも數十人の切腹に十分であつたであらう。鎖港の餘波の犠牲になつた人々より、京へ移されても故郷を慕うて夜々泣いた蘇鐵を見ると、いかにも故郷の土の様に着いてゐる。一族の様に堅まつてゐる。大小高低、親子同胞の様に親しみ合つてゐる。これでは移した權力者が其家來の手に討たれた時、更に相抱いて無事を喜んだか、下に針が多く投げつけてゐる。彼等はそれを餌にするとか、彼等も鐵を嗜むとは？ それとも鐵を消化するのか。我等も一投げてやらうとも思うたが、誰の身にも寸鐵も帯びてゐなかつた。

濱

寺

白い月の秋である。

我等は松の木の間をさまよふ。松は春より臘である。影は松より墨畫である。我等は影より夢である。

我等は砂の上を行く。砂は海より鉛である。海は空より空である。島は空より解けてゐる。松は遠く空を廻つて、砂も亦空に入るか。我等は空より空を行く。

白い曉の秋である。

我等は波打際に立つ。波は空を砕いてゐる。海は砂より鉛である。島は松より臘である。月はもう島に落ちたのか。

我等は空を見上げた。月はまだ中空から稍西にある。
白い月の曉の秋である。

江口

假の宿は残つてゐる誰が惜んだものであらう心とひなと主人は云うたものを。

其主人は？ 其客は？ 朝歸つた平家は？ 暮に來た源氏は？ 紅の燈籠いた水樓は？ 緑の酒の溢れた月見舟は？

皆残つてゐる。

雨は降らずとも君堂に立寄ると君も法師も平家源家と無常の浮世も浮世の中の浮世の河竹の様も心の流に浮いて來る。

心を留める爲か、いや吾心も留めぬのである。それに残るのは尙惜む心か尙残す君の心か尙宿る歌人の心か尙迷ふ浮れ男の心か美を喜ぶ後の世の心か滅しては残す自然の心か。

自然は最妖艶な浮れ女である平家も源家も北條も足利も豊臣も悉

捉へて皆破滅した。

まかもまた最愛着の深い女である。一夜の客も跡を留める跡も無い處も心に留める心を留めぬ處も跡を残す。さては天地を破滅しても亦長く残すであらう。

浮れ女の姿に恐れて逃げ隠れする生道心は命を知らぬ者！ 深情の自然の魂を捉へて時に恐ろしい破滅の手をそれより熱い愛の手で活かす者こそ眞の情人？

情人の心には儘にならぬ浮世も無常も空も春の雨！

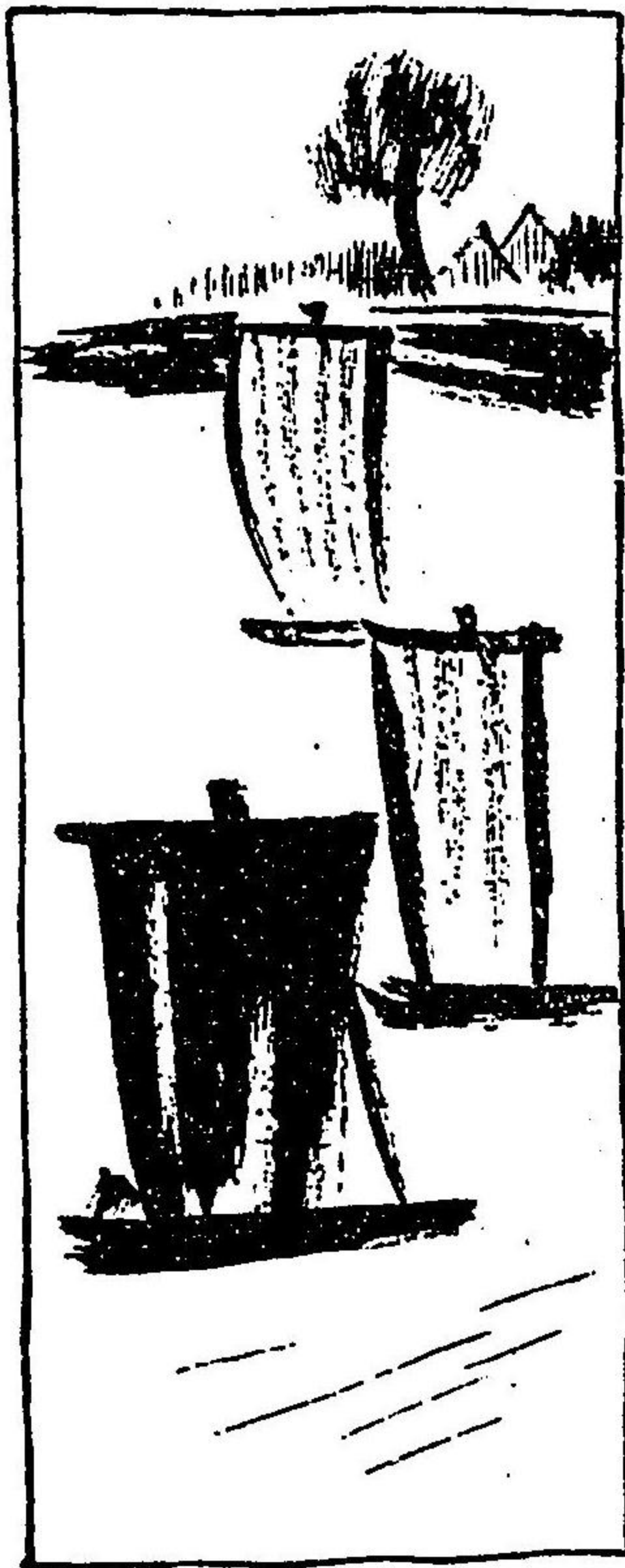
情人の心には鞘を當てあふ平家も源家も北條も足利も豊臣も徳川

も秋の雨！

恨も憎も怒も悲も哀の露に留めて後の情人の心に残す君の面影自然の君の心もこれであらう。

江口の君の心は？ 法師より深い情の客の目には斷られぬ一時の宿

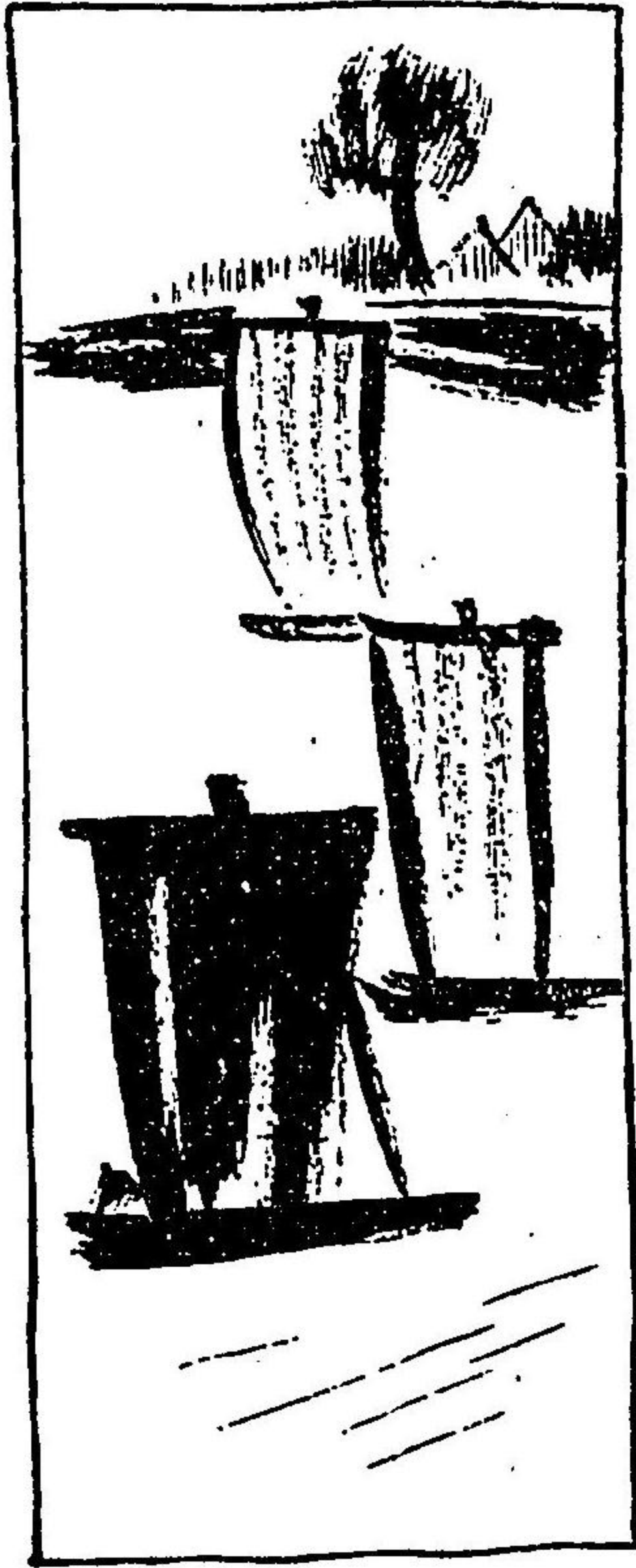
まかもどこへ隠れたか禿より田舎娘が渡しを呼ぶ聲につれて乗ると
象より遅い舟の脚に秋の日は赤く灰色の雲をいろごるのである。



蕪村の故郷

或日春風馬堤を上つて蕪村の故郷を訪うた櫻の宮の東半里ばかり、
誠に堤長くまた遠い芳草香芹昔ながらにあるが、一軒の茶店も無く柳
も亦枯れたのか老婆子に問はうとして影もない古驛とは何所を指
したものであらう水際の兩三家寂として猫も来ぬ行き行きて又行く
と堤の陰平野の中に一團の民家があるそれが毛馬村である家は多く
瓦葺で較町の氣味があるまかし木立も無く森も無く寺と社と相並ん
で、其裏に學校がある村を横ぎるのは泥水の流誰の兄弟やら田舟を漕
いでゐる今は寧大阪へ出て奉公する下女の故郷らしい。
彼の親は何者であつた時は方に享保元年入代つて元祿の豪華を代
表した光琳は京に死んだお奉行の名を忘れて叱られた來山は今宮に
死んだ彼がそこへ近い天王寺へ移つたのはいつであつたか所の名物

玄かもごこへ隠れたか禿より田舎娘が渡しを呼ぶ聲につれて乗ると
 象より遅い舟の脚に秋の日は赤く灰色の雲をいろごるのである。



蕪村の故郷

或日春風馬堤を上つて蕪村の故郷を訪うた櫻の宮の東半里ばかり、
 誠に堤長くまた遠い芳草香芹昔ながらにあるが、一軒の茶店も無く柳
 も亦枯れたのか老婆子に問はうとしても影もない古驛とは何所を指
 したものであらう水際の兩三家寂として猫も来ぬ行き行きて又行く
 と堤の陰平野の中に一團の民家があるそれが毛馬村である家は多く
 瓦葺で較町の氣味がある。まかし木立も無く森も無く寺と社と相並ん
 で其裏に學校がある村を横ぎるのは泥水の流誰の兄弟やら田舟を漕
 いである今は寧大阪へ出て奉公する下女の故郷らしい。
 彼の親は何者であつた時は方に享保元年入代つて元祿の豪華を代
 表した光琳は京に死んだお奉行の名を忘れて叱られた來山は今宮に
 死んだ彼がそこへ近い天王寺へ移つたのはいつであつたか所の名物

燕膏を先俳號にするからは、そこに育つて大阪の趣味は先其頭に染んだであらう。まかし「浮世ながら住めるが徳」と算盤置く西鶴程染んだであらうか。富士の山を夢に見て「路銀も入らずくたびれもせず」と夢まで現実的に解する貞柳程染んだであらうか。「すいしさに四橋を四渡る」程十分の興を恣にする來山程染んだであらうか。「朽せぬ夫婦の魂離れぬ」と情の極致に執着する近松程染んだであらうか。網島や八百屋の心中が道頓堀を騒がせた頃はまだ六七であつた。少年時代の句はどれであらう。「片町にさらさら染むる」春風「源八を渡りて梅のあるじ」の姿「月は東に日は西に」長閑な菜の花の野「一面釣糸吹く秋の風」のかなしさ。用は「何に世渡る家」のあはれさ。此等は大阪の光景から得たのであらう。「お手討の夫婦なりし」昔の思出「轡走る友切丸」に仰ぐ空「それも清十郎にお夏の」書團扇此等は大阪の芝居から得たものではあるまいか。「不動描く琢磨」の極彩色に更に添へる牡丹の濃厚「日歸りの兀山越えるあつさ」の重複「む

さゝびの小鳥はむ「枯野の現實」負けまじき角力を寢物語「の惘笑」「亡妻の櫛間に踏む」執着「ひねもすのたり」打つ春の海の悠長「誰が爲の低き枕」の潜熱此等は大阪の特質から得たのではあるまいか。二十代で去つて江戸へ行つたが、十年の生活いくばくを得たであらう。三十六からの京住居、京の山水と歴史は彼を畫家にした。浪漫的にしたまかも光琳程鷹揚で無い大雅程超絶で無い。芭蕉程冥想的で無い。自然の美を描くが、そこに人間と同様の象徴を認めたらであらうか。歴史の事物を捉へるが、それも自然と色彩上の配合ばかりである。彼は「假名書の詩人」としては餘りに多く畫人であつた。まかも南宗の畫人としては餘りに多く現實的であつた。まかし有聲無聲を兼ねて後の抱一程纖巧で無かつたのは時代の中間に出たのと大阪に育つた所もあらう。

自分は何か彼に適當の資料を見まはした。
數入の宿に狂女の聲も無いのである。

歌人村

高根の北に古曾部といふ小村がある。今は陶器で聞こえてゐるが昔は歌人の村であつた。平安朝の初期の花であつた伊勢は其山陰に閑居して其跡は寺になつてゐる。閑居しても尙花は見られたかつたか。外のちりなん後ぞ咲かまし」とよんだ櫻は門前にある情を磨つた硯は本堂に納めてある。洗ひ上げた元政が自筆の記もある寺の東山の懐に小さな池がある。名も無さ相ながい。かにも静石にかけて波立たぬ水を聴くと姫が沈めた思が泡より軽く吹返して新しい春風とさゝやく様である。南の方には平安朝の後期の秋草であつた能因の遺跡がある。文塚がある。霞と共に出て「秋風ぞ吹く白川の關」の一首を實にしやうと、行脚と披露してこゝに籠り顔ばかり日に焦して半歳を過ごしたとは空想の妙を解せぬ現實的の人心。これも時代の顔唐を表はすか。さらば其靈を

呼んでも雲雀程も立つまいか。更に東の方に金龍寺山がある。細い小路を上ると半腹に金龍寺がある。春の夕暮にけふも來ると入相の鐘はけふも鳴つて花はけふも散つて行く。これは現實的でまた神韻があるのは彼の居に近かつたからか。彼の心に近かつたからか。花は心に散つて心の花と咲く春の山寺哀の中に美しい餘韻はけふも響く永久の命彼はどこまで解したであらう。

業平の塚もあるといふが露と消えたのか。鬼に食はれたのか。知れなかつた。

近松の墓

神崎の驛から十町ばかり、北の方へ行くと久々智である。街道でも無い極小村で、あたりに丘も無い、林も無い、川も無い、唯一廣濟寺、それも小さく、何の趣も無い、玄かしそこに巢林子が眠つてゐるといふ。我等は先方丈を叩いて何か遺物はと問うた、それも無い、唯過去帳を持つて来た。二十二日の所を明けて見ると、稻荷大明神、聖徳太子、最明寺、殿、其下の段に阿耨院、穆矣、日一具、足近松門左衛門としてある。また享保元年の講中、の名簿を持つて来た、其中に正本屋九右衛門に並んで、其名が(俗名で無く、號のまゝ)にある。

これ丈である。

墓へ参ると極狭い、きたならしい墓地の片端に三尺に足らぬ小石！
あたりに納杉、柿、葛、雞頭、莢豆の畠、それ丈である。

我等は冥想した、玄かし、匪餘小録にある、冠着た温顔も浮ばぬ、難波土産にある机にもたれた老顔も浮ばぬ、何所の甲冑の家に生まれたか、何故武林を離れたか、何といふ三槐九卿に咫尺したか、何として市中にさまよふたか、今はの際にいふべき眞の一大事、半言も無かつたか、残す櫻の花しにほは、これで満足して目をふさいだか、肉身の子は、愚物であつたといふが、孫は無かつたか、慈道の子孫は今に續いて、玄かもいつ頃、から香花は断えたか、馬琴が大阪へ来たとき、既に墓所は知れず、唯此所の過去帳に名があるのみと、正三に聞いたとは、墓までも不明になつたか――

我等は長嘆した、玄かし、網島も變つたが、小春紙治は生きてゐる、二の口村は、ごうか知らぬが、梅忠は生きてゐる、夕霧の情につれて、無い、伊左衛門も生きてゐる、お房も、徳兵衛も、おさんも、茂兵衛も、吾妻も、與次兵衛も、小女郎も、總七も、お千代も、半兵衛も、段々、心細くはなつたが、少くも文

字の上に生きてゐる。

彼は眼前に死んだ者を活かして、そして自分の身を失うたのか。彼は無い者を作つて、それに自分の情を寄せたのか。ロメオ、ハムレット、プロスペロにセクスピアの人格が現はれてゐる様に、徳兵衛治兵衛忠兵衛に彼の情欲、孫右衛門道順、半兵衛に彼の理性と憐憫が分れて現はれてゐはせぬか。

さては一生も墓も不明で好い彼は自身其儘淨瑠璃中の人となるには餘りに無難であつたであらう。彼は自身に墓を建てるには餘りに自覺が薄かつたであらう。何様甲冑の世に生まれた人である。武林を離れても佛門に入つた人である。佛門を抜けても三槐九卿に仕へた人である。仕へてもまた芝居小屋へ入つた人である。京大阪をさまようて嘘の實で世を渡つた人である。今はの際に頓悟も苦悶もせぬ程太平の人である。残す櫻には少しばかり未練のあつた人である。肉身の子の恩には

生前の報酬を半辭して後の計をした人である。まかし慈道の子孫が輕薄であらうが墓はごうならうが、創作まで人の手など、疑はれやうがそこまでは後世の考證家程も苦勞せぬ人である。

我等も亦墓の詮索に時間を費すより河庄の一段でも聞き度なつて外へ出た。



須

磨

須磨寺へ行く表門の前に草刈の籠が置いてある童はと見まはすと、あたりに住ぬいや居ぬ方が空想を現にする中へ入ると、雨側の木立は未十分伸びてゐぬので、いかにも新出来の公園めく、額かぬ笛聞く木下、聞は何所に若木の櫻は左手に在る、これも幾度枯れては植ゑられたか、まかもいつも若木とは若武者の爲か、花の情の爲か、山門は小さいが、馬盤の額は古蹟を象徴する、本堂は粗末なが、此浦の寺としては此方が似合はしい、壽永の昔の遺物を見せる、眞偽にかゝはらず、代々の住持のより注意を惹くのは何故であらう、戦でも哀でも、苦でも、死でも、無爲よりは美しいか、十六で打たれた美少年は八十の老僧より命があるか、寂を命の詫人でも其餘韻を聞いて無韻の詩にするとは、そこに人世の妙がある、須磨寺も美の跡か。

松風村雨にも跡はある、これは自然を人格化して、詠人の戀にした詩人の美想かと思つたら、現實の女があつたといふ、それも亦自然の技巧か、其跡をこしらへるとは人情の美興か、まかしまた淺ましく荒れてゐる、小さい辻堂の様なものがあるが、本尊も何も無く、後に松が二三株、これはまた延び過ぎてゐる、遂に歸らぬ戀人を待詫びて、修飾を怠つたか、姿は捨てゝも枯れもせず、愈延びたのは、それが姉であらうか、妹であらうか。

村雨より終日の雨

須磨の雨こそ誠に哀を極めたものである、松風も泣沈む、其代りに浦波は立つ海は、苦の胸を亂す、空は嘆の顔を隠す、鼠色の帆も見えぬ、海士の子は土佐畫の様な、笥屋所か、新建の別荘の陰の暗い小家で、燐寸箱張つてゐる、街道の農家の軒に掛けた須磨簾は、殊に暗く、濕つてゐる、時に

鼓の音が聞こえる。まかしそれも不治の宣告を受けた病人を慰める爲ではあるまいか。哀も寂も破壊して通るのは汽車の音である。

一谷を通る狭い浅い谷である。まかしこれから先が始めて青松白砂の浦である。いや青松は街道を通る荷車の塵をあびてゐる。白砂は汽車の煙をあびてゐる。それでも矢張青松白砂か。人間に汚されずして最青いのは海である。最白いのは波である。帆も波に洗はれて白い。日に磨かれて光る雲に試みられて曇る。又其間からさす光に笑ふ。三角のが殖えたが、いつまでも日本らしい浦回の景にどこまでも須磨の浦である。まかし里から山の上まで西洋造が多い。西洋造に圍まれて内裏趾といふのがあつた。城趾はそこで無いといふのは幸である。敦盛塚は大過ぎて彼ばかりか多くの哀を集めたものであらうといふ。何にしても戦の痕、京の水で柔になつた骨を収めたか。西の海で海豚の腹に葬られるより優

るであらう。其前の蕎麥屋に彼の名を留めたのはいつから家は何の趣もないが、名にめで、立寄る。

夕方濱邊へ出る。空は紫に紅を交へて京よりも艶である。これでは中納言も詫びてばかりもゐなかつたであらう。はかない夢に蓋をしもせぬ。蛸壺更にくぼくの夢を吸寄せるか。いくぼくの魚を引寄せる。引網同じ様に引寄せられる。客海女も、浪花女も、浴衣着た西洋人も、一團となる。上に覗く三日月暗くなるにつけて、やうく光るのは遠い漁火である。命をあさる火は自身の命の様に心細い。それも馴れて見る者程心細くもないか。更に遠く行くか、それも消える。

現高寺へ行く。芭蕉の句碑がある。彼は夏の始に来て鳥を威す海士の矢先に古戦場の名残を忍び、月を見て物足らず遂に消えて行く。杜鵑の影に鳥一見出した。今は杜鵑も千鳥も見出さぬ。淡路は月より夕日

に紫此身も共に染まる様な。

始めて海に浴する水は冷い様で暖い波は打つ様で穏な海姫の心の様なまかし底の滑な事は明石が一である盆には十町ばかりも海の中まで歩いて行つたが茲は如何であらう兎に角海の中の心持も好いのは海の都か。

夕方師長の塚を尋ねる彼は琵琶の名手で茲を去る時一曲を弾じると跡を慕うて片枝都へ向けた松がある自然が藝術を慕ふとは嘘の様で事實より真いや事實にもある真である自然の跡を追ふ様な凡骨より自然に慕はれる藝術家こそ人間の眞の戀人！あゝ其松は枯れてゐるまかも尙誌して其戀を傳へる人間の情そこに藝術の宿がある。

關屋の跡は何も無い餘所の關と違ひ淡路へ通ふ千鳥は止められず其聲に寢覺する關守の跡はある方が哀であるがそれも時の秋風に吹

拂はれたか關守稻荷といふものが山陰にあるが巡禮の足も止めぬ。

復松風の跡を訪うて海邊へ出ると南の方の空の一片極赤く水に寫つて長く引くのは何の餘情？空は地より自由に叙べる自然の叙情詩海の空は最濃い畫の具を使ふ自然の藝術暮の海の空は最浪漫的な自然の空想自然は凡人よりより大膽な空想家である——

急驟雨——流車より早く晴れて三日月が空想の斷片の様に落ちかかつてゐる笛の音が門を過ぎる。

満月である早く海邊へ出て待つ生憎に曇つてゐるまかし出る月を隠すに至らずまかも赤い段々上るにつけて段々明途に中空に至つて全く晴れた島は銀の夢に入つた海は玉の泡を立てた波は白い裳を廣げて何の踊をするのであらう今歳は須磨で月を見る！

新しい土

二年振に故郷の土を踏んだ。此前歸つた時と著しく違ふのは道幅の廣くなつた事である。電車の縦横に走る事である。人の足も自然早くなつた事である。これからは奥深い代りに薄暗い大阪の家も透明になるか。賑な代りに狭い大阪の町も廣濶になるか。粘強い代りに保守に傾いた大阪の人も熱烈になるか。あゝ新しい大阪はこれからか。透明な家、廣濶な町、熱烈な人——急流の水の都はこれからか。自分は新しい。まかなつかしい土を踏んだ。

泉布觀へ行く。花盛である。櫻の宮を見る。花盛である。まかし自然の花盛でなく人の花盛である。また赤い褌袴で鬼こをする人で無く、藝術の色を競ふ人の花盛である。自分は参考に出してある古書より多くの興味を持つて見た。其新鮮！其華麗！かの古くさい陰鬱な趣は影も無い。また多く手本に依つてゐるが、其創意に任せたら、どんな花になるであらうか。自分が最も見たいのは新しい創造である。

野へ出る。眞晝の日は菜の花を笑はせてゐる。その快活！その豊富！

いかにも大阪を表はしてゐる。また人生の喜を表はしてゐる。

人生の喜！これから眞に味はふべきはこれ！「浮世」とは意氣地のない古人の悲觀であつた。我等は古人より痛切に浮世の憂を嘗めて來た。古人の知らぬ靈の苦を抱いてゐる。まかも其憂も亦命の徵苦も力の限引伸ばす。豚の様に眠るより、毒杯でも飲干す方が本當に活きた氣持がする。我等は苦を樂しまう？ 悲を喜ばう？ 其絶頂に登りつめて始めて大喜悅がえられるか。

日の赤いは花の黄と溶けて痛快な光の海になる！

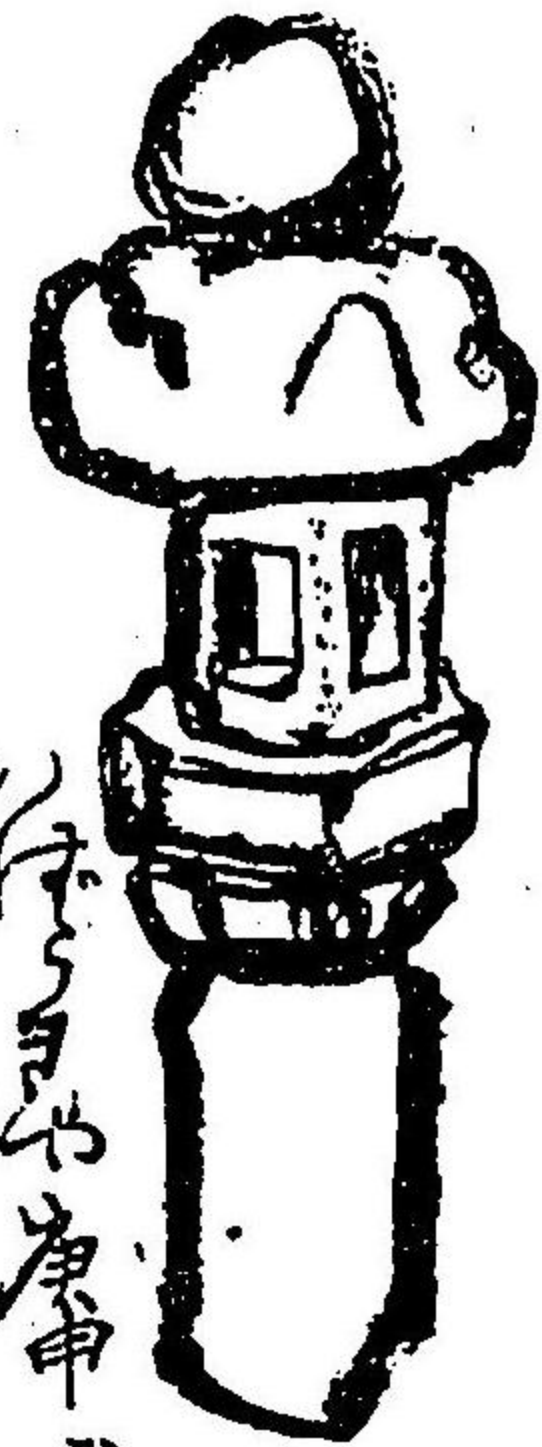
紅葉の外は行かなかつた筈。今は大阪の四季の遊園になつた。けふは櫻は稍老いたが出汐の紅葉は花よりも美しい。若楓の緑は赤よりも奥ゆかしい。道を横ぎつて飛ぶのは雉子か山鳥か。瀧は時も知らぬかほに落ちてゐる。まかし側へ寄つて耳を立てると一定の調子の中にも變化がある。更に目を閉ぢると無言の歌にも意味がある。それは何？人間の言葉でない耳語は人間の文字で表はされぬ。

西の郊外をあるく。東京の郊外より山が近い。丈狭いがより多く西洋的である。禿げた山の半腹に赤屋根の西洋造。フランスの印象派の畫の様。杉垣より蓋薇の垣の多いのも誰の住居？またガラス張の障子の中に金魚を泳がせて贅澤を誇つた淀屋でなく、檻に入れられた獅子の様。なボルクマンか。手持つて蔵へ忍ぶお染で無く、人形の衣裳を脱ぐノラか。自由の波に躍る海の夫人か。鶯鳥が答めるので覗く事も出来ぬ。

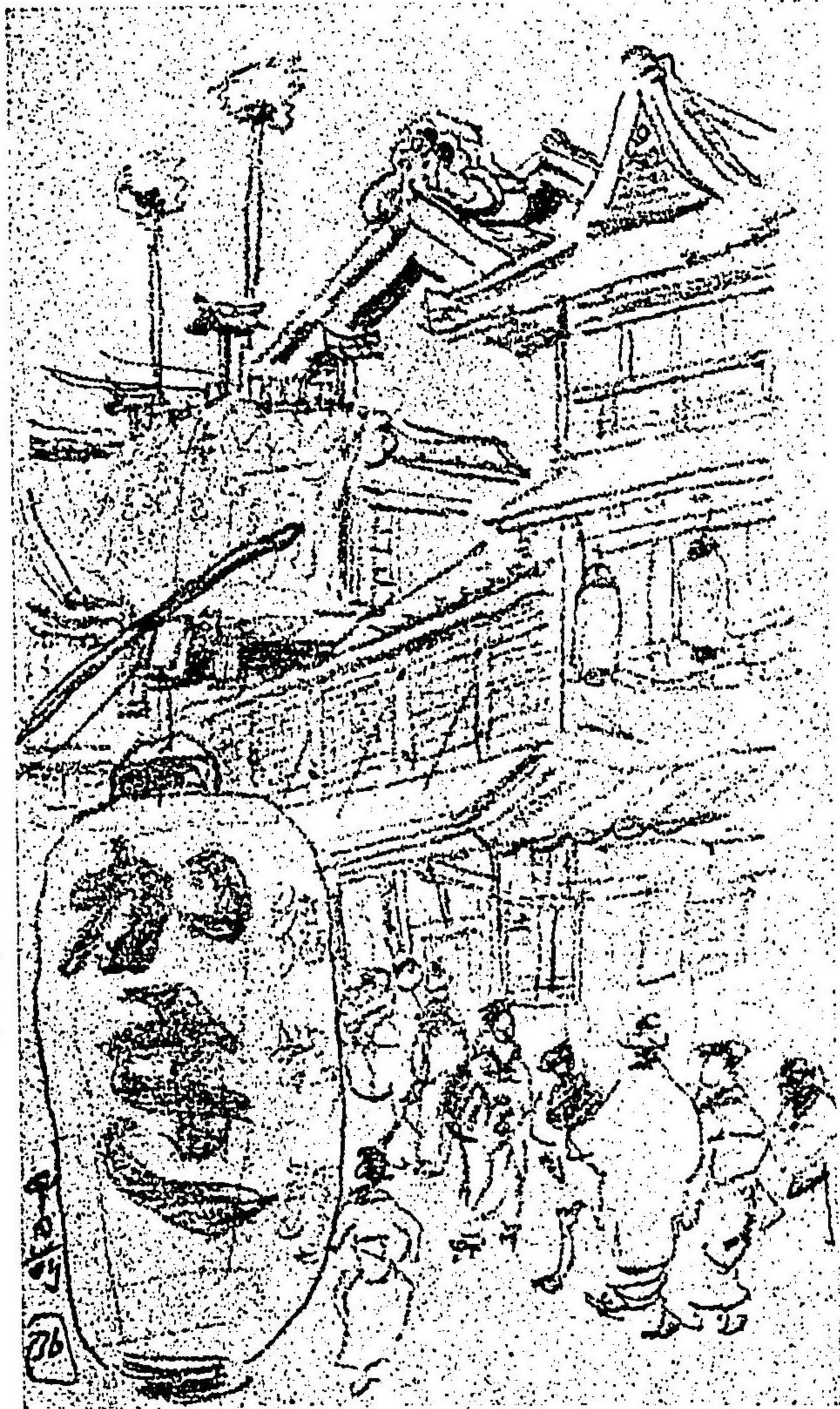
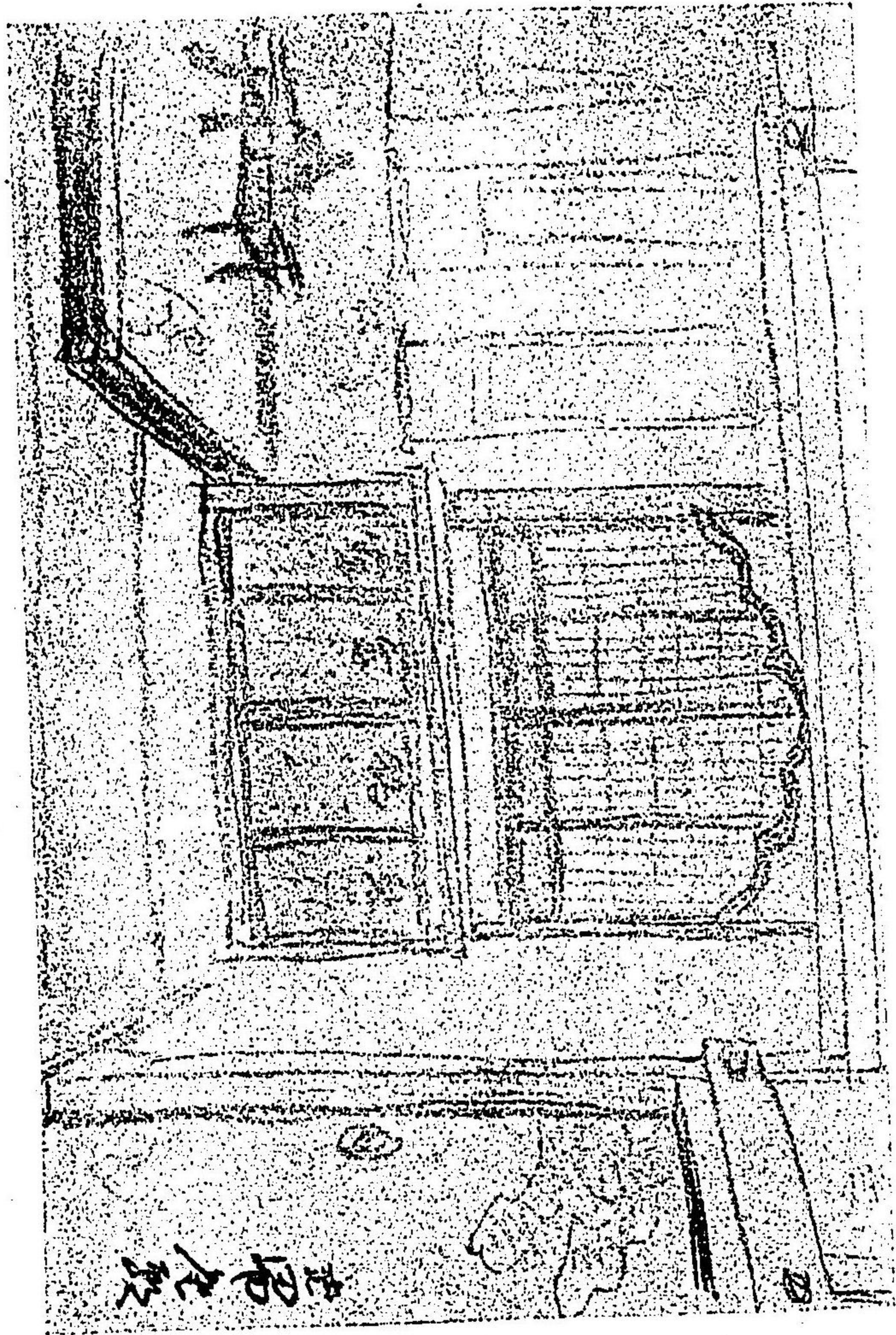
す。我等も海へと近道を求めて行く。道は盡きて、鐵道線路更に隧道の上へ登らうとする。向から白い烟が見える。これも新しい畫料と待つてゐると、汽車は見るまに隧道を抜けてパツと煤烟！避けるまもない。急いで堤へ上ると水は全く涸れて處々窪み、石は骨を砕いた様に散亂れてゐる。松も黒く陰鬱に茂つて梢に鳥の様に鳴く。鶯は何の肉を探してゐるのか。ロシアの小説の中を行く氣がして海邊へ出ると、日まで薄黒く武庫の上に傾いて家も烟向の山も烟水も濁つて煤を溶いた様な。南の郊外は西の程新鮮でないが雅致はある。紹鷗の森は僅に數株、また茶を立てる音は無いが少し離れると青々と茂つて見える。天下茶屋は表を閉ぢて、また一休する。草履取もないが安倍野神社は好い程に木立も延びて、石段に垂れた糸櫻は町の春より早いといふ。裏から東へ細道を幾曲疎な松の林がある。梢を隔て、疎な家、低い谷向の傾斜、茂つた木立物を思ふに好き相な下りて又上ると別荘が多い。それも彼方と違

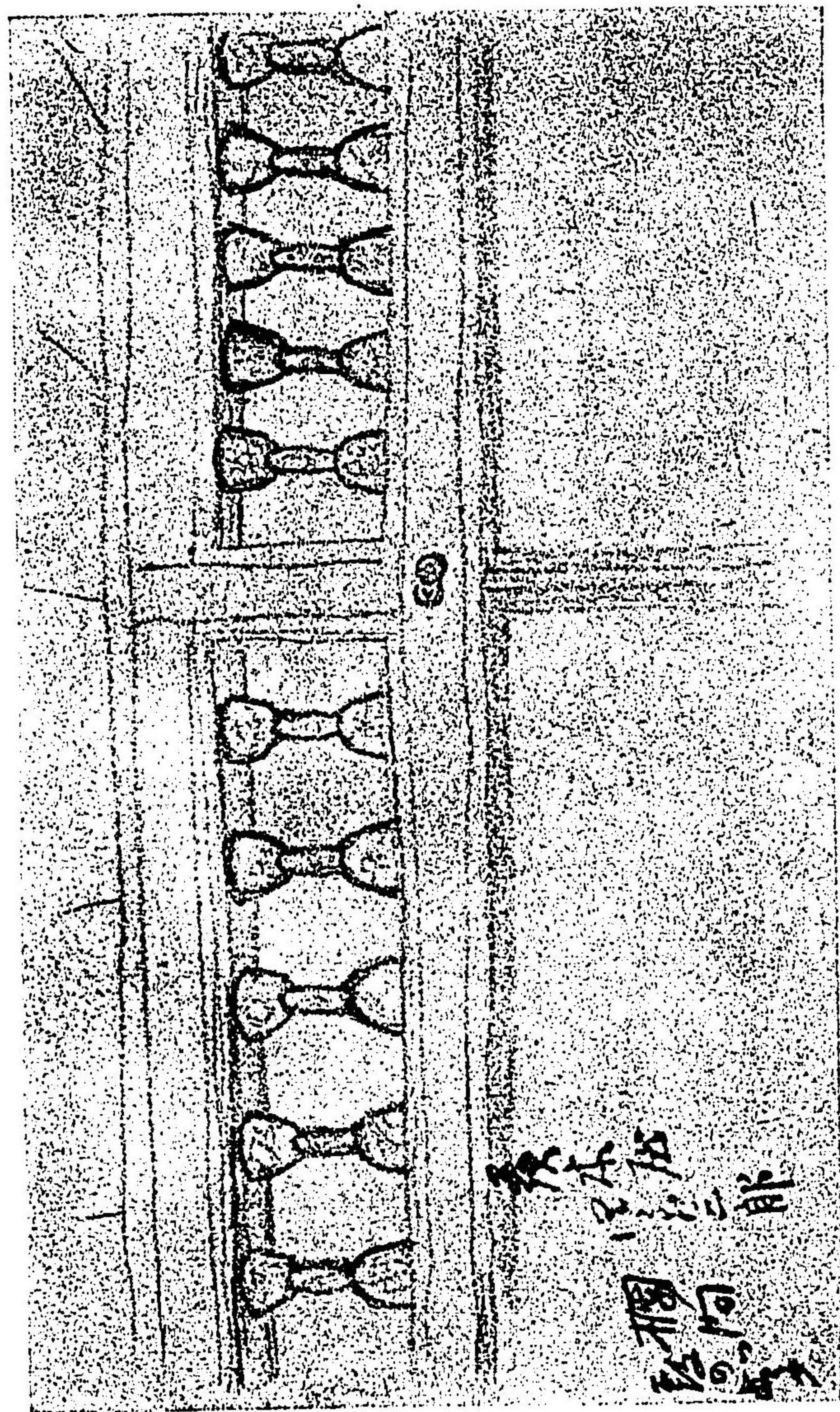
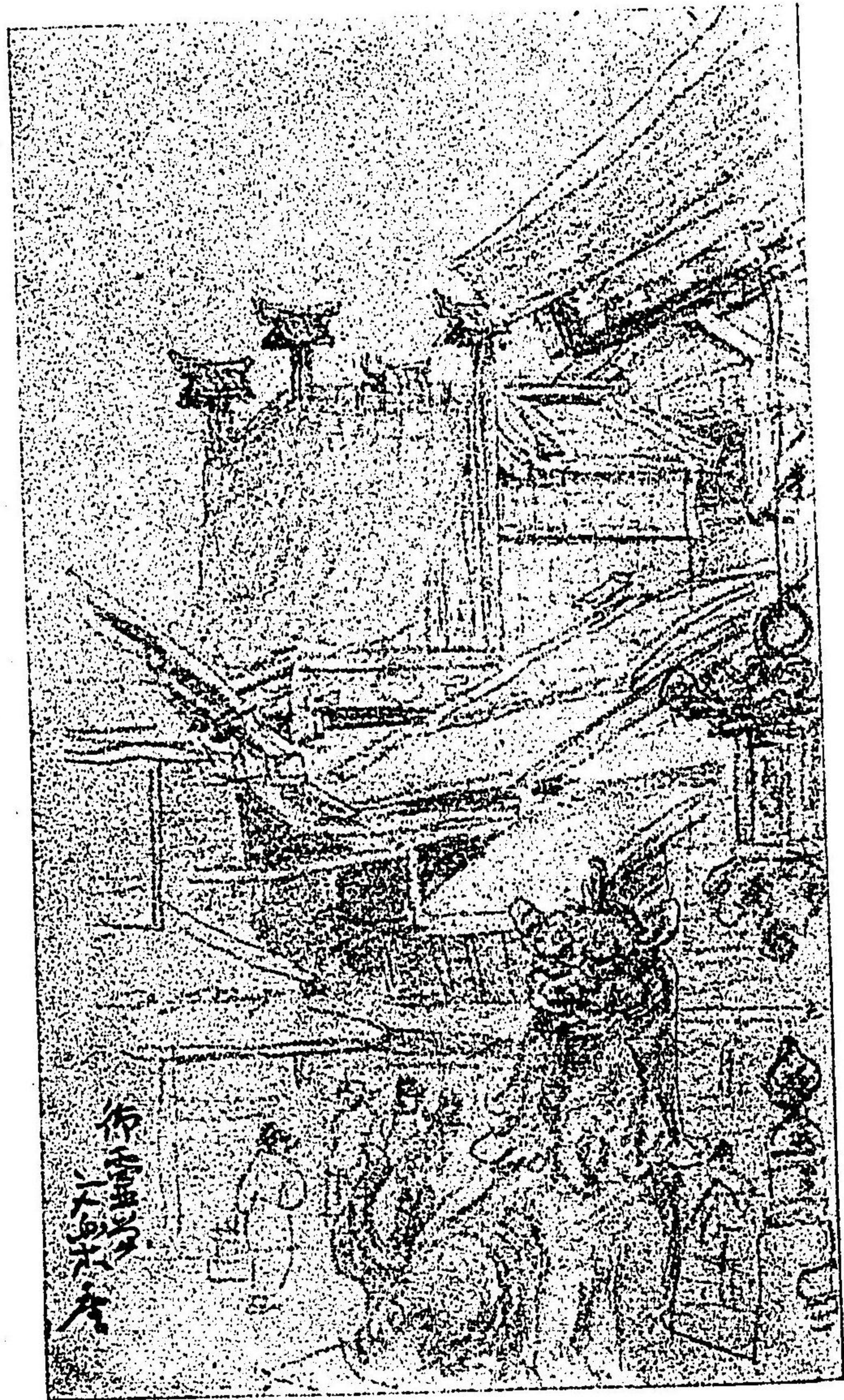
うて古雅な垣奥深い庭閑人が隠宅か、いや蜜蝋を飼うてゐる家がある。人間より論理正しく自然の大法に従うた生活は如何なものかと覗いて見ると、菜の花牡丹燕子花蓮花草其外西洋種の花の中に二尺ばかりの小家いくつ中には幾重薄板に取りつく住民此社會の爲に労働するばかり特別の報酬も無い代りに生活の安全をえて何の不平等も洩らさぬ労働者労働せぬ代り次の種族を産出して永久の生命を維持する女王其跡を追うて同輩を飛ばけ空中高く結婚して愛と同時に死をえる王婿あゝそれが真に幸福であらうか。其中にまた孤獨の蜂があるといふ彼は群集に交つて刺されてゐるか花の間に離れて獨嘯いてゐるか最も高く空中に登つて愛も死も見下してゐるか。聖天山を越えて酔花苑を叩くと石楠花が窓の外に酔醒の顔を吹かれてゐる。中にはサイネリヤの色々女學校の文藝會の様に目ざましい。霸王樹は蛇の様に垂れて、赤い花を着けてゐるのはクレヲパトラ型の女か、白いフヲ

ーゲット、ミイ、ノットはマルガレテ？イブニングダ、ブルムローズはヘダ？デレニアムはマール？黄のチユリップはベアタ？デイシイはメリサンダ？スノウドロップはモルダ？——郊外は新しい花につれて新しい女を養成するであらうか。



新しい女を養成する







大阪遊記



吉井 勇

讀者よ私が今書かうとしてゐるこの傳奇的な紀行文は僅かな事實を骨子としてあるばかりで他の大部分は空想であると云ふことを前以て知つて貰はねばならぬ。かくて私は一人の哀れな青年となつて貧しい戀の物語を讀者に傳へるであらう。

私が東京を出發したのは殆んど一種の逃亡であつた。私はそれより一月程前から不思議な苦痛と不思議な恐怖とが次第に私の胸に迫つて來るのを感じた。それは或る一人の女と私の間に起つた悲しむべき出來事が重にそんな心持に私を誘つたのだとは云ひながらこの都會の數多き感激に私の身が堪へられなかつたと云ふこともまた否むことが出來なかつた。さうして私が心密かに逃亡を企らむでゐた時は

(84)

からずも過去の記憶の中から滑かな發音を持つた言葉を見出して、「さうだ。大阪へ往かう」と思はず自分に向つて叫んでしまつた。

逃亡をこころ密かにたくらみぬそれも悲しき戀のすさびか

東京は悲しゆうへの散歩にもなほわかうどの涙さそへば

君と別れいづこともなく往くことがなごか我身にうれしかるべき

逃亡かただかりそめの厭世かとまれふたたび東京を見じ

わかうごよさはな歎きを苦しむはた悲しむもみな生きむため

大阪はうつくしき夜をつくりつついまわが往くを待つと云ふかな

やはらかき夢見る聲にあこがれぬこの頃深くものおもふ子は

(85)

私が大阪へ着いたのは突降る夜の深更であつた。私は停車場を出る

と直ぐ一臺の車を備つて或る客舎までの暗い街を走らせた。兩側の家はすべて盲目のやうに戸を閉ちて、この哀れな旅人を見送ることもしなかつたのは私に取つてはかへつて幸であつたと思ふ。何故なればその時車の上にあつた私の顔には殆んど「死」と云つても好い程の鬱憂な表情が現はれてゐたらうから。

私は客舎に着くまでの半時間をすべて黙想のために費した。私は次第に大阪と云ふものの幻想に捕はれて往つた。幾多の院本の中にあつた美しい男や美しい女の一群が夢のやうに私の頭を通り過ぎた。

「情死」

この黄金のやうに輝いた言葉が幾度か私の胸に響いた。

停車場を出づれば冬の夜のあかり仄かにさしぬさすらひびとに家はみな暗しなかにはいと古き人の情のなきがらや住む

大阪よ汝はなにゆるに青ざめし横顔をのみわれに見するや
心中のふたりが呼吸のきこゆるよこの夜難波の昔おもへば
夜は更けぬ寒の音も高まりぬ大阪びとも悲しがるらむ
うつくしき女のために身を殺す男もありきいにしへなれば
元祿の戀をおもへばそぞろにもわが身は悲しいまの世に生く
鬱憂はわれをさらへて云ひけらく汝が胸こそ住みよかりけれ

客舎の一夜は私が久しく忘れてゐた旅情と云ふものを想ひ起させ
た。翌日眼を覺ました時は私は昨日とはまるで異なつた心持ですべて
のものをみる事が出来るやうになつた。私は床の上に横たはりながら
熟睡むやうな回想に耽つた。併しそれは巡航船が直ぐ前の溝渠を駛る
音のために破られてしまつた。私は障子に映る黒煙の影を眺めた時何
だか自分の胸に醜い汚染を見出したやうに悲しかつた。かくて私は二

度目を閉ぢて深い回想の中に落ちた。

私は起きて椽側に立つた。曉の空が銀のやうに光つてゐる。下に溝渠の水は重く濁つて流れてゐた。遠くの方に鐵橋の黒い姿が見えて、河の上に群がつてゐる舟はまるで眠つてゐるやうに動かない。さうして私の眼は飛び迷つてゐる一群の鷗の後を追ふて、幾度か水の上を往つたり來たりしななければならなかつた。

(88)

旅びとや行李も置かでかなしみの廓尋ぬる子となりけり
堪へがたき旅愁をおぼゆこのおもひ七日つづかば身さへ細らむ
おもひではやがて涙を誘ふらむ枕濡らすも旅めきてよし
あかつきの銀のひかりや胸を射る戀ならなくに痛みおぼゆる
橋を見てまた何ごとか思ひ出しわかうごの眼はうるみきたりぬ
ああ鷗汝もかなしきさすらひの子かと思ひて大河を見る

私はそのロ一日を文樂座の棧敷で送つた。私の魂は何時かあの肉聲の潮の中に溺れてしまつた。さうして舞臺の上の人形に烈しい藝術の呼吸が吹き込まれた時私はすべてのものを忘れなければならなかつた。この時私には喜びもなければ悲しみもなかつた。私は唯空虚な胸を抱いて、舞臺の上の人々の小さな心臓の響を聴いてゐた。場景は幾度か變つた。私の心持もそれに従つて變つた。観客はすべて爛醉した人のやうに、ひたすら舞臺へ向つてその凝視を續けてゐた。さうして私もその観客の中に交つて同じやうな凝視を續けてゐたのである。
併し私は直ぐ近くの棧敷に一人の女を認めた時二度我に歸らなければならなかつた。

(89)

文樂座のなかに入りしやはた夢のあまた群がるなかに入りしや
君を忘れ戀ものろひもみな忘れ途にわれさへ忘れけらしな

人形が泣きつつかたかなしみのうつくしきにも驚けるひと
黒きひとちさくかはゆき戀人をふたり殺せり運命のごと
ちひさなる魂を持つ人形よ汝もかなしき戀を知れりや
やるせなき戀のなげきの歌を聴きふとわれ思ふ死なましかばと
うつくしき舞臺の上のまほろしをなごかなしげにかくは凝視むる

その女は三年まへまで東京にゐた女で、その時分は私に取つて痛ましい謎だつたのである。私は最初その女の横顔を見た時まづ驚愕の眼を見張つた。さうしてその次に女の眼が私の方を向いて微笑した時私の體はすべて喜びとなつた。それから云ふものは私は二度舞臺へ向つて凝視を續けることが出来なくなつた。

私は立ち上つて廊下へ出た。さうして觀客の喝采を背後に聴きながら、また何時もの默想に耽り始めた。併し直ぐそれは長く聴かなかつた。

女の聲のために妨げられた。

「まあ嬉しいこと。女は誇張した表情を見せた。ほんとにこんな所で眼に懸るなんて、やつぱり何かの因縁なんですわね」

君戀しかの東京を逃れたるひととおもへばさらになつかし
再會はかなしその時ゆくりなく君が挿櫛落ちにけるかな
喝采に遠ざかるこそはかなければとへ愁をもてる子ながら
わが耳に風うれしげにささやきぬともに往かずや夜半の闇路を
わが君はふたたびわれを誘ふらむかなしき戀にうつくしき死に

私はその夜女とともに暗き市街の中を歩き廻つた。私は女の聲が何時か滑かな發音を持つてゐるやうになつたのに驚いた。さうしてそれはその時女が私に語つた戯曲的な話に最ふさはしい言葉である。と考

へすにはゐられなかつた私達はかくて人情の底のやうに暗い巷を何處へ往くと云ふこともなしに歩いた。

私達は橋の上に佇んで黙つて夜の河を眺めてゐた。水は黒く流れて私達を恐怖に誘ふやうに見えた。併し月光が輝き始めた時にはもうその心持はすべて無くなつてしまつた。兩岸の家の屋根から石崖までまるで金屬で造られたもののやうになつた。さうして河はこの時速かに面を現はして銀のやうに冷たく笑つた。

難波びと笑ふともよしわが君とこの夜手取りて往きてかへらじ

大阪の女の聲をやはらかく聴くがまにまにさそはれて來し
橋の上にあたり佇み水を見る三年むかしの戀のならばし
月の出ははかなきものかおもひでもおほかた盡くる時とおもへば

私達は二度歩き始めた。さうして一時間の後には二人は道頓堀の群集の中に交つてゐた。五座の劇場が高く聳えてゐる前に立つてこの藝術の寺を讚美するやうな姿で多くの人は掲げられた招牌を仰いでゐた。私達は急いでこの前を通り過ぎた。さうして遁げるやうにしてこの群集を離れた。唯二人でゐるのを好むのは昔から戀の習慣であるから。私達は次第に騷擾が遠ざかるのを聴いて始めて顔を見合はせて笑つた。併しそれは極めて寂しい笑であつた。私はこの時まで女が今何處にゐるか知らなかつたから急に思ひ出したやうにそのことを尋ねた。

「南地」

女は待ち設けてゐたやうにかう答へて私に知らないのを怪しむやうな顔付で私の方を振向いて見た。

ひとごみの道頓堀の宵あかりそれも二人は怖れけるかな

招牌に蔽たばしる夜のあらば歌舞伎見る子も悲しからまし
あなここは悪のにはひのするところ戀するひとの入らざるところ
大阪の淺草に來てかこつらくこも苦痛の谷と云へるや
月光のあかるき街を往きながら道に迷へとねがひしや誰
わかうごよ悲しむなかれこの夜かの南地に往かばよろこびを得む

私はこの女とともに數日を送つた舊歡は二度私達の胸に想ひ起さ
れて來たかくて私はいと切に元祿の人々の戀を悲しみながら何時か
私の身がそれと同じやうな運命になつて往くのを知らなかつたので
ある。

或る日私は一日女と別れてゐなければならなかつた私は水のやう
な冬の午後の日光を喜んでそれを浴びながら市街を散歩するため
家を出たさうして私は何處に往くと云ふ考もなく唯足に任せて歩い

て往つた。まるで哀れな漂泊者のやうに。

戀をして往くところまで往かしめよ元祿びともかくは叫びき
われとわが命をのろふ痛ましき死をちかひける戀ならなくに
悲しげに女は云ひぬ何處より何處へ往くやわれらふたりは
大阪は戀にふさへる街とさくさらばふたりにさいはひのあれ
冬の日はのろふがごとく輝きぬ君よ空をば仰ぎたまふな

私は何時の間にか同じやうな形の家が並んでゐる街に入つたそこ
では絃歌の聲が悲しげに聴えて涙のにはひが冷たく四邊に漂つてゐ
た私はこの歡樂の廢趾を眺めて時を云ふものを悲ますにはあられな
かつた。

「蜷川」

ああこの美しい名を屢歌に歌はれた川は今如何なつたのであらう。私は次第に滅びて往く夢の街をこの時心から歎いた。さうして暫くはこの街を去ることが出来なかつた。

何時か薄暮になつてゐた私は市街が夜の中に沈んで往く光景を恍惚として眺めてゐた私は数多き燈火に烈しい誘惑を感じながら街から街へ足を運んだ。こんなに長い散歩は東京にゐた時からの習慣ではあつたけれども大阪の夜が美しかつたと云ふことも餘程私の胸を躍らしたのであらうと思ふ。

蜷川名のみ残るも悲しかり戀ゆる死にし人をおもへば
夜となりぬ燈火の數まさりきぬわかうごの胸躍らざらめや
大阪のうつくしき夜につつまれて君を忘るるわれを忘るる
誘ふは夢のやうなる夜のいろかゆきすりびとの髪のかをりか

大阪よ汝がなまめきし夜の姿いままほ切におもふと云ひぬ
冬の夜の闇もわが身にあなたかし情知る子のおほき街ゆる

その夜私は女とともに或る橋の近傍にある牡蠣船に入つた。それは女の知つてゐる力士が營んでゐるものであつた。かの長江に浮んでゐる華舫ではないけれどもこの船の上の饗宴は少なからず私の心を喜ばせた。私は今まで私の胸から離れなかつた鬱憂をこの時すべて振り落したやうな心持がした。さうして私は快く杯を女に與へながら云つた。

「己はもう東京へ歸るのが厭になつた。」

女は唯軽く頷いたばかりで何も聲に出しては答へなかつた。夜が更けて橋の上から響いて來る足音も次第に疎らになつて來た窓から覗くと水には氷つたやうな星が冷たく映つて、冬の聲が何處からともな

く悲しげに聴えた。

牡蠣の香に戀をおもふも覺束なやがて別れむ君にむかへば
鬱憂に溺かれしわれとおもふゆる夜こそいと悲しかりけれ
憂ふるを戀するひとのならばしと思ひ初めしもわが君のため
水の香は薄情に似てなつかしやまいてやそれを君も好めば
力士ありき戀にふさはぬ聲あげて戀びのごとわが君を云ふ
冬の夜の星屑をだに悲しみぬ大阪に來てもものをおもへば

(98)

力士は私達の所へ來て快活な調子で多くの浪華巷談を聴かせて呉
れた彼は藝人らしい狡猾な表情をその面に浮べながら濁聲を上げて
私達を笑はせた併し私はその頬に残つてゐる怖ろしい傷痕が何だか
私を脅かすやうで心から笑ふことは出来なかつた彼はその傷痕を指

差してこれがために東京を脱走したのだと云つた。

私達が歸る時も力士は途中まで送つて來たさうして別れる時に彼
は急に私の傍に近寄つて來てその身がすべて嫉妬となつたやうな調
子で云つた。

「早く東京へお歸りになつた方が好うがせうせ。」

のろはれぬ悪魔のごとき眼差がわれに向ひてあるを怖るる
わが君の明日をおもへばかなしかりわざはひの手をいかに遁れむ
魔さへ見ゆ恐怖のさむき手さへ見ゆわれらが戀も終らむとして
妬まるるわれを思へばほほ笑まるかくてはじめて戀甲斐のある
大阪の戀も終ははかなかりむかしはかかる時に死にけむ

(93)

私はこの夜から二度不思議な苦痛と不思議な恐怖とを感じなくつ

てはならなかつた私はそれから遁れるためにかうやつて大阪へ来たのであるが、今またそれがために惱まされるならば、二度何處へか逃亡をしなければならぬ。私は一夜このことのために苦しめられた。さうして私がその曉に見た悪夢は、まるで私の運命であるかのやうに怖ろしかつた。

私は女と別れねばならぬ時が来たと思つた。さうして二度都へ歸らねばならぬ時が来たと思つた。文樂座の人形芝居も夜の溝渠も船の上の饗宴もすべて痛ましき過去となつて、長く私の胸に残るであらう。

(100)

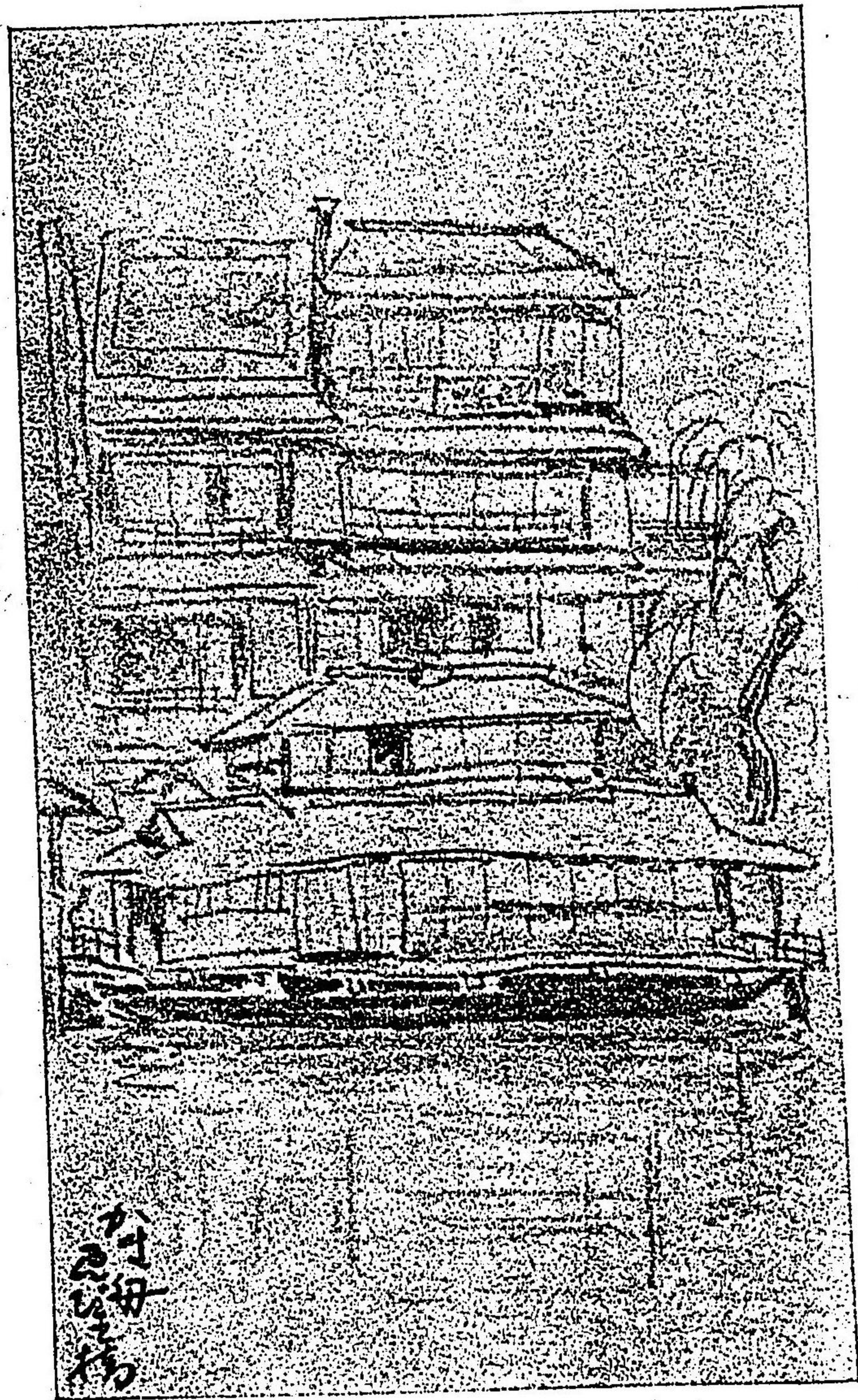
逃亡をふたたびはかるわかうごは胸の苦しさ堪へがたしとて、鬱愛はまたわが胸にかへりきぬ。今日もはかなし明日もはかなしあはれなる思ひ出として残るらむかのやはらかき君が言葉も忘れざり忘れたまふなかく二人言ひかはすことあまたたびして

別れてはまた會ひがたしいたましき最後の親嘴に涙ながるる

私はこの翌日は東京へ向つて進行する汽車の一室に、疲れた身を横たへてゐた。さうして私はあの呪ふやうな力士の眼を忘れやうとしたが如何しても思ひ出されてならなかつた。私は頭を重く振つて眼を閉ぢた。さうしてはからずもあの女の微笑した顔が鮮やかに私の眼に映つた時、私は思はず窓を開いて大阪の方を望みながら心の中で叫んだ。「さらば大阪よ。」かくて私は次第に大阪から遠ざかつて行く列車を怖ろしき運命の車と見なければならなかつた。

(101)

大阪よさらばと云へばはらはらとはかに涙頬をまろび落つ怖ろしき眼はわが前に今日もありまたたきもせず見守りてあり

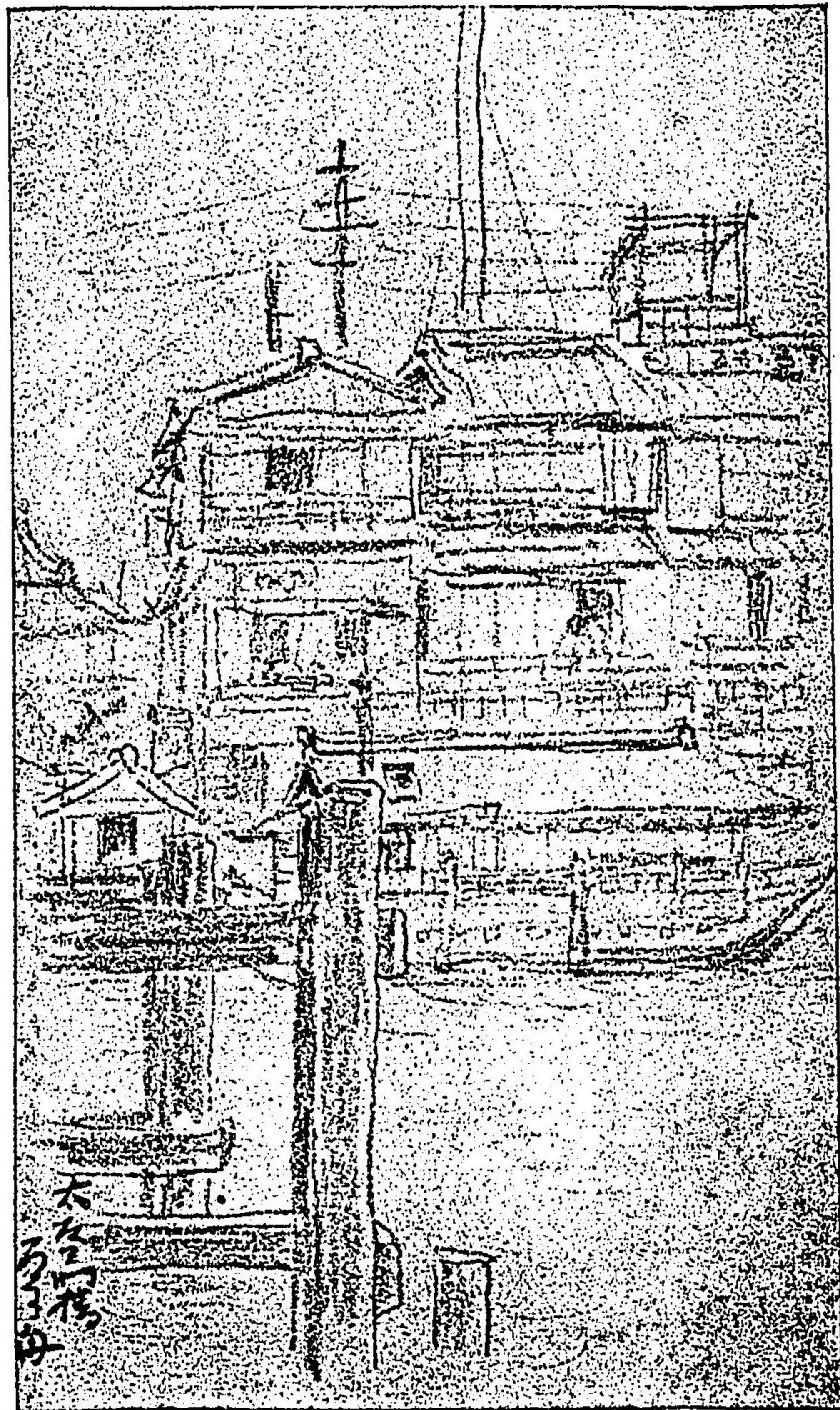
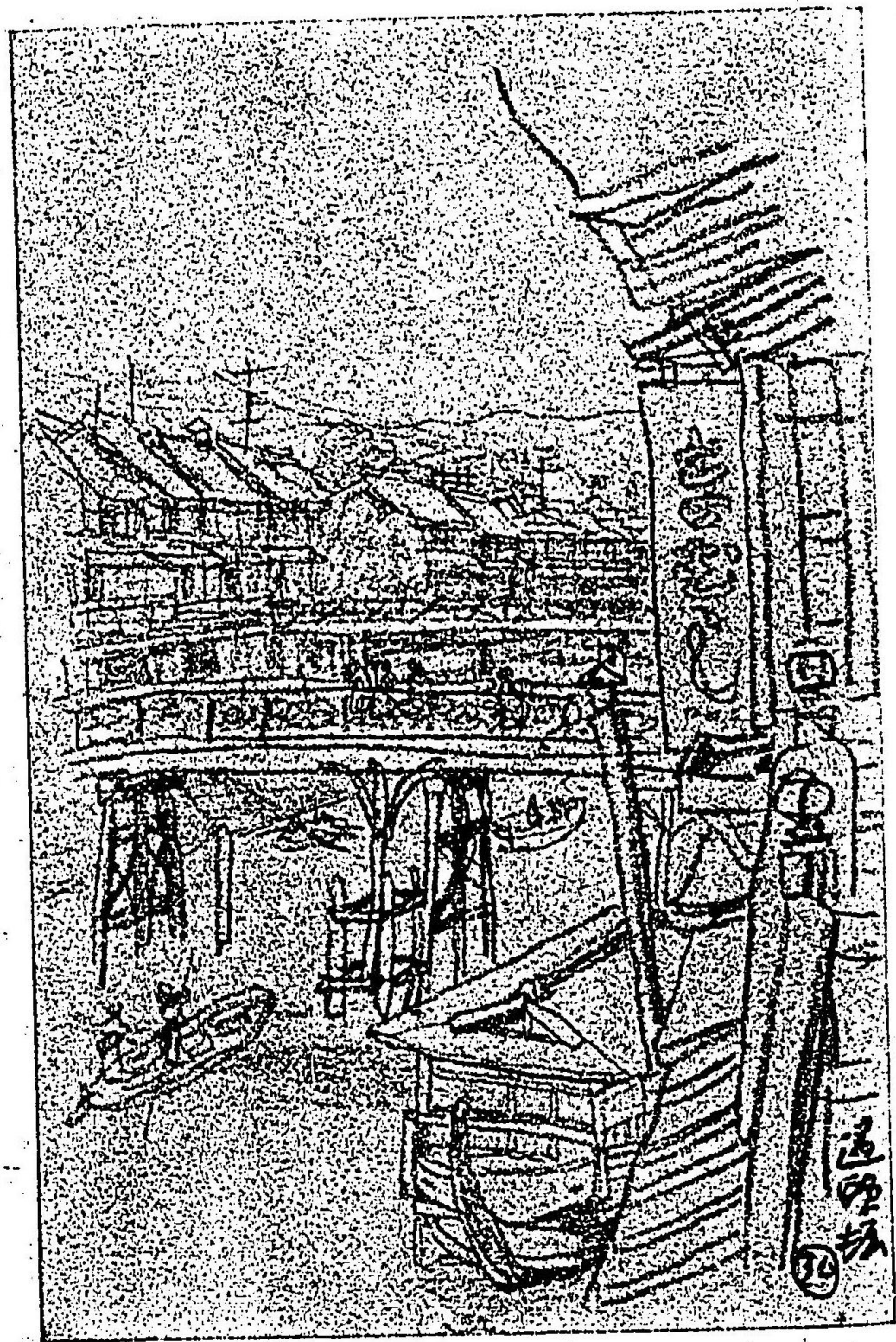


かき
かき
かき



かき
かき
かき

わが流車の轍のひびきたかくしてしづかに君を思ひかねつも
 うつくしき夢を見る子とならむ時われはふたたび大阪を見む
 さらばわが悲哀の街よ元祿の戀のみやこよすこやかにあれ (終)



大

阪



木下李太郎

大阪は今の子に取つては既に概念に過ぎない。最後の大阪見物からもう二年経つてゐる。今過去の崇拜及び愛執の情を振り返つて見ても定かにその時の鮮かな心象を掴むことは出来ない。當時子の携へて行つた寫生帖には半面に燈火を浴びたる豊澤吉兵衛の顔眉間に深い皺を寄せ眉をあげ眼をつぶつて「釋迦誕生會」門外之段を語る越路の面或は心配氣に絃をかちくる豊澤吉松白眉長く垂れたる温藉なる攝津大椽の相その絃の廣助また女義太夫竹本春廣その他いろいろの歌うたふ女の苦面道頓堀の萌黄の前垂をかけた女河岸の白壁に塗り上げられたる「白鶴」「福翁」——さう云ふ雑多な光景がまだ消えずに残つてゐるけれどもそれ等の要素を取り入れた子の感受性はもう既に銷じ

去つてゐるのである。

今でも然し予は常々大阪と云ふ所を深く味つて見たいと思つて居る。勿論その文明は江戸三百年の文明より根柢が更に深い。江戸の歌舞音曲の歴史と上方のそれとを比較して見てもすぐ分ることだ。荒事一天張で通つた無邪氣な藝術の後をうけた今の東京の舞臺でも雁次郎延二郎のたとへば紙治などはあも事々しく目立つのではないか。近頃は一般の文化も高まり藝事を賞翫する餘裕も多少出て來たゆゑ自然東京の人たちも上方の役者を最負にするやうになつた。帝國劇場の繁昌は別としてもそこで歌舞伎座が衰へ松竹が榮えるといふわけである。

今の東京は植民地のやうに人心が緊張してゐる。多少残つて居た江戸の文化及びその情調も根柢が深くないだけに、もう殆んど崩され、丁つたか乃至痛ましく改作せられて居る。そこに行くともまだ大阪の都會